

第6回 銀華文学賞発表

銀華文学賞

銀華文学賞もおかげさまで六回を重ねることができました。今回もまた日本全国および海外から、五二六篇の作品が寄せられました。昨年の四四九篇をはるかに超える御応募をいただきましたことを、心から御礼申し上げます。

多数の応募作の中から、選考委員／大高雅博・八寛正大・小沢美智恵・小浜清志・五十嵐勉による厳正な審査の結果、以下の通り受賞作が決定いたしましたので、ここに発表させていただきます。優秀な作品、力作、佳作も多く、たいへん充実した選考となりました。

また本年も故河林満を偲んで、御遺族の御厚意により河林満賞を選出させていただきました。

なお、誌面の都合により、奨励賞などの作品は三四号以降に順次掲載させていただきます。御期待ください。

第六回銀華文学賞授賞式・祝賀会および懇親会は、二〇一〇年一月三十一日（日曜日）午後二時より東京の大田区民プラザにて「文芸思潮」エッセイ賞・現代詩賞授賞式などといっしょに行なう予定です。どなたでも御参加可能ですので、どうぞお誘いの上御来場ください。

第七回銀華文学賞も昨年とはほぼ同じ要領で行ないます。皆様の御応募を心からお待ちしております。

当選

「線路は続く」

楡木啓子（北海道札幌市）

「光のケーン」

藤原恵一（埼玉県さいたま市）

河林満賞

「白い哀しみ」

前岡光明（東京都町田市）

優秀賞

「幻臭」

室町 眞（東京都杉並区）

「道標」

井上梨白（神奈川県横浜市）

「ワンス イン マイ ライフ」

二宮英郷（東京都渋谷区）

「ガラス」

森崎房枝（東京都杉並区）

奨励賞

「名残りの月」

田島朝美（東京都日野市）

「歳月」

丸山 史（大阪府八尾市）

「緑のアリ」

吉野光久（神奈川県横浜市）

「カナカナリンリンリン」

鈴木英夫（東京都小金井市）

「ぬくい北風」

田宮佳代子（北海道上川郡）

佳作

「源流」

小西九嶺（奈良県奈良市）

「沖見茶屋」

佃 陽子（神奈川県横浜市）

「轟音」

篠宮安紀子（東京都練馬区）

「再会」

大重晴よし（静岡県浜松市）

「星降る里にて」

犬丸らん（東京都練馬区）

「予告」

相川柊子（千葉県千葉市）

「戻り道」

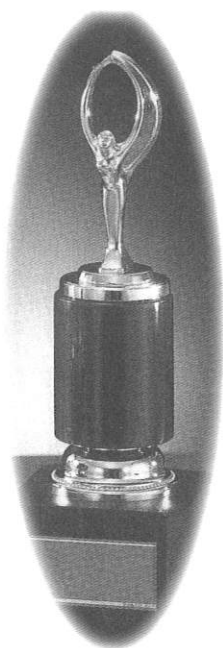
足立 剛（兵庫県水上郡）

「グランド・オダリスク」

松丘光一郎（東京都江東区）

「君は終幕を前にして佇むか」

土田ひろし（静岡県沼津市）



力のある言葉

八覚正大



力のある言葉とは何か。

最近、そればかり考えている。書き言葉に物理的重さはない。それは見られることによって初めて存在する。たとえ見られても読まれなければ紙に印字されたインクの染みに過ぎない。しかし、それが一旦読む側の脳に入ると人を感動させ、また落ち込んだ気持ちを腑活させ、時に身体さえも動かすような——そんな言葉とは何なのだろう。

かつて、文学（書き言葉）に人生を賭けた人々がいた。文学を至上のものと憧れ言葉の力を信じ、人間の真実・秘密を掘り出し書き出したいと実生活さえ犠牲にした者たち……しかし冷静に考えると、それらの行為さえ実は脳の活動という生理的な次元で捉えられることが分かってくる。心理学・精神医学・大脳生理学が進み、脳神経の機能・生理が解明されつつある昨今、人間の願望・欲望さえも、あらゆるレベルまでは科学的に解明されるようになってきた。

さらにパソコン・インターネットの進歩と普及により、あらゆる情報膨大に増えている……そんな中で文学（書き言葉）の意味とは何なのだろうか……その復権を盲目的

に叫ぶのでもなく、至上なものと祭り上げそこにすがり安住するのでもなく……それでも「言葉」という人類が生み出した不可思議な「発明品」を、再びよりよく機能させ得たらと思う……。

さて、さすがに応募総数が五〇〇を超えると、どうにか「言葉力」に出会い始めることができるようになった気がする。数はやはり質を高めるのだろうか。

当選作の「光のケーン」（藤原恵一）は、一言でいえば障害児を息子にもつてしまった父親の日常に寄り添った小説である。文が柔らかいというか、優しいというか、暖かいというか、なめらかというか……読みやすいのだ。それなりに裕福な家庭の息子ケーン（健一郎一八歳）は特別支援学校の高等部に通っている。主人公の父親は土曜日の午後、彼を養育施設へ車で送り迎えをする。その運転途中での「内的対象としての息子」との対話。いままで保護していた息子は年齢と共に発達（変化）していく。それを理解しようと父親はバックミラーに映る息子の顔を読もうとする。《ケーン、ケーン、何を言っているんだ、パパが知らないとも思ってたか？ パパはな、ケーンが考えてることなんか、ちゃんとわかってるんだ。ケーンがほんとうはどんな子か、ちゃんとわかってるんだ。そうなんだ、パパは、わかってたんだ。じゃ、僕の今一番つらい、ほんとうのほんとうの悩みって、なんだか、わかる？》……この独

白に近い父親の気持ちの投影は実は個体としての宿命を負った人間が、寄り添いという本能をどこまで伸ばせるかという一つの実験でもあるのだ。やがて個体としての父親が老い、息子は理解の枠から剥がれていくかもしれない。しかし「いま・ここ」においては極上の時間がある。《今ここに、ケーンとこうして過ごす時間、息を継いでいるわずかな空間。……ここには、妻の千冬もいない。……ケーンと二人だけいる高揚感、あれらの時間が持っていたものとはまるで性質が違う。自分の愛する子供といっしょにいる、というだけの幸福感とも違う。それ以外の、何かもつと大きくて豊かなものだ》と。大江健三郎と光君を連想しても構うまい。また出だしの古書店での情景の書き過ぎも指摘はできよう。さらに名前やタイトルの付け方にもっと推敲は可能だ。しかしそんなものは直せばいいのだ。この小説には、おそらく実体験を元にした、人間の関係を柔らかに深くさぐる「言葉の力」がたしかにある。

もう一つの当選作、「線路は続く」も秀作である。嫌な

というか、その感覚を理解しがたい夫と何十年も連れ添った妻の思いがよく描かれている。世界は狭いのだが、ラスト、脳出血で倒れた夫を、見捨てないところがいい。《これが自分の役回りなのだ。世話をするものとされる者。どこまでいっても自分はされるほうにはまわれないのだ》という自己認識。そしてやがてくる「その先」を暗示させて

終わる。一段落させたうまい止め方ではある。ただ、その先を幾分なりとも（経験的に知ってしまった読者）には、動かされるような「言葉の力」までにはならなかった。

「ぬくい北風」（田宮佳代子）——十八歳で十勝へ嫁いだ女性の一代記。生き生きとした会話文、また老婆の視点の

河林満賞の創設について

河林満文学賞は、二〇〇八年一月十九日脳出血で急逝した作家・河林満を偲び、その文学への情熱と創作にかける志を遺す意を込めて、御遺族の寄付を基に、二〇〇八年十二月十日に創設されたものです。故河林満の文学への熱情と響き合う、優れた小説作品・創作活動への顕彰とさせていただきます。

贈賞作品は銀華文学賞に応募される小説作品を対象にし、銀華文学賞選考委員会によって銀華文学賞選考会において同時に選考され、御遺族の承認によって決定されます。

受賞者には賞状、賞品、記念品、賞金五万円が銀華文学賞授賞式で授与されます。

この賞によって、たゆまず小説創作に情熱を燃やす方々に光を当てることができましたら幸いです。

作家集団「塊」

文芸思潮

暖かさ。ここには人間の生命力のなんというか、大らかな
 ホールディング作用（包み込み）がある。最後に、老婆が
 「母ちゃん母ちゃん眠いよ母ちゃん。わっしや、めんこい
 赤ん坊よ」と言って終わる。生と死の大らかな円環を見る
 ようである。紙面の関係でこのくらいしか書けないが、こ
 の小説も「言葉の力」を十分に感じさせる作品である。評
 者としては、「光のケーン」に次いでこの作品に感動した。

以下印象に残る作品をコメントしたい。

「カナカナリンリンリン」（鈴木英夫）——亡くなった妻
 の位牌をリュックに入れて漕をめぐる男の話である。なぜ
 滝なのかという点が分からなかったが、主人公の内面で成
 仏していない妻への弔いの気持ち、しつとりと描けてい
 る秀作である。

「幻臭」（室町眞）——加齢臭への思いが、主人公の妻の
 側からよく描けている。自分の臭いへの認識をもつラスト
 がなかなかいい。

「星降る里にて」（犬丸らん）——父が戦死し、若い母親
 は他家へ嫁いで行く。主人公を育ててくれた祖母との関わ
 り。文体がみずみずしい。

「白い哀しみ」（前岡光明）——白血病になった息子の失踪
 それを捜しに久しぶりに新宿を訪れた話。切実感があった
 が、どこか新宿の再紹介のような感が。

「戻り道」（足立剛）——少年の牛との関わりの話。描写

だしはなかなか読ませた。しかし昔の恋人の女医へのコン
 プレックス？ は話をぶれさせた。

「老舗奉公」（安田榮一郎）——江戸時代の商人の物語。
 時代物として分かりやすい。ただ、なぜ江戸時代という設
 定を必要とするのか、その作者の意図を伝えて欲しい。

「緑のアリ」（吉野光久）——オーストラリア駐在の特派
 員の、旅行に来た日本女性との情事。文が知性と情感をも
 っている。ただ回想からさらに何かを立ち上げてほしい気
 がした。

「湘南でのちょっとした出来事」（大崎長者丸）——久し
 ぶりに会社を休んだ男性。不思議の国のアリス的展開？
 しかし後半失速。

「名残の月」（田島朝美）——母を看取り家族を育てき
 った女性の話。苦勞がよく描かれてはいる。

「沖見茶屋」（佃陽子）——戦時中、シンガポールで亡く
 なった愛する父の思い出。

「ガラス」（森崎房枝）——入院して思い出した原爆の記憶。
 重い内容ではある。

「グランド・オダリスク」（松丘光一郎）——五十歳にな
 るうとする男の中学時代の憧れの美女との再会？ 男性の
 読者としては興味をそそられたが、なにか現在での展開が
 ほしい気がした。

今回は、さらに総数七〇〇くらいの応募になって、言葉

がみずみずしい。養子に出された子であったことに主人公
 は気付き驚く。が養父の元へやはり帰っていく。生活力の
 ようなものの根っこに触れている気はするが、「言葉の力」
 になるまでには、もう少し構成などに工夫がほしいかった。

「道標」（井上梨白）——アル中患者の実体験的な更生の話。
 この世界のことを素直に、なかなかよく描けている。

「轟音」（篠宮安紀子）——清書のアルバイトを始めた女
 性が、社長の戦後の引き上げの凄惨な話を聴いてしまう。
 なかなか大変な時代のことだが、そこからさらに心は癒さ
 れるのか——というテーマの展開を見たかった。

「君は終幕を前にして佇むか」（土田ひろし）——ガンに
 なり自殺しようと思った男性が、負債を抱え自殺をしよう
 とした男性と出会い、その偶然の出会いと関わりから互い
 に思いとどまってやり直そうとしていく話。頻発する現代
 の自殺の問題とも絡まって、テーマが読ませる。

「源流」（小西九嶺）——平家の落人の歴史をもつ村。自
 分の出自が分かっていく青年。文が分かりやすく知的。

「ワンス イン マイ ライフ」（二宮英郷）——常連の
 作者。筆力はかなりもの。また性的なエネルギーを生命
 力の謳歌として用いる手法は、この作者ならでは。

「再会」（大重晴よし）——別れた妻が乳がん。その妻
 と和解する夫。娘がなかなかよく描けている。

「君は金比羅を見たか」（神月ふみや）——長崎被爆の出

の力をさらに広げてくれる作品が出てくるのを期待してし
 まう。選評者を含めて、読者の脳は貪欲なのだ。

作品を選ぶことの怖さ

小浜清志



新しい裁判制度が今年から始まり、
 人が人を裁くことの怖さと、難しさ
 などが報道されているが、作品を選
 ぶという行為もまったく同じであると実感している。ある
 程度の実力があればほとんど横一線というのが作品選考の
 宿命ではなからうか。

私の編集担当をしていた方が、あるとき、文学賞の最終
 候補を選ぶときの苦悩をしみじみと語ってくれたことがあ
 った。最後の最後までどっちにしようかと悩み抜き、いつ
 そのこと鉛筆を転がして決めようかと本気で考えたことも
 あり、あれは神をも恐れぬ行為だったと述懐していた。や
 はり人が人を選ぶというのは非情であり、傲慢なのである
 うが、どこかで基準を設けなければならないという現実
 はぜひ理解していただきたい。

当選作になった「線路は続く」であるが夫婦の息詰まる雰囲気巧みな筆力で描かれている。いい作品にはつきものであるが、どうしてもないものねだりをしたくなる。この作品でいえば、作中でてくる鎌倉などの風景を配置してくれたらもっと厚みが出たのではと、欲をつけ加えさせてもらう。

さて、もう一方の当選作である「光のケーン」は特異な作品で、私としては前半の古本屋のエピソードがなければもろ手をあげて歓迎したい作品である。ケーンの日常と作者だけにしほりこめばもっと共感できたと思う。つまりは構成的に古本屋とケーンがうまく結びついているようには見えないのである。これも前作同様なもののねだりの、いい作品であるからである。それは優秀作の「ガラス」にも言えることで、あの原爆をなぜ回想にもってきたのかと悔やまれる。現代と過去を行き来して作品の奥行きを広げようとしているが、あまり効果がでていとは思えない。

河林満賞の「白い哀しみ」の作者は何度か目を通しているが、今回の作品は過去の作品と比べると迷いがふつ切れたようにいきいきと展開している。私は当選作でもいいのではと思っていた。

私が最も高い点をつけたのは「緑のアリ」である。文句のない筆力に圧倒されたが他の選者の賛同を得られず奨励賞にとどまってしまったことが残念である。

西萩窪の古本屋からはじまり、なんだろうと読んでいくと、知的障害を持つ息子との話になる。選考会で、色々な欠点弱点の指摘があった。しかし、おそらく、それらはいしした問題ではない。筋も結末も、殆ど関係のない小説があり、これがそれなのだ。僕は読みながら、奇をてらった変わった結末にならないように祈ったほどのだ。小説を終わらすためにだけ、結末がある。とにかく、不思議な小説である。当選作「線路は続く」(楡木啓子)は、総合点では最高得点であったが、少し、暗くはないかというのが僕の感想だった。選評を書く今、考えると、暴力ではないにしろDVの加害者である夫と、耐える妻。単に妻は自分名義の通帳をもっておくべきというような教訓なのだろうか、離婚はできなかったが、結末は小説的な解決策であるようだ。しかし、本当の暴力をふるう夫にたいしても最後に「ありがとう」といわれるとそれで終わりになるのだろうか、という思いは残る。

優秀作「道標」(井上梨白)は、読んだときから、優秀作以上という感じがあった。アルコール中毒の療養所の更正の話であるが、説明的すぎる、また、前に同じ題材で、他の作家が書いているもので、もっと凄惨内容のものを読んだことがあるという指摘があった。僕は説明的な部分がそれほど気にならず、登場人物達もそれぞれ、うまく描かれていてと考えたが、評価が割れたのは残念だった。

今回は選にもれたが「新宿の静かな夜」のもつ魅力に次回を期待している。しっかりとした作品姿勢のある方で、テーマさえしつかりと整えば傑作が書けるであろう。

全体的に言えることであるが、もう少し自分の作品を大事にするためにも是非推敲をお願いしたい。ちなみに私は最低五〇回位の見直しをしないと世に出す自信がもてない。作品は一度手元を離れてしまえばもう戻らない。であるなら、この化粧でいいのかこの服でいいのかと悩み手直しするのは当然のことだと思う。

題材にふさわしい文体、書き方

大高雅博



下読みから選考をおこなっていると、今回は上下の差が大きかったような感じがある。ただ、これも今回の作品を比較したことによるもので、次期作品では逆転するかもしれない。小説とは本来そういうものなので是非、精進をお願いしたい。

当選作「光のケーン」(藤原恵二)は不思議な作品である。

優秀作「ガラス」(森崎房枝)は原爆の話であるが、現在の病院に入院している主人公と、同室の意地悪な患者というような設定ではじまる。そこから、原爆の話になるわけだが、ストレートな原爆の話よりも効果的である感じがする。この作者にはもっと良い作品があったという他の選者の意見もあり、優秀賞となった。

優秀作「幻臭」(室町眞)は、臭いと、老いをからめたもので、着想が良かった。ただ、僕には結末が、その構想ではなく、文章の問題だと思いが、ちょっと弱い感じがした。河林満賞を受賞した「白い哀しみ」(前岡光明)は、完治が難しい病気にかかった息子が家出をし、彼を捜しに昔住んでいた新宿を訪れるという作品で、題材のこともあり、緊張感があった。骨髄移植が広まらない等のかかなり深刻な問題を背景にしながら、後味がよい作品に仕上がっている。優秀作「ワンス イン マイ ライフ」(二宮英郷)はいつものように彼らしい力のある作品である。今回は、姪の学費をどう工面するか、又、女優志望の高校生に生活のために鍼灸のような学校へいくことを進めるなど、今までにはないひねりのようなものがあり、興味深い。

以上のように見ていくと、かなりの力作が集まってきたことが分かる。他にも何作か興味深い作品があった。奨励賞「歳月」(丸山史)は別れた夫との再会の話だが、緊張感のある文章で、面白く読んだ。

奨励賞の「名残りの月」(田島朝美)は、何作か読んだ彼女の作品のなかでは、一番優れていると思う。ツバメの巣立ちと、家族が離れていくのを対比させて書かれている。おそらくこの題材で書けるのはこの一作だけだと思う。ただ、文体というか文章というか、最初の部分でセンテンスの長い文があり、それほど効果的とは思えなかったが、それで貫く方法もあった。後半の短いセンテンスのほうが、それほど良く読みやすいのであるが。全体に文章は練った方が良い感じがする。それはともかく、ある題材にはそれにふさわしい文体、書き方がある。というか、それしか書けないやり方があると思う。一度きりの題材ということが、読み手に伝わるものなのだ。考えてみれば、そういう作品が今回は多かったようだ。まず、そういう題材を見つけることが必要なのだ。それはおそらく比較的に身近にあるものなのだ。

何度も奨励賞以上の作品を書いている人もおられるが、二度三度となると、それなりの成長がないと評価は厳しくなる。驕ることなく何が足りないかを考えていただきたい。次作を期待している。

せなかったものの、手を入れてもらって、その世界を再認識した。文章の質はいい。技量をさらに磨き、この作品で書き足りないところを次の作品でさらに書いていってほしい。

河林満賞となった「白い哀しみ」(前岡光明)は、白血病になった息子が新宿へ家出するあとを追って自らの青春時代を振り返りつつ、街を捜し歩く父親の物語で、残された短い命に触れ合う親子の感情がよく書けていて、河林賞にふさわしかった。

今回はこうした過去に賞を得た書き手の奮起が目立ち、楡木啓子氏やこの前岡光明氏をはじめ「幻臭」の室町眞氏、「ワンス イン マイ ライフ」の二宮英郷氏、「ガラス」の森崎房枝氏、また「歳月」の丸山史氏、「名残りの月」の田島朝美氏、「カナカナリンリンリン」の鈴木英夫氏は、おなじみの顔である。再受賞は、当然ながら前よりもよい作品が要求される。受賞した作品以上のものを書くのは、むずかしい。一度、二度、あるいは三度と、受賞作より落ちる作品を書いても、それに屈せず持続してさらに自分自身に挑戦し乗り越える不屈の努力と前向きな姿勢があつてはじめて、前以上の作品に結実する。その意味では、再度受賞したこれらの書き手には、一つのハードルを乗り越えた大きな成果として心から拍手を送りたい。「道標」(井上梨白)は、アルコール依存症患者の病院治

再受賞の輝き

五十嵐 勉



第六回の銀華文学賞は、突出したものはなく、代わりに応募を重ねた書き手の活躍が目立った。

当選作「線路は続く」の楡木啓子氏は、これまで優秀賞・奨励賞にもなっている安定した技量の持ち主だが、今回は一段と作品の出来がよく、ほとんどの選考委員が高点をつけた。世間知らずの大学教授の夫を最後まで面倒を見ようという覚悟に至るストーリーの運びは流れもよく書けていて、技量の向上がはつきり感じられる。タイトルがもう一つの印象だが、予備選考トップで上ってきた経過は肯定でき、まとものよさは抜きん出ている。これをきつかけにさらに優れた作品を期待したい。

同じく当選作、藤原恵一氏の「光のケーン」は、知能に障害のある我が子を学校に送迎する父親の世界を描いたものである。私としては父親からの視点だけしかないのは不満で、少しでも母親の立場を入れてほしかったのと、最初の古本屋の部分が長すぎるなど細かい点においても、表現にしっかり手が届いていない恨みがあつたので、当初は推

療の回復と社会復帰の状況をレポート風に書いた作品だが、素材としては最も興味深い内容で、それだけでも価値があると思った。状況記録以上のものがほしいという他の選考委員からの注文もあつたが、私としては、この世界を知らない人にはこれだけでも読む価値があると判断した。変わった材料、新鮮な素材は、小説の大きな魅力の一つである。無条件に引き込まれる世界は、物語の源泉を備えている。この「道標」は登場人物一人一人がおもしろく、現実の体験の重さを備えていた。

特異な体験としては、森崎房枝氏の「ガラス」は、放射能汚染されたガラスの破片の話だが、原爆の爆発力によって割れたガラス破片のすさまじさがわかるとともに、汚染ガラスの力は、流血をさせない不思議な作用があり、それがいっそう不気味さを誘って、原爆の奇妙な側面を垣間見させてくれた。原爆のガラス破片についての小説は初めて読んだが、こうした知られないことは、丹念に拾っていくばまだまだありそうである。後世に残すべき記録の発掘のために、この銀華文学賞にさらに期待したい。

銀華文学賞は、四五歳以上という枠を設けてあり、テーマも普通からすると熟年以上の問題と限られてくるのではないかと、という懸念もある。枠を取ってしまったらどうかという提案も寄せられている。しかし、現在の所、大手出版社の文芸誌などが、若手中心の新人賞に選考も偏ってい

という批判に立っての賞なので、この立場を貫きたい。テーマが老年の問題とか、限られてくるのではないかという批判については、熟年・老年でなければ見えてこない人生の問題は、もっと多様で、もっと領域が広いものだと思う。その点では、今回の作品のほとんどは、常識的な領域にとどまっていたと振り返る。もっと積極的な姿勢を持ち、新しい見方で照射していけば、積み重ねてきた人生の時間そのものの中に、新鮮な、深い意味を蔵した無限の領域が開かれていると思う。そういう意味で、熟年・老年という考え方に縛られず、果敢に発見し、新しいものを創造していく、意欲に満ちた作品が登場してくることを期待したい。真の新鮮さとは、その挑戦のエネルギーの中にこそ、本来の輝きを放って現れてくるものだろう。

生き方に響くもの

小沢美智恵

今年も五二六編というたくさんのお誘いがあり、人生の機微にふれたさまざまな作品に出会った。



もの、至上の世界だと感じ、ケーンこそが自分の光であると感じるのである。

文学とは、ある状況における人間の幸福と不幸を描くものだともいえるが、この作品はそれらを透明な水の底に沈め、わずかな光によってその存在を浮かびあがらせるような「抑制」に満ちている。静かな語り口でありながら、重く読者の肚の底に届き、わたしたちの人生や人間の生き方に深く響いてくるのである。

もうひとつの受賞作、楳原啓子の「線路は続く」は、世間的には何の不足もないと思える夫に永年仕えてきた妻が、小児的性格の夫に家政婦扱いされることに堪忍袋の緒を切らし、家出して離婚を考えるものの、結局夫を見捨てることができず思いとどまる話である。荷物を取りに戻った妻は、夫が風邪で寝込んでいるのを見て、「武士の情け」と世話をするのだが、夫は意固地になって用意した食事も取らない。妻が「謝るつもりも、やり直すつもりもない。自分は離婚しよう」と帰ってきた」と大声を出してはじめて、夫は妻が本気であることに気づき、用意された好物のカレーを食べて、感謝の言葉を口にする。その夜夫は脳幹出血を起こし、介護の必要な体になってしまふのだが、妻は三十年かかってやっと聞くことができた夫の「ありがとう」のひと言に救われ、自分の名前を書き込んだ離婚届けを破り捨て、いつまで続くかわからない結婚生活を歩み続ける

受賞作の藤原恵一「光のケーン」は、知的障害のある一人息子を持つ父親が子どもとのふれあいを通して至福の時を得る話である。古本屋を訪ねるきわめて日常的な場面からはじまるこの小説は、なぜ父親・良平が毎週この場所を訪れるのか、その理由から語り起こして、十八歳になる息子・ケーンとの生活を描いていく。息子の障害の状態がはつきりしたときから、会社が終わるとまっすぐ家に帰り、妻任せにせずに自ら世話をしてきた良平は、「友人たちと時間に気兼ねなく普通に会い、あちらこちらへと身軽に旅行を楽しみ、居酒屋を夜遅くまで飲みまわっていたころのこと」をずいぶん遠い世界の出来事のように思う。車が好きで高級車への夢を膨らませていた時期もあるが、「今ではもう一生ケーンのために金が湯水のようにかかることがわかっていいるから、そんなものに興味を持つことはない」。しかし「明るいもの、華やかなものは、何一つない。今この瞬間もないし、これから先も、もうずっとない」と思える暮らしのなかで、面倒に思えた息子の世話はだんだん面白くなり、生活の一部になって、「自分はケーンをこういふふうにして世話をしながら一生過ごしていくために生まれてきたのだ」と考えるようになる。そして障害児のための療育施設に送迎する車の中のケーンと二人だけの世界を、「自分の愛する子供といっしょにいる、というだけの幸福感とも違う。それ以外の、何かもっと大きくて豊かな

決心をするのである。

ありふれた話といえはいるが、夫の性格や妻の思いがよく書けていて人物像がくつきりと浮かび上がる。また別れを決意し、断念するその流れも自然で無理がない。自転車で倒れたところを助けてくれた男性に思わず体を強く寄せたくなったり、三十年の結婚生活ではじめて聞いた夫の感謝の言葉を何度も胸の内でも繰り返してしまふエピソードなど、底知れない妻の寂しさをよく伝えている。

ただ、そこには既成の価値をこわして世界をふたたび作り上げるといふ新しい価値を創造する要素はない。常識的な世界や慣習的な小説様式といった決められた枠の中で、さまざまなものをうまく組み合わせた作品といえるだろう。わたしはその点が少し気になったが、純文学ばかりが文学ではないし、芸術的価値に重きを置く小説ばかりが小説ではない。「銀華文学賞」はあらゆるジャンルの小説に門戸を開いているということもあり、受賞には賛成した。よくできた通俗小説は広く読者に受け入れられるだろう。実際、わたしも一女性として主人公の妻に共感を覚えたのである。優秀賞の二宮英郷「ワンスインマイライフ」は、六十六歳の英語教師と高校生の教え子の恋愛を含む交流を描いた作品だが、いやらしいところの少しもない力強い小説である。兩人とも生きることに向きで、生命力にあふれており、躍動的な文体と相まって生への賛歌になり得ている。

ところどころに詩的な文章がはさまれて、それがびたりと決まったときは魅力だが、時に飛躍しすぎてわかりにくいところがあるのが惜しまれた。

以上三作を今回わたしは強く推したが、完成度という点では他にもすぐれた作品がたくさんあった。けれども最終的に選ばなかったのは、それらがわたしの胸に響いてはこなかったからだ。作品との相性というものもあるだろうが、小手先の技術では真に人を揺り動かせないということだろう。全存在といっっては大げさだが、全体重がかかっているかどうかは作品に如実にあらわれるように思う。

他に印象に残った作品をいくつかあげる。

室町眞「幻臭」は、姑の死が引き起こした心の疲れが匂いと結びついた点がおもしろかった。

平塚司「時は流れる？」は、退職し、自分と出会う話で興味深かった。

篠宮安紀「轟音」は、北朝鮮からの引き揚げ体験のすさまじさを読者に想像させる手法で描いて力があつた。

その他、大島直次「時の余白」、大重晴よし「再会」、黒木一於「隠棲者の館」、神月ふみや「君は金比羅を見たか」、坂上弘之「メジロ色の季節」、相川柊子「予告」、岡野弘樹「母の王朝絵巻」、佃陽子「沖見茶屋」、吉野光久「緑のアリ」、前岡光明「白い哀しみ」、松丘光一郎「グランド・オダリスク」、森崎房枝「ガラス」など、それぞれに魅力があつた。

文芸思潮銀華文学賞・エッセイ賞・現代詩賞

授賞式&祝賀会・懇親新年会

読者の皆様、今年も文芸思潮 銀華文学賞・エッセイ賞・現代詩賞の授賞式および祝賀会・新年懇親会を次のように開催いたします。

どなたでも参加できます。楽しい文学の集いしたいと思います。どうぞお気軽にご参加くださいますよう、お願い申し上げます。

日時●平成二十二年一月三十一日(日)

授賞式午後二時より／祝賀会・新年懇親会六時より

会場●大田区民プラザ・小ホール

(東京都大田区「下丸子」駅前)

※JR「蒲田」駅より多摩川線乗り換え三つ目「下丸子」

駅前または東横線「多摩川」駅乗り換え三つ目

会費・飲食費●五千円

問合せ・予約申込●アジア文化社・文芸思潮

電話〇三・五七〇六・七八四七 池田・五十嵐まで

または 090-8171-9771 まで

小沢美智恵

第2回蓮如賞優秀作

嘆きよ、僕をつらぬけ

「夏の花」の著者・原民喜の、15歳で自ら世を去るまでの、苦悩に満ちた、しかし一筋につらぬかれた清冽な生涯を、精緻な作品解説と深い共感を通して魅らせる感動の評伝傑作！

発行所 河出書房新社 定価 1300円



選考会風景

第7回 銀華文学賞 作品募集

銀華文学賞は、人生経験豊かな壮年・熟年・シルバー世代の文芸創作活動に光を当て、その小説作品を賞揚し、文学創作エネルギーを顕彰するものです。また埋もれた才能や稀有な人生体験・世界観を掘り起こし、広く社会に知らしめ、真に価値ある作品を世に残すことによって、日本文学の興隆に寄与することを目的とします。

今年もどうぞ奮って銀華文学賞にご応募ください。作品をお待ちしています。

●●募集要項

募集内容 ● オリジナルの短編小説作品。これまで同人雑誌などに発表したものを改作したものも可。一人一篇に限る(複数応募者は失格とする)。

応募資格 ● 2010年6月30日現在において45歳以上の者

応募規定

400字詰原稿用紙50枚以内(20枚くらいのものでも可/原稿用紙使用の場合は必ずA4の原稿用紙を使用のこと)。ワープロ原稿はA4用紙40字×30行で印字。必ず右上を綴じること。応募原稿は返却しないので、必ずコピーを取って応募のこと(コピーを応募するのが望ましい)。※今年度より応募審査が1000円かかります。

別紙に①タイトル②本名およびペンネーム③年齢・生年月日(年齢・生年月日のないものは失格とする)④〒(ないものは失格)・住所⑤電話番号⑥職業・略歴⑦400字詰換算原稿枚数を記したものを添付。⑧応募部門(2010第7回銀華文学賞応募作品と明記のこと)⑨応募審査料1000円を郵便為替で同封。外国からは11USドル。応募者には結果を通知し、希望者は作品をインターネット・ホームページに掲載する。

応募先 ● 〒158-0083 東京都世田谷区奥沢7-15-13 アジア文化社

文芸思潮「銀華文学賞」係

TEL03-5706-7847 FAX03-5706-7848 E-mail asiawave@qk9.so-net.ne.jp

賞 ● 銀華文学賞 ■ 賞状・トロフィー・賞金20万円(受賞者複数2名の場合は10万円、3名の場合は7万円)

河林満賞 ■ 賞状・トロフィー・賞金5万円

優秀賞 ■ 賞状・賞メダル・賞金3万円(数名)

奨励賞 ■ 賞状・賞メダル

選考委員 ● 作家集団「塊」メンバー

締切 ● 2010年6月30日(当日消印有効)

発表 ● 予選通過者は2010年11月末発売の「文芸思潮」38号に発表する。受賞作は2011年1月末発売の「文芸思潮」39号に発表掲載。優秀作・奨励賞など優れた作品も順次「文芸思潮」およびインターネットに掲載する。

主催 ● アジア文化社

※主催者から

真摯な文学創作に打ち込んでいる人々に光を当てたい。強烈な体験、斬新で強靱な視線、震えるような共感、心に迫る文章、魂を打つ言葉を期待しています。熟年世代・シルバー世代の底力を見せてください。

※今回より恐縮ですが応募審査料1000円を御協力くださいますようお願い申し上げます。

銀華文学賞選考委員プロフィール

小沢美智恵

おざわ みちえ

1954 茨城県生まれ

千葉大文学部卒

出版社勤務

93「妹たち」で川又新人賞受賞

95 評伝「嘆きよ、僕をつらぬけ」で蓮如賞優秀作

06「冬の陽」で千葉文学賞受賞

日本ペンクラブ会員

大高雅博

おおたか まさひろ

1954 石川県生まれ

日大文学部卒

80「旅する前に」群像新人長編小説賞受賞

他に作品「跡地の王」、共著「トライ・トゥ・リメンバー」など

小浜清志

こはま きよし

1950 沖縄県西表島隣の由布島に生まれる

69 県立八重山高専卒業と同時に上京

劇団四季、沖縄海洋博などで、舞台裏方を務める。その後も様々な職を遍歴

87 作家中上健次と知り合い、師事。マネージャーを務める

88「風の河」で第66回文学界新人賞受賞

「消える島」、「後生橋」で芥川賞候補

小説集『火の闇』(集英社)

八覚正大

はっかく まさひろ

1952 東京生まれ

早大理工学部数学科・都立大仏文科卒

教師・精神対話士

92「十二階」で新潮新人賞受賞

小説「零度の遊び」「イエロークラスター」

「父のフレーム」「カウンター」ヤルボ『夜光の時計』など

教育と文学、心理学、精神分析を幅広くつなぎながら文学活動を展開

五十嵐勉

いがらし つとむ

1949 年山梨県生まれ

早大文学部卒

79『流瀉の島』で群像新人長編小説賞受賞

84-90 タイ在住、カンボジア問題取材しながら東南アジアを遍歴

「東南アジア通信」「アジアウェーブ」を創刊、編集長

主著に『緑の手紙』(読売新聞インターネット文芸新人賞)・『鉄の光』(健友館文学賞) 他的小説作品に「ノンチャン、

NONGCHAN」、またルポ「微笑みの国タイ」などがある。

作家集団「塊」メンバー募集

作家集団「塊」は、文芸思潮および銀華文学賞・まほろば賞などを通じて、新たな表現運動を展開する作家集団です。

河林満の逝去により、欠員が出ましたので、新メンバーを募集します。

「文学界」「群像」「新潮」「すばる」など新人賞またはそれに準ずる受賞経験者で、現在の文学状況を打破したい気鋭の作家の参加を期待しています。

参加を希望の方は「文芸思潮」内・作家集団「塊」事務局に御連絡下さい。地方の作家でも、参加可能です。また受賞歴がなくても「塊」準メンバーとして参加できます。作品・自己紹介文などをお送りください。

連絡先 TEL

03:5706:7847
090:8171:9771

五十嵐まで

作家集団「塊」メンバー

線路は続く

楡木啓子

「あれは、ビルだ」

孝子はゆっくりと運転席を見た。すでに智之の視線はビルからはなれ前方にある。その横顔は結婚から二十九年という年月を刻んでいるものの、表情の乏しいところは今も変わりが無い。慢性疾患を抱えているかのように、どんよりとした顔で起き、洗面をすませ、うつむきがちに食事を終えると、判で押したように七時半には家を出る。その間に気の利いたことはおろか、おはようの言葉さえ出し惜しみをしている男の顔である。ただ、ほんの些細なことでもこの顔は不機嫌の権化に変わるのだ。

前方の信号が青に変わり車が動き始めた。いつものように腹の中でひとつため息をついた。が、孝子のふつつは

むべくもないが、そんなものだろう。

問題のビルはすでに後方に遠ざかっていた。が、今日のふつつはたちが悪かった。駄目だ、言っては駄目だという年季の入った理性の制止も空しく、孝子の口から自分でも驚くほどの低い声が出た。

「喧嘩を売る気？」

言われたことの意味が分からないまま、智之の口がへる字を書く。それを目の端に捕えながら、孝子は抑制がきかなかった。

「あれが、小屋でも、家でもないのは誰だって分かるの。『あれ、何かしら』と言うのは、『あのビルはいつたい何かしら』ってことでしょ。あなたの返事は、喧嘩を売るときか、冗談以外にありえないの」

喧嘩を売ってきたのなら、それこそ大歓迎である。

「人が親切に教えてやってるのに、おまえは性格が悪い」

孝子は腹の中で長いため息をついた。

言っても無駄なことは結婚生活の年月ぶん、いやと言うほど分かっていたはずだ。

式を挙げてまもなくのころ、世話になった人々への挨拶回りのため菓子屋に立ち寄った。そこに、おそらくはディスプレイ用なのであろう、今まで見たことのないほど大きな紅白饅頭が店頭に置かれていた。「うわあ、あれ見て」

それでは収まりそうになかった。

ローンの相談に赴いた銀行を出てしばらく走ったところで、前方に壁も窓も青く光る十五階建てほどのビルが見えた。それが、見ようによつては不気味であったため普通の会社とも思えず、「あれ、何かしら」と孝子が声を上げ、それに、「あれは、ビルだ」と智之が答えた。無論、冗談などではない。

いつものことだ、珍しくもないじゃないかと己に言い聞かせようとするのだが、もう一人の自分がそれを押しのけた。「あれは、ビルだ」とはなんだ。六十三歳の夫が妻にいう言葉か。祖父が孫に言う台詞ではないか。あいにくと子供は授からなかったから、そうしたのどかな光景など望

と言う孝子に、智之は厳かに言った。

「あれはね、紅白饅頭といって、祝いの」

智之、三十四歳、孝子、二十九歳であった。慌ててその場を離れようとして、孝子はショーケースにしたたたか足を打った。

智之が幼いころから神童と言われたというのが仲人口ではないのは、そのはなばなしい経歴が物語っていた。結婚する前に智之の実家である鎌倉の家を訪れた。初めからそういう手はずになっていたものか、智之は恩師に会うと言って出かけ、孝子は座敷で義母と二人になった。義母は床の間から二つの桐の箱を掲げるようにして持ってくると、おもむろに卓上に載せた。ひとつは西條家の系図であり、もうひとつが智之の小学校からの成績表である。長々と西條家の履歴を聞かされ足のしびれも頂点に達したころ、その成績表が披露された。一番で入学、一番で通し、一番で卒業が、東大を卒業するまで続くにいたっては、未来の伴侶に対する尊敬よりも、とんでもないことになったという居心地の悪さの方が勝っていた。あなたも智之に劣らない子を産み育てなければなりませんという義母の声を聞きながら、孝子は心中ひそかに、自分の成績表は紛失したことにしなければと思った。

それが、なんのことはない。蓋を開ければ紅白饅頭である。いや、それ以前に十分すぎる兆しはあったのだ。

結婚式は鎌倉になるものと覚悟を決めていた孝子だったが、ごく内輪の親戚だけの食事会というのを鎌倉ですませ、あとは東京で自分たちの好きなようにと西條家から智之を通して申し出があった。思いのほか進歩的であったことに、氣に病むほどでなかったのだとほっとしたが、後になって、それが単なる経済上の問題と知った。旧家には孝子には計り知れないほどの体面というものがある。地元で婚礼の儀式を執り行うにはそれ相応のものが必要であった。が、それを保つだけの財力がすでに西條家にはなかったのだ。格上の家から嫁をもらった長男の婚儀と、その嫁の縁に繋がる大家の長男と祝言を挙げた一人娘の嫁入り支度で、西條家の財も底をついたというのがほんとうのところであった。東京ものは勝手、まあ、次男だから許しましたという体裁のもとに、ていよく切り捨てられたのだ。孝子の両親がすでに他界し兄のもとに身を寄せているというのも、代々教職にあったというほかはさしたる家柄ではないということも、軽んじられる理由であったのだろう。

それでも、二人の裁量でことを進められるのを孝子は幸せに感じ、兄にも迷惑をかけなくてすみそうだと安堵した。智之と二人で式場を探すことから始めた。自分たちの手元の資金を考えて中堅どころのホテルへ出向いた。案内された一角には華やかなウエディングドレスや引き出物が展示されており、孝子の胸はその日着ていた淡いピンクのスー

ツの下で甘く膨らんでいった。隣に座る智之も押し出しがよく、表情の乏しい顔つきも、見ようによつてはいかにも学者然としており、まだ数回しか会っていない相手のことを、肩がこりそうなほど面白くない人と決めつけていたことを申し訳なく思った。係りの男が二人の前に座り、型どおりの問い合わせが始まった。式はいつごろを予定しているのか、出席者の人数は、予算はいかほどに、すべて返答に戸惑うような内容ではない。が、驚いたことに智之は宙を見据え、あー、えーと言うだけであった。たまりかねて、孝子が助け舟を出した。

「六月ころよね」

「五十人くらいだったかしら、ね」

智之は救われたようにその都度ちいさく頷いた。こちらからおおよそその事を尋ね、男が慇懃無礼とも思える挨拶を口にしての立ち上がりざま、小馬鹿にしたような視線をちらりと智之に投げかけた。

新婚旅行先を高知と決めたのは智之である。ついでに變成岩の何とか構造を見たいというのがその理由であったが、ついでは旅行のほうだろうと孝子は思っていた。行きたいところがあるかと智之は問わなかったのだ。たとえ聞かれたとしても、孝子は相手の意に沿うつもりであった。が、妻となる女の気持ちを感じようとする気配はおろか、その女にも意思があるという当たり前のことすら智之には

考えつかないようであった。それでも、いつもと変わらない自分の専門分野への旅なのだ。今度ばかりは式場のこととは違い、智之にとつて造作のないことであろうと、孝子は踏んでいた。ところがそれまでが人任せであったものか、飛行機、ホテル、そのどれを決めるに当たっても、智之ははつきりとした態度をとれぬまま、またも孝子が口を開くことになった。相手が若い女性であったため、その遠慮のない視線になおさら孝子は惨めだった。これでは見ようによつては、いやがる男を捕まえ、無理矢理結婚までこぎつけ、鼻面を引き立てて旅行の相談に来たと見えなくもない。あの一日だけで、十年も歳をとったような気がした。

ビルの横を通り過ぎたときには陽もそれほど傾いていなかったのが、すでに車の中も外も薄ぼんやりとしていた。あれから智之は黙ったままである。先ほどよりへの字の山は高くなり、孝子が何か言おうものならと待ち構えている風である。

智之の癩癧の虫を起こしてしまった。

初めてそれを見たのは、新婚旅行から帰り、一月ほどたつての朝食どきだった。供に食事をするようになってから氣になっていたことを、孝子は思い切つて口にした。

「氣づいてる？ くちやくちやくって音、たててるの。直した方が」

終いまで言い終わらないうちに智之は孝子を睨み付け、おまえは茶碗の洗い方がさつだ、水を出しっぱなしにするな、ワイシャツのアイロンの当て方がまずい、昨日は夕飯が五分遅れたと、大声でわめき始めた。のしる智之の前で孝子はうなだれていた。誰でもが一言言われたくないところを突かれたのだ。言うべきではなかったと、わびようと頭を上げ、孝子は智之の次の一言に凍りついた。

「いいか、これからはおまえが食べるたびに、耳澄まして聞いてやるからな」

智之の形相には売り言葉に買い言葉ではすまされないものがあつた。自分が恐れていたものはこれだったのだ。結婚してからいくらもたないうちから、何かの折に智之が自分に向ける癩性なしぐさや苛立ちに、孝子は戸惑い不安に駆られた。その漠としていたものはこれだったのだ。外観からは想像もつかないほど智之は子供であった。旧家の次男という立場への氣遣いくらいはあつたであろうが、それでも秀才の坊ちゃんとして大事にされるうちに、勉強より大切なものが育たなかったのだろう。自分の放つ言葉がどれほど孝子を打ちのめしたかも分からぬまま、苦虫を噛み潰したような顔をして食事を済ませると、智之は研究室へ出かけ、さらに不機嫌さを増して戻ってきた。そのままだ十日もだんまりを続けていた智之だったが、そうもしてられない事態になった。恒例の新婚さんのお宅訪問であ

る。研究室の先輩後輩が十名ほど次の日曜日に来ると、智之はあちらを向いたまま告げた。俺は不機嫌なんだ、が、今回はこれで終わらせてやると、その背中が言っていた。「いやあ、奥さん、料理上手ですなあ。今度うちのにも教えてやってくださいよ」

「奥さん、西條君ほど研究熱心な室員はいないですよ。純粋でねえ、いまだき珍しいやつですよ」

どの言葉にも智之はニコニコと頷いていた。孝子が驚くほど上にも下にも智之は最大限の気配りを欠かさず、客たちも上機嫌で帰っていった。最後の客が玄関の戸を閉めると、智之の顔つきが一変した。後片付けをしながら話をしようとした孝子に、

「うるさい、疲れてるんだ」

そう怒鳴りつけると、立ちすくんだ孝子を尻目に、さつさと風呂へむかった。

不機嫌の蒸し返しでないことは分かっていた。孝子に見せる顔からは想像もつかないことだが、智之は恐ろしく人に気を遣う。どの人からも良い人と見られなくては気がすまないのだ。見栄っ張りというより気の小ささによるものだった。強迫観念と言ってよいほどそれは強かった。そのために智之は疲れ果て、捌け口が必要であり、それが自分なのだ。孝子は感じていた。片づけを済まし、風呂へ入り、布団に体を滑り込ませたときには、孝子は心身ともにぼろ

智之の肩越しから、天井の二本の線が見えた。

——線路は続くよ どこまでも

野を越え山越え 谷越えて

メロディーがゆっくりと流れていった。

あれから二十九年が過ぎた。長い年月である。孝子も黙って過ごしたわけではない。若いころには華々しい戦いを挑んだ時期もあった。が、孝子は知ったのだ。

喧嘩は出来る相手と出来ない相手がいる。

鎌倉から孝子へは始終呼び出しがかかった。それは入院する舅の付き添いであつたり、今は亡き舅の母親の世話だつたり、衣更えの手伝いだつたりと理由は様々だったが、「行ってきます」と言う孝子に、そのつど智之は「ああ、行つていいよ」と答えた。「頼むね」でもなければ「ご苦労だね、すまないね」でもない。「行つていいよ」である。それが幾度めかになったとき、どうしてそう言うのかと孝子が尋ね、

「おまえがいなかったら俺が不便になるんだから、あたりまえだろう」

何を言っているのかという顔をして智之が答えた。

喧嘩はできないのだ。

だから、いつからかは覚えていないが、なぜか尻尾のところが「テキサス決死隊」となってしまう「線路は続くよ」

ぼろであつた。客にも智之にも満足してもらうために、獻立から飾る花にいたるまで出来るかぎりの心配りをしてきた。褒め言葉など望めないにしても、ねぎらいのひとづくらいあつてもよいだろう。怒りよりも空しさが先にたつた。涙が滲み出そうになり、孝子は目に力を入れて天井を見据えた。

枕元に置かれた上向きの電気スタンドの弱い光を受けて、幅広の合板にどういふ加減で出来たものか、二本、刷毛でなぞつたような線状のシミが浮かんで見えた。それはちょうど孝子の頭の上から対角線上に延びており、先のほうは闇に吸い込まれていた。築三十年の家を借りるにあたって腹の突き出た大家から、あちこち修繕し、たいそう金が必要だと自慢ともとれる話を聞かされたが、天井までは手が届かなかつたのだらう。隣で眠っていた智之がうーんと大きく伸びをし、片方の手を孝子のほうへ落とした。次いで、無言のままもう一方の手で自分の掛け布団をめぐり上げた。薄明かりの下で、智之の目が早くしろと促していた。さすがにこのままではまずいと思ったものか、ひと眠りし客を迎えた昂揚が蒸し返されたのか。どちらにしろ、大声で悪態をつき、その手を振りほどいてやれたらどれほど気分がよいだろうと思つてみても、そのあとのはかり知れない軋轢を考えたとき孝子の気持ちは萎えた。

孝子の小さな体の上に、智之が覆いかぶさっている。

を歌つて、景気をつけてきたのだ。テキサス決死隊なのだから、帽子をかぶつたガンマンか、軍服を着た兵隊というところであらう。が、孝子の頭の中では、鉢巻をきりりと締めた孝子が口を一文字に結び、仁王立ちしていた。子供ころのテレビ番組「テキサス決死隊」の主題歌が、「線路は続くよ」と同じ旋律と知つたのはずっと後のことだった。

「喧嘩を売る気」といまだ孝子が言つたのには、銀行で

大家からの申し出を受け二十年前にそれまで借りていた家を買つたのが、今年の春ローンが終わつたところで、外壁に亀裂が入り、台所の水周りも怪しくなつてきた。外壁は長い目で見ると修理をするより張り替えた方がいだろうとなり、台所の方も水道管を新しく替へなければという話だった。

六十三歳とはいえ、幸いなことに国立大学の定年後も私立大学の教授となり、智之は今も現役である。ローンを組むのに支障はなかった。手持ちの金もあることから借入金を少なめにし、金利の安い短期の確定金利で返してしまおうと孝子が言い、智之は長期で借りると主張した。それでは金利が高くなり結果的に支払いが多額になる。金がないのならいざしらず、わざわざ損をすることはないと思う

のだが、結論は銀行へ行ってみてとなった。孝子は気が重かった。行員が何と言おうとも智之は思うようにするだろうし、案の定そうだった。智之に確たる考えがあつてのことではない。二人の歴史がそうさせたのだ。二人で式場を探しに行った日からそれは始まったのだと孝子は身にしみて感じていた。

あれ以来、面倒なことは一切切孝子の役割であつた。手違いが生じると智之は鬼の首でも取つたように言い立てた。そのくせ孝子が次第に慣れ、手際よく捌くほどに、いつからか智之の機嫌が悪くなった。うがつた見方をすれば、孝子の失敗を待っている節もあつた。おかしい話である。一軒の家は言わば一艘の船である。舵取りが二人いるのなら、助け合つてとつていくとよい。片方が片方の失敗を望むなどもつてのほかで、時には命取りになる。後ろに隠れ、こちらの背を押しておきながら相手がやりおかせても、そうでなくても、機嫌が悪くなるのであれば、いよいよ孝子が、「それなら自分でしてちょうだい」

そう言つても無理はなかつた。
「なに！ ああ、やつてやる。やればいいんだろう。その代わり大学へ行つて働いて来い！」

あの時もいつものように智之の理屈で喚きちらした。一軒の家に、そうそう大きな決定事項などあるわけではないが、それ以来、たまに智之が交渉の場に顔を出すように

の、打ちどころが悪かつたのか、孝子はその場にへたり込んでしまった。

「動かない方がいい。ほら」

男がしゃがんで背中を向けていた。おぶされと言うのであろうが、孝子は慌てふためいた。ほんの小さなところに、二度父親におんぶされた記憶があるものの、大人になつて、しかも見ず知らずの男に背負ってもらうなど、とてもないことである。

断ろうとする孝子に、

「車あるけど、そこ、病院だから」

男は斜め前に立つ病院を指し、有無を言わず、ひよいと孝子を背負つた。男の厚みのある筋肉が、歩くごとに孝子の胸にぶつかった。智之とは違う、肉体を使って仕事をしている男の背中だった。汗ばんだシャツも、妙に甘酸っぱい匂いも、痼性な孝子には珍しく、いやではなかつた。それどころか、自分から体を強く寄せたくなり、孝子はうろたえた。

「あまり無茶に走らない方がいいよ、じゃあ」

男は待合室に孝子を座らせ、そう言いおいて去つていった。その背中を見送つてから、孝子は男の名前を聞くことはおろか、礼さえも言っていなかつたことに気づいた。治療を終え外に出ると、自転車が見え、看板の下に置かれていた。カゴの中に、芋にんじんも収められていた。

なつた。同席し、孝子の考えを引き出したうえで、だいたいがその反対のところを持ち出すのだ。振れかげんがいかに智之らしく、その流れが今日の結果だった。いつまでこんなことを繰り返すのかと、孝子の忍耐力もあやしくなつていった。何のための夫婦なのか、あまりの馬鹿馬鹿しさに腹の虫が治まらなかつたのだ。それでも、自分の言つたことで立ち上がった波風を考えると、孝子の口から小さなため息がでた。家まであと二駅くらいというところで、救急車のサイレンが聞こえ、智之が路肩に車を寄せた。

孝子の目を向けた先に、一軒家の間口を広げたほどの小さな鉄工所が見えた。仕事を終える時間なのか、電灯の明かりの下で、がっちりした体格の男がなにやら片付けらしきことをしていた。

心臓がバクリと音を立てた。

あの時の男だった。

ひと月ほど前だった。スーパーへ行つての帰り道、自転車に乗っていた孝子は走り出てきた子供を避けようとして、派手に転倒した。横倒しになった自転車のカゴから飛び出した豆腐は歩道にぐしゃりとたたきつけられ、芋やにんじんが飛び散つた。

「大丈夫か」

声をかけられ、大丈夫ですと答え立ち上がったことも

その夜、天井を見上げながら、孝子は男のことを考えていた。

男の首は太く、肩の筋肉は盛り上がつていた。年のころはちようど智之と孝子の間くらいだろう。孝子を軽々と背負うと、現実にはそうでなかつたのに、歩きながら男は振り向き、孝子に大丈夫かと言つていた。夢なのか、現との狭間にいるのか、孝子は男の目をみていた。男の目は隣家の犬にそっくりだった。ハスキー犬にしては丸い穏やかなところが、男に似ている。背負われている孝子の顔は、もやがかつたようにぼんやりしていた。

車が動き出すまでの少しの間に、「川田鉄工作所」という看板と、建物の壁に打ち付けられた所番地を、孝子はしっかりと頭に刻み込んだ。男の名は川田というのだ。名前と所在が分かり、孝子の胸は騒いだ。サワサワと立ち上がる音に押されて、智之のことは頭の外に出ていた。家に戻つてからもどこか上の空の孝子に、勝手に違うのか拍子抜けしたのか、智之のほうも静かであった。なかなか眠れないまま朝も白むころ、孝子はまた男の夢を見た。だいたいが前と同じである。違つたのは今度は自分の顔がはっきり見えたことだった。孝子の口は半開きになつていった。あの女の顔と同じだった。まだ孝子が小学校の二、三年生のころ、祖母の家にあづけられたことがあつた。隣に未亡人が住ん

でいた。外で石蹴りをしていると、男ともつれるようにして女が出てきた。女はどこかゆるんだ風情で男を見送っていた。

「いやだね、真昼間から」

祖母は孝子を家の中に追い立てながら、吐き捨てるように言っていた。玄関に足を入れながら、首を回して孝子は女の顔を盗み見た。夢の中の孝子の顔はあの女の顔だった。ワッという自分の声で目が覚めた。上体を起こし、額の汗をバジヤマの袖で拭った。

隣で智之が、なにやらぶつぶつと言い、体をあちらに向けた。

孝子は自分を持て余していた。あれから、何をするのも心ここにあらずなのだ。洗って拭いたはずの茶碗をまた洗い、掃除機の先は同じところを何度も行き来していた。風呂の水を洗濯機へ入れながら溢れさせてしまったとき、孝子は家を飛び出してしまった。どうしようもないから、行ってもなかった。このままではどうしようもないから、行ってみれば、どうにかなるだろう。そんなところだった。頭の中には川田鉄工作所という名前も住所もすっかり入っていた。

男の家を探すうちに小雨が降ってきた。朝からどんよりとした空模様であった。金物屋の店先で安物の傘を買い、

そんな肉がむっちりといっていた。斧を持たせたら、足柄山の金太郎のようなのだ。風邪など引きそうになかった。

それでも、男は空を見上げていた。

孝子は雨の中を歩き始めた。涙があふれて、流れ出した。早くに亡くなった父親が、孝子を膝に乗せ、孝子は小さなフランス人形だと言って頭をなでてくれた。フランス人形はテキサス決死隊になって、金太郎に負けるのだ。金太郎のように優しく扱われないのだ。どこかで自分は大事なものを落としてきた。もう取り返しがつかない、人生の終盤に足を踏み入れているのだ。さらに強くなった雨音に隠れて、傘の下で孝子は声を上げて泣いていた。

あれから、男に会いたいという気持ちには孝子の中から抜け落ちていた。

代わりに、体のどこかにある重い蓋が音を立てて開き、それまで無理矢理押し込められていたものが顔をつきだした。以前のように自分を上手にごまかすことも、人生なんてこんなものと嘯くこともできなくなった。道は他にもあったのだ。いや、そんなことはとうの昔に分かっていた。ただ、蓋の下に閉じ込めて、知らんふりをしていただけなのだ。むくむくと湧き出てくるものを持て余しながら、それでも表向きは変わらない孝子と、これも変わらない智之との生活が続いていた。

数分歩いたところで、孝子は慌てて駐車している車の陰に隠れた。道路を挟んだ向こうに川田鉄工作所があった。中で男がこちら向きに座り、下を向いて作業をしていた。傘を差しているのだから孝子の顔は男からは見えないし、見られても、あの日の礼を言うだけである。隠れる必要などないのだと思い、孝子は気づいた。自分の中に、菓子折りの一つも持って挨拶に行くという考えなどなかった。ただ、もう一度男に会いたかったのだ。

傘の下で孝子はじつと男を見ていた。男は時おり空を見上げていた。見上げてはまた作業をし、また見上げていた。雨脚が強くなると、男の空を見る度合いが増えた。腰を浮かして、外をうかがっている。誰かを待っているのだと気づいた。

男の動きが止まった。大柄な女が自転車を飛ばしてきたのだ。

「うわあ、やっぱり降ってきたね、父さん」

そう言いながら駆け込んできた妻に、男は傍らに置いてあった真つ白のタオルを投げ、下を向いて仕事の続きを始めた。

妻はせわしなく体を拭きながら外での出来事でも話しているのだろう。そのうち、男が何か言い、妻は笑いながら奥へ入っていった。着衣の上からでも男の妻がかなりの太り肉であるのが見て取れた。二の腕も、胸も腰も太腿も硬

十月も半ばになって、鎌倉から電話があった。冬になる前に蔵の中を片付けたいので、週末に来るようという話だった。まだまだ豊饒としていた姑の物言いは智之と結婚したところから少しも変わらない。こちらの予定を聞くでもなければ、申し訳ないけどの一言も添えられない。有無を言わさぬというのがいつもである。腹の中でお見事と言って、孝子は笑い飛ばすことにしていた。着いてみると、舅姑のほかに、母屋と地続きに家を建てて住む兄夫婦、やはりそう遠くないところに居を構えた義妹が、居間でくつろいでいた。茶を一杯振舞われ、整理に取り掛かることになった。

「あ、いいのよ、美知子さんは」

姑の言葉にそうですかと答え、腰を浮かせた兄嫁が座りなおした。初めからそのつもりであったのだろう。兄嫁はエプロンもしないなければ、その服装は働くには到底適したものでなかった。

「ねえ、蔵の中に柿右衛門の皿があるでしょう、お祖母さまが大事にしていた。私、あれ持って行くわね」

傍の者の思惑などおかまいなしに言っただけの義妹は、立ち上がるうしろしなかった。

智之は舅や義兄と話しこんでいる。結局姑の後について蔵へ行ったのは孝子だけである。その姑も、蔵の中には入ったものの、あれこれ孝子に指図をすると戻っていった。

お見事。こうまではつきりと分け隔てられては、笑うしかないのだ。釣書が判る見合いでありながら、智之の相手として孝子を認めたのは、こういうことだ。初めから分かっていた。とにかく今はこの仕事をやつける他ないのだと言いつけながら、あの雨の日以来こらえ性のなくなつた自分を孝子は必死になだめていた。黙々と立ち働くうちに、気持ちも落ち着いてきた。箱が乱雑に積み重なり見苦しかった蔵の中はいくぶん趣を取り戻していた。中身がすぐ分かるように箱の表にシールを貼つておいたので、これからは取出しにも手間が掛からなくなるだろうと孝子は満足だった。昼時になったら母屋へ戻るようにと言われていたのを思い出し、仕事を切り上げ孝子は皆のいる居間へ行った。食卓にはすでに昼の用意が整えられていた。

「あ、ちょうど呼びに行こうと思つてたのよ」

兄嫁はそう言ったが、皆が孝子のことを忘れて談笑していたのは、ばつと悪そうな様子から見て明らかだった。気づかないふりをし智之の隣に座ろうとして、畳の上に置かれた開いたままの古いアルバムが目に入った。手にとって見ると、義兄の結納のおりの写真だった。兄嫁の実家の和室なのだろう。立派な床の間に、これも立派な結納飾りが鎮座していた。九品の結納品には、それぞれ立体的で飾りも華やかな水引がついている。それらを載せた白木の台は二つあり、高さも高く、その幅は長く、床の間を狭く見せ

ているほどだった。結納飾りが隠れないようにして、両家の人々がかしこまった顔を作っておさまっていた。

「それにしても、ずいぶん貧弱ね、七品しかないわ。あ、でも、お婿様の肩書きが立派だからいいわよね」

孝子の結納の日、西條家を代表して訪れた智之の叔父が帰り、ひと息ついたとき兄嫁の淑恵がこう言い、兄が目で制した。それまで結納飾りに色々あるなど知る由もなかった孝子だったが、仕事帰りにデパートへ行き、淑恵の言うことはこういうことかと、納得して帰ってきた。結納飾りは七段階あり、孝子がもらったものは一番下か、その上くらいのものであった。台も小さく、飾りと言うより、結納セツトと名づけたような嵩かさの小さな邪魔にならない品だった。それでも、床の間にうつ伏せしているように見える結納飾りを、淑恵が言うほどひどいものとは思わなかった。ただ、あつかいの違いは結納飾りだけでは済まされなかったのだ。あれから綿々と、このどうしようもない人々に馬鹿にされ続けてきたのだと、孝子の体が熱くなった。

「おい、何ぐずぐずしてるんだ。箸が出てないぞ、気が利かないな」

智之が孝子を睨みつけていた。くすぶつていたものが一気に爆発した。

「ざけんじゃないよ」

ずっと前にテレビで女優がこう言うのを見てから、一度

言ってみたかったこの言葉が、孝子の口から飛び出た。こうなると、もう止まらなかつた。本当に働く気があるのならピラピラした服で来るなど兄嫁に、兄嫁が働いているのに平気な顔をして座っているなど義妹に、人に物を頼むときはお願いしますと言うものだと、これは姑に、啖呵をきっていた。

座はしんとなり、どの顔もありえないものを見たような驚きに満ちていた。顔を紅潮させた智之は口をゆがめて苦りきっている。その智之の顔を睨みつけ、自分の女房だけがこんな扱いを受けているというのに、なんとも思わないのかとなり、孝子は部屋を出た。

次の間に置いてあった上着とバッグを持ち、玄関に向かった。ちょうど靴を履き終えたとき、智之が走ってきた。

「戻れ、戻ってみんなに謝れ」

「何を」

「怒ることないだろう。いつもと同じじゃないか」

気が付くと智之の頬をおもいっきり引っぱっていた。駅に向かつて歩いた。今も、これからも、智之は白いタオルを放つてはくれないのだ。そう思いながら、ずんずん歩いた。

途中、足音が聞こえたような気がして民家のガラス戸に目を向けたが、孝子の後ろには人っ子一人、猫の一匹もいなかった。微かに自嘲の笑みを浮かべ、さらに足早に歩いた。

東京の家に戻り衣類を鞆に詰め始めた。行くあてはなかつた。二、三人の親しい友の顔が浮かんだが、余計な騒動を持ち込めるような付き合いではない。考えるまでもなく、早くに両親を亡くした孝子には結婚してから疎遠となつて

いる兄のところしかなかった。

孝子の手が止まった。何の前触れもなく現れた妹に、兄夫婦はどんな顔をするだろう。

「今晚泊めて」とどんなに軽く言っても、兄は心配し、淑恵はすばやく火の粉がかからない算段をするだろう。

結婚式をひと月後に控えて初めて不安を声に出した日の、淑恵の乾いた眼差しが思い出された。

智之と二人で式場の下見へ出かけた日から、孝子は眠れない日が続いていた。土だの石ころだのを相手にしてきたとはいえ、智之のあまりの社会性のなさに、胸の中は戸惑いと焦燥が渦巻いていたのだ。すでに会社は退職し、出社最後の日には祝いの席まで設けてもらっている。引き返すことはできないと、知らぬ間に幾度かため息をついていたのだろう。

「どうかしたの、ため息ばかりよ」

並んで食事の後片付けをしていた淑恵にそう問われた。とっさに別にと答えたものの、そのまま飲み込んでしまうには孝子の不安は大きくなりすぎていた。淑恵の笑顔に誘われて、気がつくと、それまでの心細さを吐き出していた。

「贅沢なんじゃない」

腹立ちを含んだ物言いだった。息を呑む孝子に、さらに強い口調で淑恵は続けた。

「学者だもの、そんなものでしょう、真面目そうだし。皆が映画のような恋をするわけじゃないわ。……うちの人の顔を潰さないでね」

忘れていたわけではなかった。見合いは兄の上役からの話であつた。ひょんなことで孝子が当の上役の目に留まり、それからとんとん拍子に決まったことだった。だからこそ、孝子の胸は重苦しく、もう後戻りできないという重圧で眠れなかったのだ。

「孝子さん、七月で三十でしょう、どんどん難しくなるわよ。それに、いつまでもこのままっていうわけにもね……」

次いで出た淑恵の、最後の言葉の含む意味合いに、孝子は腹の中であつと声を上げた。自分はこの兄嫁にとり迷惑な存在であつたのだ。考えてみるまでもなくそれはそうだろう。それまで気づかなかつた自分は迂闊であつたし、気づかせなかつたのは兄夫婦の心配りであつたのだと、その場から消え入りたかつた。孝子の気持ちの切り替えは早かつた。戻れないなら進むまでである。どうにかなるだろうと腹をくくつた。漠然とした不安は頭の隅に押しやつた。

あの夜から、三十年近くが過ぎた。

忍び足で居間のドアの前に立つた。

歌が終わり、孝子がドアノブに手をかけたとき淑恵の満げな声が聞こえた。

「初めての、家族だけのクリスマスね」

早くケーキを切つてよという子供たちの声に、兄の、淑恵の笑い声が重なつた。あれ以来、淑恵のあら来たの、というなんでもない一言で孝子は足が竦んだ。

隣家の犬の吠え声が聞こえ、孝子はまたそそくさと衣類を鞆に詰め込んだ。身の振り方が決まるまで、頭を下げて兄の家に置いてもらうほかはないのだ。玄関の三和土に立ち、辺りに一瞥をくれただけで家をあとにした。

電車はそれほど込んではいなかった。

隅のほうに座り、ぼんやりと乗り降りする乗客を眺めていた孝子は、前の席に座る幼女の得意げに読み上げる駅名が、乗り継ぎ駅から二駅も過ぎてすることに気づき慌てて腰を上げ、またゆつくりと座りなおした。ドアが開まり、電車が動き始めた。祖母であろう自分と同じ年ごろの女が目を細めて幼女を見ている。もし智之との間に子供がいたなら、あんな穏やかな顔をして過ごす日もあつたのだろうかとこの思いがよぎつた。孝子の視線に気づいた女が、孫の愛らしさに同意を求めるように孝子に微笑みかけた。笑みを返そうとして、頬が強張つた。幼女が次の駅名を読み上

智之は酒も煙草も賭け事もやらない。女に走るわけでもない。決まった時刻に出かけ、ほぼ決まった時刻に帰る。年金生活に入っている同年齢が多い中で、いまでも給料はき

つちり銀行に振り込まれる。持ち家は新しい外壁を得て立派さを増した。何の不足があるのか、今度も淑恵はそう言うだろう。白いタオルを持ち出しても、何をいまさら世迷い言をと相手にされないだけである。子供がいらないからいつまでも大人になれないのね、となるだろう。深いため息が出た。女三界に家なしとは誰が言つたのだろう。そもそも自分に家はあつたのだろうか。孝子は思う。あらためて考えたことなどなかったが、結婚が決まるまでは兄の家族と暮らす家がそうだと信じていたはずだった。可愛い盛りの姪や甥は孝子ちゃんと呼んで甘えてくれた。淑恵にとり自分が異物であつたと気づかされたときから、わだかまりが生じたのだ。それを確信させたのがあの夜だった。

結婚して家を出てから初めてのクリスマススイブに、孝子は姪や甥を喜ばそうとそれぞれへのプレゼントを携えて兄の家を訪れた。次の日に行くといつてあつたのが、智之が何かの集まりで遅くなることから、急に思いついてのことだった。家の呼び鈴を押そうとしたとき、中からクリスマスソングが流れてきた。孝子がいたところからこの歌を歌いケーキにナイフを入れていたことを思い出し、びっくりさせようとたまたま鍵の掛かつていなかった玄関から入り、

げて孝子は立ち上がり、女は一瞬怪訝そうな顔をしたがまた孫に視線を移した。孝子は惨めだった。自分の足で歩くと決めたばかりというのに、このざまはなんだ、もう自分の心はささくれ立ってしまったのか。駅のトイレに入り、鏡を見ながら、しつかりしろと呟いた。

兄の家の前に立つたときにはすっかり暗くなつていた。街灯と門燈の明かりをうけて、手入れの行き届いた庭が浮かんでいた。真つ赤な鶏頭は淑恵の好みだろう。ハナミズキやツツジは苗木のときから兄が丹精してこまめにしたものだ。兄が植えているのを眺めながら、なんて貧相で見栄えのしないものを買ってきたのだろうと孝子は思ったが、いつのまにかそれらの木は見劣りするどころか、堂々と古い小さな家の貌になり、風格さえ漂わせていた。ささやかな幸せを大きく膨らませて穏やかな老後を送っている兄たちを、煩わせようとしていたことに気づいた。甘ったれ。後ずさりしながら、家を離れた。

少し前まで酒屋だった場所に、コンビニエンスストアが建つていた。強い光の下、似通つた風体の若者たちが出入りしていた。ビジネスホテルのベッドに座り、これからのことを考えた。若くも特技もない自分に明るい見通しなどあるはずもないが、それでも、智之のもとに戻るつもりはなかつた。財布の中に目を落とし、心細い中身に自分名義の貯金はしておきなさいねと言つた淑恵の言葉が思い出さ

れた。どっちの名義だって同じじゃないかとおろそかにしていたことが悔やまれた。離婚にあたり、どれほどのものが孝子の権利として認められるのかは弁護士に聞くにしても、これからの自分に何ができるのだろうか。

三日間があつという間に過ぎた。

この間に、弁護士に会い、ハローワークを訪ね、区役所からは離婚届の用紙をもらってきた。弁護士によると、離婚は孝子にとりかなり不利になるだろう。公平に判断して、智之に際立つた非は認められない。そうなると、現実問題として、智之が了承しないかぎり十分な金額を孝子が受け取るのは難しいということだった。弁護士は言葉の端々に思いとどまった方がと匂わしていた。ハローワークの方はもっと露骨であつた。孝子が大学教授の妻と知ると、ほとんどあちらを向かれた。

「奥さん、世の中はそんなに甘くないですよ。こう言つては何ですけど、ぬるま湯に浸かつていたような人が生きていくのは並大抵のことじゃないですよ」

どうしてか、言葉の端々に敵意すら含まれているように感じられ、孝子は目の前の初老の男の顔を眺めた。小さな眼鏡の奥で細い目が、いい気なもんだと言つていた。それでも、病人の付き添いをしながら息子を育てたという町内の老婆の話を思い出し、はすかに座つたまま皮肉な態

度を崩さない相手に、付添婦や家政婦の口を探してくれるように頼み込んだ。誰に言われるまでもなく、馬鹿げた行動を自分とはとっているのだ。頭を下げ智之の嫌みを受け流し、あとは、腹の中であかんべをして暮らすのが分別というものだろう。

だが、周りをもっともらしく意見を言えば言うほど、孝子の中から「違う！」という叫びが聞こえてくるのだ。かつて腹が決まった。

四日ぶりの玄関に立った。開けたての少なかった家の中はひっそりと、空気は重く湿っているようだった。智之の靴が孝子のサンダルの上に乗るようになって転がっていた。鎌倉へ出かけた際に孝子が揃えておいたものだ。足の先で隅のほうに押しやった。それにしても智之が帰宅する時間ではない。わざわざ自分で他を下駄箱から出し履いていったのか、智之が。おかしいこともあるものだと思いつたのか、中へ入った。ガラスの器に入れて窓辺に飾ったガーベラの首はうなだれ、器の中の水は腐りかかった茎で濁っていた。テーブルの上には中身の半分以上残った弁当がらが幾つか載っている。智之がコンビニで求めたものなのだろうが、それにしても、孝子はおかしくなった。結婚してからの智之はほとんど自分で買い物などしたことがないのだ。ましてコンビニで弁当とは。孝子が留守をするときに

は、幾種類かの惣菜を作り冷蔵庫の中に入れておいた。食べる順番が分かるようにと番号もふつておくのだから、孝子が鎌倉へ呼び出されたときも、智之が言うほど食べることに關しては不自由していなかったはずだ。今度は予期せぬ留守にさぞや困り果てたであろう。腹立ち紛れに、買った弁当を中途で放り出した智之の顔が浮かんだ。

智之との話し合いと平行して荷造りを始めておいたほうがよいだろうと、孝子は二階へ上がった。タンスを開けてガタガタしていると、隣の寝室から、小さく咳が聞こえた。手を止めて耳を澄ますと、今度は涙をかむ音がする。襖を開けた向こうに、智之が掛け布団を口元まで引き上げて臥せていた。頭の周りには使い捨てたティッシュが散乱し、足下にはパジャマが脱いだ形のまま転がっている。

「…風邪?」

「……」

「いつから、熱は?」

相変わらずのだんまりに、いまさらこんな質問馬鹿げていると部屋を出かったが、智之の顔色の悪さに孝子は足を止めた。脇の下には太い隈ができ、全体に土気色をしている。布団の隙間から見えるへの字も力が入らないのか、中途半端なへの字なのだ。中途半端なへの字は泣いているように見えた。病院へ行ったのと聞こうとして、ちり紙の下から葉袋が見えた。病院へ行ったのなら、あとは養生だ

けである。智之がかすれた咳をひとつとして、孝子は話し合えるようになるまで智之の世話をすることにした。武士の情けである。

散乱したものを片付け、新しいパジャマと下着を智之の横に置き、粥を作った。

「お粥食べる?」

返事はなかった。梅干、鮭の切り身、卵の焼いたのを沿えた粥を盆の上に載せ、智之の枕元に置いて部屋を出た。

近くのスーパーまで買出しに行き、肉や魚を冷蔵庫に収めたあと、二階へ上がった。智之は粥にも他のものにもいっさい箸をつけていなかった。予想がついていた。そんなところだろう。智之の幼児性は年季が入っているのだ。俺は怒っているんだからなという姿勢を、そう簡単に崩すわけにはいかないのだ。どんなに馬鹿げて見えようとも、智之にとつては大事なことのようだ。こういうとき、何か言うだけ逆効果になる。孝子は黙って盆を下げ、食事時になると、また新たな盆を持って上がった。それが数度続いたころ、孝子の尻が落ち着かなくなってきた。水くらは飲んでいるだろうが、飲まず食わずでは体力が消耗するばかりだ。直るものも直らなくなる。病人にはどうかと思うが、孝子は智之の好物である豆のカレーを作り始めた。にんじんを刻みながら、何をやっているのだと孝子は自問していた。腹が立っていた。何も口にしない智之のどうしようもない

頑固さを怒っていた。だが、もしかしたら、食べないでどうする、肺炎にだってなるかもしれないじゃないかという心配から、自分は腹を立てている。そう孝子は気づいていた。いかにも馬鹿げている。こうしてにんじんを刻んでいるのもどうかしている。水を流しながらまな板を手荒く洗った。

カレーを置いてきてから、小一時間はたった。

智之はカレーを食べているだろうか。階段を上がりながら、もし食べていなかったら、これまでになるだろうと孝子は漠然と思っていた。孝子の忍耐も限界に来ていた。

智之は手をつけていなかった。孝子の体が震えた。盆を引つつかみ、智之の布団の上にひっくり返すと同時に大声を挙げていた。謝るつもりも、やり直すつもりもない。自分は離婚しようと思ってきた。帰ってきたら倒れていたから、長年一緒に暮らしたよしみで、最後の世話をしよう、まともに話ができるようにするまで待つてやろうと思っただけだとまぐし立て、引き戸を音を立てて閉めた。

カレーはひなげし柄の布団に飛び散った。

智之はバネ仕掛けの人形のようにボンと上体を起こし、鳩が豆鉄砲を食らったという表情をしていた。居間の椅子に体を預け、孝子はぼんやりとしていた。怒りはおさまっていたが、けだるく、荷造りをするのも億劫だった。少しして、智之が二階から降りてくる足音が聞こえた。用具入

かれ、風邪を引いて熱を出し、布団にカレーをまかれ、こういうのをなんて言うのだろう。泣きつ面にカレーだと、孝子は一人で笑っていた。笑いながら、ありがとう、うまかったと、まだ耳に残る智之の言葉をなぞっていた。布団に入っしてしばらくすると、隣の寝室から智之が話しかけてきた。

「鎌倉には、もう行かなくていいから」

精一杯に考えた末の言葉なのだろう。鎌倉だけのことじゃない。そんなのはほんのほんのかけらだ。智之には言っても分からないだろう。そう思いながらも孝子の目から涙が滲み枕へ伝っていった。

その夜半だった。うめき声が聞こえたような気がして、孝子は目が覚めた。襖を開け智之に声をかけたが返事はなかった。すでに智之の意識はなかった。救急車を呼び、病院へ着くなり智之は集中治療室へ運ばれた。医者に脳幹出血と診断され、状況は非常に厳しく一両日がやまだと言われながら、孝子は口を開くことができなかった。

治療室では出血が止まるかどうかを黙って見ているのだろうか、町内の老人が脳出血と診断され緊急手術をして助かったとか、それでもだめだったとか聞いたような気がするが、智之は手術も受けられないのだろうか、なぜだろうと、切れ切れの思考が戻ってきたのは、治療室近くの待合室の椅子に座っしてしばらくしてからであった。

れの戸を開け、また階段を上がると、二階の風呂場から水音が聞こえてきた。用具入れからバケツと雑巾が消えていた。信じられないことだが、智之は布団にぶちまかれたカレーの後始末をしているらしい。二、三度水音を立てたあと、智之は二階から降りてきた。台所へ行き、カレーをよそい、背を向けて食べ始めた智之を孝子は見ていた。うつむきかげんの背中、一回りも小さく見えた。智之は黙って食べ続け、孝子も黙ったまま見ていた。時おり、カチンとスプーンの皿を打つ音が聞こえていた。

「ありがとう……うまかった」

背を向けたままこう言い、空になった皿を台所にさげる智之を見ながら、智之のたった今言った言葉を孝子は繰り返していた。

ありがとう、うまかった。ありがとう、うまかった。胸の中を温かいものが広がっていった。三十年もかかったけれど、やっと聞くことができた孝子は思った。智之は、そのまま二階へ上がっていった。たった四日で智之はしおたれた老人になっていた。力が入らないのか背をまるめゆつくりと歩いていた。パジャマのズボンの裾がたくれ、足が覗いていた。めったに陽に当たらないそれは生氣のない白さでござつと、爪は白濁し、十分に年寄りだった。なんだか笑いたくなってきた。智之にしたら、なんとすさまじい四日間だったことだろう。孝子に思いっきりひっぱた

「鎌倉には、もう行かなくていいから」

昨夜智之が最後に放った言葉である。あの鎌倉での一連のことをおもえばかつてのことだったのだろうが、智之はそのまま眠りにつき血管が切れたのだ。意識が戻れば、と医者が言ったような気がするが、今どこかをさまよっている智之はそのとき、何を思い浮かべるのだろうか。鎌倉の家なのだろうか、布団の上に投げ捨てられた黄色いカレーライスなのだろうか。

ばね仕掛けの人形のようにボンと上体を起こした智之は、いまは横たわっている。

目の前の壁がぼんやりとゆがみ、孝子は涙をぬぐった。

窓からの朝の光が待合室前の廊下にも伸びるころ、孝子は医者に呼ばれ集中治療室へ入った。まだ予断は許さないが、ひとまず安心してよいという言葉に孝子はほつとし、思わず元のようになれますかと聞いた。が、医者の顔を見て自分が見当違いのことを言ったのだと気づかされた。退院できるのはまだまだずっと先になるだろう。退院してからも、話すことも歩くことも感覚が戻るのも、時間とリハビリにより少しずつ良くなることもあるという程度のもので、期待し過ぎない方がいい、命が助かったのがご主人の強運だったと思ってくださいと医者は言った。

一旦家に戻り、次の日病院へ持って行くものを入れようとして孝子は兄の家へ向かうとき携えた鞆を引き寄せた。

中に入っていた自分の衣類を取りだそうとして、底にある離婚届に気がついた。勢い込んで動き回った数日が思い出された。あれから幾日も経った気がした。自分の名前を書き込んだ離婚届をしばらくのあいだ見ていた孝子は、ゆつくりとそれを破りゴミ箱へ捨てた。

久しぶりに寝室に布団を敷いて横になった。

智之がいないというのに、気がつく、真ん中ではなくいつもの孝子の場所に寝ていた。

カレーの匂いがする。智之の布団はクリーニング店へ出すため階下へ置いてある。畳の拭き掃除が不十分なのだろう。孝子の口からため息が漏れた。病気との付き合いは長丁場になるのだ。あの智之に、リハビリという忍耐のいることができるだろうか。これから智之と自分との新たな戦いが始まることになるだろう。これが自分の役回りなのだ。世話をする者とされる者。どこまでいっても自分はされるほうにはまわれないのだ。氣遣われることも、優しく扱われることも、それは自分ではない他の人が受けることなのだ。孝子は思った。

天井に、いつものように二本の線が見える。

線路は続くよどこまでも、野を越え山越え谷越えて……ゆつくりと声に出して歌ってみた。これからも、おしまいのテキサス決死隊まで元気に歌えるのだろうか。二本の線の先は闇に吸い込まれている。あの見えないところには

何があるのだろう。

明日の朝見てみよう。

ありがとうと、智之は言った。

大重道子著

萩原朔太郎論

—その芸術上詩的アナキズム—

大重道子

萩原朔太郎論

〔注文は、03・3334・6161（大重）まで〕

〈生を憧憬する心〉と〈生を厭ふ心〉
その合体と二律背反

現在するものに興味が無い。だが道徳にもなり得ない。
虚無にかけられた網を這上る詩人の影。
そのアンダーキックな魂を支える詩人の存在意識。

西田書店 著者大重道子 発行1997年4月15日

西田書店刊 税込一六〇〇円

受賞の言葉

楡木啓子

嬉しいお知らせをいただいたのは検査のため入院している病室でした。お仕着せのパジャマ姿でかしまつてうけたまわりながら、これほど歓喜さわる時に、最大の喜びしき日に、なんとしまりのないことかと、いつもどこか漫画的要素が内在せねばことのおさまらない我が身が少々恨めしくもありました。

『線路は続く』がどのように評価されるのか、文学的にはどうなのであると、原稿が私の手から離れポストに吸い込まれる瞬間、祈るような気持ちでおりました。

ですから、このたび賞をいただいたことは言葉には言いつくせない喜びです。

出来不出来にかかわらず自分の書いたものは我が子と同じ。どれもこれも可愛いものですが、今回の『線路は続く』は私にとり特別な子でした。「あれは、ビルだ」から始まり、「ありがとうと智之は言った。」の終わりまで、一字一句精魂こめて書きあげました。「書き手なら誰だってそうだよ、何を今さら」とお叱りを受けるでしょうが、自分の書いたものにそれほど執着することは愚かしいと重々承知しながらも、このたびの受賞がどれほどの勇気を私に与えてくださいましたことか、感謝に堪えません。

楡木啓子

ゆぎ けいこ

北海道、滝川市に生まれる
大学を卒業後、航空会社勤務
現在札幌市在住、主婦
道新文化センターの藤原ていさんのエッセー教室、朝倉賢先生の小説教室、菊地寛先生のシナリオ教室で学ぶ

「河の会」同人

2004 第1回「北のシナリオ大賞」受賞

北海道放送（HBC ラジオ）にて2005年3月21日放送

05 第2回「銀華文学賞」奨励賞受賞

06 第3回「銀華文学賞」優秀賞受賞

09 第6回「北のシナリオ大賞」受賞

2010年3月放送予定



前回の優秀賞をいただいた時のように家族でわあわ喜び合うという図はありませんでしたが、病室の薄い枕を抱きしめながら、頭に染みついております「あれは、ビルだ」からの数行をつぶやいております。

選考委員の皆さま、ありがとうございました。

光のケーン

藤原恵一

西荻窪の駅を降りて北に四百メートル、五分ほど歩いた右側に、間口が二間、奥行きが四間ほどの興居島屋という小さな古本屋がある。読みにくいが、ごしまやと読む。店主の祖父が生まれた、愛媛県の沖にある小さな島の名前に由来しているということがインターネットの情報に出ていた。今年五十三才になる狩野良平は、六年ほど前から毎週土曜日の午後二時半になると、決まってこの店の周りをうろついている。良平の家はさいたま市の西の外れだから、三十キロほどの距離を車で走って来てここにいることになる。

店の入り口は木枠のガラスの引き戸で、少し建て付けが

考えられなくて、店主の好みと良平の好みがちがひたりと一致しているとは思えない。店主が自分の好みのものを目玉にして、安く店頭で陳列して置く。それを良平が毎週土曜日に定刻に来て、まるで注文してあった品物を受け取るように買っていき、そんな古本屋の店主と買い主の幸福な関係が成り立っているかのようである。もともと、良平はいつも、百円コーナーで呼び込んでもちと高い本を買わせようという店主の期待を裏切って、餌の百円本だけを食い逃げする魚のような存在なのではあるが。

ここで良平は、例えばほとんど新刊同様の堀田善衛「定家明月記私抄」上下を各々百五十円で買った。探していた本というわけではなかったが、布張りの上質な製本と価格が気に入って、すぐに購入した。新刊本定価は上が千五百円、下が千六百円となっている。安い、と直感した。良平の今勤めている会社は、神田神保町のご真ん中、岩波ビルのすぐ横にある。門前の小僧ではないが、少しは古本の値段にも感覚がある。翌週になって会社近くの古本街で探してみたら、読み古された古本が仰々しく上下揃いとなって紐で縛り付けられ、定価の半額で出ている。

「定家明月記私抄」はすばらしく面白かった。良平は定家の歌など面白いと思ったことは一度もないが、ここに出てくるうだつの上がらない現代のサラリーマンのような定家の人生は面白かった。世の中がどんなに騒がしくなろうと

悪く力を入れて引き開けなくてはならない。良平は引き戸を開けて中に入る前に、先ず入り口横の百円コーナーに立ち寄る。狭い小さな店の、さらに付録みたいなスペースだから品数は至って少ない。常時二、三十冊も揃っていればいいほうだ。だがここに、毎週ダイヤモンドか金のような掘り出し物が無造作に積んであるのだ。良平にとっては、欲しいが懐具合を考えればそう簡単に買うわけにはいかない新刊本、あるいは古本でも通常の価格では購入を迷ってしまふようなものが、百五十円の値札をぶら下げて店外の棚に放り出されているのだ。それもほとんど毎週、数冊は何かピーンとくるものがある。それはもう偶然とはとても

一向に関心を持たず、自分が昇進しない愚痴ばかりをうとうと書き綴っている。二日間で食うように読み終え、翌週同じようなものを、と探し出したところ、すぐ同じ著者のちくま文庫版「方丈記私記」が目についた。店主が「定家明月記私抄」を買っていったお客の次なる欲求を先取りして、お次はこれなどいかがですか、とさり気なく本棚に置いておいたようにも感じられた。見事なものだ。良平など、出だしの数行しか知らない方丈記と、兼好法師の十分の一ほども知らない鴨長明が、堀田善衛の戦中の経験と二重写しになって立ち上がってくる。

良平がここで初めて見つけた作家は数多い。黒井千次や小川国夫はここで知った。もともと読書は好きだがその範囲はごく狭かった良平が、いささかなりとも目を広げるこ

とができたのはみんなこの興居島屋のお陰だ。ガラス戸を開けて興居島屋の中に入る。暑い季節以外には、いつも薬缶がちんちんちんちんと静かな音をたてて湯気を吐いている。店内に客がいたことはめったになく、たまに客は散歩途中の老人が多い。棚から棚へ、老人たちはのんびりと歩いていく。もそもそ、と本を棚から取り下ろす。時間がゆっくり流れている。正月前後のころは、薬缶を下ろして餅を焼いている。遅い昼飯か、おやつの代わりなのだろう。香ばしい匂いが店の中いっぱいひろがっている。切り餅を焼いて醤油だけをつけて食べる、この

店の人が持っているそんなシンプルな生活が垣間見える。

ここには火鉢の前にかがみこんで、鼻からずり落ちるメガネ越しにこちらを見返してくるような、典型的な古本屋のおやじというのはいない。良平が本を選んで持つていくと、帳場に座っているのはアルバイトのような若い女性だったり、息子のような若い男だったり、奥さんのように見えなくもない中年の落ち着いた女性だったりする。ほんとうはこの中の誰かが店主なのかも知れない。良平が何も言わずに本を帳場の台の上に置くと、店番の人も余計なこと言わずに手早く紙袋に入れてさっと会計をしてくれる。良平がこの店に顔を出すようになって六年だが、まだ店番の人と会話を交わしたことはない。古本に対する専門的な知識がそれほどあるわけでもなく、もともと今この辺にいることをあまり人に知られたくない良平には、この店のこういう対応の仕方はとても好感が持てる。

この日、百円コーナーの中から、良平は黒井千次の「群棲」と小川国夫の「逸民」の二冊を買った。どちらも新刊書のようにきれいで新しい。今日の店番は、今まで見たことのない中年の品のいい女性だった。いつものように黙ったまま会計を済ませると、良平は店を出て善福寺川の方へ向かった。何か特別なことがない限り、毎週のお決まりのコースだ。陽は街の中に落けて、この後まもなく闇が降り

に渡してきた健一郎のことを思い出すときもある。そういう時はたいてい、健一郎が車の中で何か大きないたずらを仕出かしたときだ。

健一郎というのは良平とその妻千冬の一人息子で、今は特別支援学校の高等部に通っている。今年で十八歳になる。二人はいつもケーン、ケーンと呼んでいる。ケーンは毎週一回、土曜日の二時半から四時半まで、杉並区の「心の園」という障害児のための療育施設で発達訓練のためのレッスンを受けている。

ケーンが「心の園」に通い出したのは、四歳、まだ幼稚園だったところだ。「心の園」は、千冬が八方手を尽くして探し出してきた、その筋では少しは名の通った施設だ。以来ケーンが小学部の間は埼玉から杉並まで、ずっと千冬が電車で送り迎えをしていた。時たま千冬に用事があるときだけ、良平が代わりに送迎した。そのころはケーンはまだ電車を使うことができた。

ケーンが「心の園」に通い出す少し前のころが、良平と千冬にとって一番大変なときだった。ケーンが普通の子供とは違うということがいよいよはつきりしてきて、二人で覚悟を決めなければならなかった。千冬はケーンを少しで普通の子供に近づけるために、ありとあらゆることをした。東京のはずれに評判のいい医者を見つけてきて、リタ

てくる予感に満ちている。強くはないが特別に冷たい風が、良平の足を速める催促をする。車で来た良平は、街中を歩くのにコートを着ていない。薄いセーターの上にはブレザーだけ。二冊の本を脇に挟み、両手をしっかりとズボンのポケットに突っ込んで五分ほどで川のほとりに出る。川といても兩岸をコンクリートの護岸に囲まれ、下のほうにわずかばかりの水が流れているだけのものだ。都会のど真ん中の川だから、風情に欠けるのはしかたがない。しかしこの水が清水のように透明で、晴れた暖かい日などには悠然と泳ぐ鯉の姿を見ることが出来る。どんな日だって鯉はいるはずだが、今日のような日にはとても川底を覗く気力が出ない。

駅前からくるバス通りが善福寺川に架かる橋の袂に、良平の気に入っている小さな喫茶店がある。この喫茶店は、川に面した窓もバス通りに面した窓も、全面ガラスで大きく開いている。良平は川とバス通りに面した角の席に座って、興居島屋から今買ってきたばかりの本を開くのが好きだ。その席は店でも特上の席だから、いつも空いているとは限らない。有名な作家たちのように、店員が空けて待っていてくれるなどというサービスはもちろんないから、塞がっていれば黙ってその隣の席に座るまでのことだ。

すぐに本をひろげるときもあるし、その前にちよつとだけ、送ってきつていさつき、興居島屋に入る前に「心の園」

リンやリスパダール、あるいは大柴胡湯という漢方薬をもたらってきて飲ませた。薬はどんなものも、ほとんど効かなかった。太鼓と大きな掛け声で有名な霊感療法にも連れて行った。こちらはもちろん、まったく効き目がなかった。

放っておけば、その辺のニワトリと同じように何も覚えなかっただろうケーンを捕まえて、その頭の中に一字一語植えつけるようにして文字と言葉を教え込んでいったのも千冬だ。ひらがな、カナタナ、漢字、数字、みんな千冬だ。多い少ない、右と左、上と下、千冬はこういう抽象概念の意味を絵に描いたり、ケーンの身体をひねったりつねたりして教えた。良平はいつもそばでただ立って見ていた。もともとそういう概念の欠如しているケーンは、なかなか覚えなかった。感覚としてわかったのかな、というようになるまで、気の遠くなるような忍耐と長い年月が必要だった。

千冬のお陰で、ケーンはかろうじて文字と言葉を持つことができた。ただケーンはそれを頭のどこか片隅に追いやってしまつて、自分から自発的にしゃべることはほとんどない。その代わりなのだろうか、普通の人にはちよつと考えられないようないたずらをする。

このごろは、後部座席から運転している良平に手を伸ばしてきて、メガネをぱつと抜き取っていくといういたずらが多い。たいていは抜き取られる前に気づいて手を払いの

けることが出来るが、完全にはずされて持っていかれた場合は悲惨なことになる。取り返しても、たいていは弦が曲がって使い物にならなくなる。走行中なのに、ドアを開けようとして取っ手をガタガタ引く張ることもある。この場合はチャイルドロックがかかっているから大丈夫なのだが、シートに膝をついて後ろ向きになり、後続の車をじろじろ見回す。すぐ後ろの車の人は感じが悪いだろうが、実害は何もないからこんなのはいたずらの数には入らないかも知れない。後ろの席でゴミ箱の中に小便をする、ゴミ箱の中に捨ててあったいものかわからない缶ジュースを飲む、カラスのような声で笑い出す、突然手を伸ばしてきて髪の毛を掴む引く張る振り回す。それをいたずらだと思っただけ、こちら側の世界に住んでいる人間の認識で、本人にとっては何か止むに止まらない衝動行動なのかも知れない。

中等部に上がったところから、一箇所にじっとしてられないケーンの異常行動は激しくなってきた、電車の中をばたばた走り回るようになった。メガネへの関心が芽生えたのもこのころだ。隣りの乗客のメガネを電光石火の早業でサッと抜き取る。取られた方は一瞬何が起ったかわからずにきょとんとしている。ケーンのほうでもメガネを手を抱えたまま、きょとんとしている。抜き取ってどうしようというのではない、ただ抜き取ることだけが絶対至上の目的なのだ。だから抜き取ってしまったあとは、手に

持ってしまったメガネをどう扱ったらいいのか自分でもわからないのだ。

他人が食べているものをひよいとひったくる。立っている子供を突き飛ばす。力の弱そうな老人のそばにサッと寄っていつては、背中をバーンと思いきり叩く。ケーンはそのバーンという甲高い派手な音が気に入って固執しているようなのだ。その他、電車の中ではないが、止まっている車のドアを開けるといふ行動が出てきた。歩いている途中に車が止まっている、ケーンがすばやく取っ手を引くと、ドアは百発百中、すぐに開く。ケーンは歩いている最中に、目を使ってすばやくドアロックの有無を確認しているのだ。それにしても、停車中にドアロックをしていない車の何と多いことか。ドア開けの問題行動はエスカレートしていつて、止まっている車ばかりか、最近ではゆっくりと走っている車にまで手を出すようになった。走行中に得体の知れない他人にいきなりドアを開けられるという、この世にあつてはならないような椿事にいくわした運転手の驚きよう。強盗だつて、せめて停車中に押し入るくらいの礼儀は弁えていたるだろうに。良平は驚愕のあまりあんぐりと見開かれた運転手の目を何度見させられたことか、そのたび運転席に向かつて何度頭を下げたことか。正常な男の子なら、通り魔事件として警察沙汰になりかねないことをケーンはずいぶんと仕出かしてきた。

中等部一年の夏から、「心の園」へのケーンの送迎は周りに迷惑をかけないように、車で行くことにした。千冬も運転はするが、交通量の多い都内を走るのはいささか自信がないということで、ケーンの送迎は専ら良平が担当することになった。

それまでは土曜日の午後は、良平にとってはもつとも寛げる貴重な時間帯だった。普段はうるさがつて音楽をかけたせいでくれない千冬もいない、部屋中を落ち着きなくばたばたと行ったり来たりするケーンもない。良平はポリリズムをたっぷり上げて一人好きなオペラを楽しむことができた。この時間帯があるから、BS放送のオペラ番組を楽しむに録画して溜め込むようになったし、好きなDVDを選んで買うこともできた。一人で淹れて一人で飲むコーヒのうまさにも気づいた。もうずっと一生、この時間を失いたくないと思っていた。

ケーンを毎週車で送迎するようになってから、土曜日は良平は朝から何も出来ない。庭の草むしりのようなちよつとした力仕事をするだけで、午後の運転中に激しい眠気が襲ってきて危険極まりない事態になるからだ。ちよつとそこまで思っただけで、帰りの時間ばかりが気にかかって落ち着かない。良平は土曜日がくると、なるべく朝寝をして、それから家の中で愚図愚図している。昼飯はな

るべく早く、軽めに、腹六分目くらいに済ませる。それでも西荻窪へ向かう途中で、埼玉を抜けて東京へ入ったところ、睡魔はいつも必ず突然に襲いかかってくる。良平はさつそく用意のカフェイン入りのガムを噛む、一枚だけではだめで、二枚、三枚……と噛み続けていつて、五枚ほど噛み終わるころにようやく眠気は少しだけ晴れてくる。が、それでも完全に睡魔を退治することはできない。今度は取って置きのミント飴を取り出す。一番ミント度の強い毒々しいブラック色のミント飴、こいつを舐めまくる。やはり五粒ほどきたところで、胃がやられて、爛れて、悲鳴を上げる。この胃痛と引き換えに睡魔はようやくのこと頭から退出していく。

六年前にケーンの送迎を始めたときから、良平はこんなことをごく最近まで繰り返していた。慢性の胃炎を起こし食欲をなくして、毎晩楽しみにしている酒の顔を見るのもいやになったこともある。それでも居眠りをして事故を起こすことに比べたら、遥かに増しだと思つて耐えてきた。

最近になって良平はあるうまい方法を見つけた。出発前の三十分、いや時間のないときには十五分でもいいから、二階の八畳の和室に大の字になって眠るのだ。眠れなくても、横になって何も見ず、何も考えずに目を閉じているだけでいい、その効果は絶大だった。この方法をみつけた最初のときそうしたように、眠るとき良平はいつも枕元

に置いたラジカセでシューベルトのピアノソナタをかけた。小さな音でかけると、曲の表情はコンポで聴くときとはまるで違って、シューベルトは子守唄になる。ケーンが生まれる前、千冬と出会う前、友人たちと時間に気兼ねなく普通に会い、あちらこちらへと身軽に旅行を楽しみ、居酒屋を夜遅くまで飲みまわっていたころのことが、ずいぶん遠い世界の他人の出来事のように、頭の底の方で淡い色に浮かび上がってくる。目を瞑る瞬間に、夏は開け放たれたガラス戸から二階に届くほど大きく育った百日紅の濃いピンク色の花が、いくつもいくつもベランダの中へ咲き零れているのが見えた。冬は立て切ったガラス戸の向こうを、木枯らしの黒い泣き声が渡っていくのが聞こえた。その間だけ、二階には千冬もケーンも上がってはこなかった。良平だけの静かな時間だった。

車はケーンの「護送」専用になった。チャイルドロックは左右とも常時施錠し、外から中が見えないように、後部座席とリアの窓ガラスには黒いフィルムを張り渡した。メカネ対策にはずいぶん苦労した。前座席と後座席の間にタクシーのような仕切り板を立てたいと思ったが、この施工をしてくれる工場が見つからない。思い余ってタクシー会社にも相談してみたが、そんな、個人への対応はやっていないという回答。メーカーにもディーラーにも問い合わせて

良平が睡魔と闘っているときも、睡魔から解放されて快適に走り出したときも、車の中にはいつも横原敬之の声が響いている。ケーンは横原敬之のファンなのだ。「どんなときも」や「もう恋なんてしない」はケーンの好きな曲で、一曲終わると必ず低い声で、

「もう一回かけてください」

と振り絞るように言う。そのたびに良平はCDを戻してかけ直す。好きな曲を三回聴くと、ケーンはやっと満足して次の曲に進む。ケーンは車の中ではこの横原敬之ともう一枚、松田聖子のCDを聴く。これは千冬が若いころファンだったせいで買ったもので、「あなたに逢いたくて」、「スウィートメモリーズ」、「瑠璃色の地球」のような大人になつてからの曲を中心に編んだアルバムだった。意味がわからなくても、ケーンは曲の感じが好きになったのかも知れない。横原敬之が終わると、ケーンはさっそく低い声を出す。

「今度は松田聖子にしてください」

松田聖子が終わると、同じような低い声がくる。

「また横原敬之にしてください」

そしてケーンが行きの車の中でしゃべる言葉は、これがすべてだった。

ケーンは車から降りて「心の園」へ入っていくとき、靴

てみたが、埒があかない。自分で作ろうかとも思ったが、ちゃちなものではケーンに簡単に壊れてしまう。ケーンの馬鹿力ときたら、何しろ半端ではない。度のついた水中メガネも検討してみたが、度の強い良平に合うものがなかった。結局メガネの件は、メガネの弦の端から端までをゴム紐で繋いでおくことにした。こうすれば、引つ張られてもそのまま後ろへ持つていかれる事だけは避けられる。

睡魔から解放され、メガネをゴム紐で繋いでしまうと、ドライブは快適だった。すれ違う車や並走する車を見る余裕がでてきた。都内へ入ると、よくドイツ製の高級車やイタリア製のスポーツカーを見かけるようになる。結婚する前や、結婚してもケーンが生まれる前までは良平もずいぶんと高級車への夢を膨らませたものだ。中古でもいい、いっぺん手に入れて自分のものになりたい、街の中をウォーンと腹に響くような音をたてて乗り回してみたい、その車で山へ行きたい海へも行きたいと、何度月並みに思いつめたことか。廃車寸前のボルシェを安く買ってきて一回だけ乗って、ああ……と声を出して満足して、そのまますぐ廃車にしてしまふなどという愚にもつかない計画を本気で検討したこともある。今ではもうケーンのために一生金が湯水のようにかかることがわかっているから、そんなものに興味を持つことはない。額縁の中の美しい絵を見るように、それらの車たちを眺めることができる。

を脱いで下駄箱にしまってから、こちらを向いて直立不動になり、ぎこちなく頭を下げて挨拶をする。

「お父さん、行ってきます」

小さいころからの躰で、杓子定規に、鸚鵡返しのように言うだけなのだが、いざ言われてみれば悪い気はしない。だがこれも、何年もかけて「心の園」の先生たちと千冬が、動物に芸を仕込むように教え込んだ賜物なのだということを良平はよくわかっている。

初めて「心の園」へ通い出したころ、何かちよつとした出来事をきっかけにしてケーンはよく泣いた。泣くとき、ケーンは最初はゆっくり、それから徐々に泣き広がっていつ、最後には手のつけられないほど激しく泣き疲れるまで泣く。

何かの折、千冬に用事があって、良平が一人でケーンを送っていたことがある。このころはまだケーンは電車を使うことができた。電車の中も駅から「心の園」へ歩いていく途中でも、ケーンはとても機嫌がよかった。にこにこしたり、後ろの良平を振り返ったりしていた。にこにこしているときのケーンは、良平の目で見ても誰の目で見ても、縦から見ても横から見ても斜めから見ても、文句なく天下一品にかわいい。ところが「心の園」へ着くなり、玄関の前でケーンはいきなり大粒の涙を流して雷のように泣き出したのだ。何がどうしたのか、良平にはさっぱり見当もつ

かない。何か引き金があるのだろうかとは思っても、それが何なのかわからない。ケーンの引き金は、ほんのちよつとした、ばかみたいな些細なこと、たとえばいつも玄関前に止まっている自転車が今日に限って止まっていなかった、というようなことで、突発的に引かれる。万一のときの備えに、千冬が鉛玉を持たしてくれたのだが、恐る恐る差し出す鉛玉になぞ、ケーンは見向きもしないで泣くことに全力を注いでいる。こうなれば良平一人の力ではどうしようもない、途方にくれているしかない。良平はこういときの自分の無力をよく理解している。ケーンのそばに、良平はなす術もなく杭のように突っ立っていた。

そのとき玄関のドアがあわただしく開いて、中から一人の先生が小走りに出てきた。それは、「心の園」の中で一番頼りになる若い女の先生だった。外で愚図っている子供のいることを逸早く察知して、すばやく身を躍らせるようにして飛び出してきたのだ。先生は小鹿のようにケーンのそばへやってきた。そのままケーンの泣くのをじつと見下ろしている。良平は縦る思いで先生を見ていた。先生は少しずつ少しずつ腰を下ろしていつて、ケーンと同じ目線になるとケーンから目を逸らさずに言った。

「ください、その鉛玉をください」

横向きに掌だけ、良平のほうに差し出してきた。ケーンに渡しそこなつて握っていた鉛玉を、良平はそつとその細

い掌の上に置いた。

「ケンちゃん、さあ、鉛玉よ。これをあげるから、泣きやみましょ」

先生はケーンの目だけ見ている。柔和な、それでいて甘えなど許さないという決意の凄さを秘めた目。横から見ている良平が震え上がりそうになる。鉛玉なんか欲しいはずもなく、先生の言った言葉の意味も理解できたかどうかかわからないが、あんなにも人と視線を合わせるのが苦手なケーンが目が、魅入られたように先生の目に焦点を結び、先生の手から鉛玉を受け取った。涙はまだ頬を伝わり、痙攣のようなすすり上げは断続していたが、地割れを惹き起こすような泣き声は鳴りを潜めた。ケーンの鉛玉をしゃぶる音がばかに大きく響いてきた。

「心の園」では教室での通常の療育とは別に、一ヶ月に一回あちこちの教室から子供を一手に集めて身体を激しく動かすことを中心としたダイナミックダンスという体育指導を行っている。場所は大勢が集まれる所というので、公共施設の広い体育館が選ばれることが多い。ダイナミックダンスは日曜日に行われるので、その日は良平が車を運転し、千冬とケーンを乗せて出かけることにしていた。

たいていの場合良平は二人を送り届けるとしばらくの間お役御免になり、近隣の喫茶店に入ったり周辺を散歩をしたり、暑いときや寒い時は空調の効いた車の中で居眠りを

楽しんでいたりしていた。一人でいることに飽きてくると、よくやうくダイナミックダンスの現場を覗きに行く。体育館の中では、軽快な音楽のリズムと太鼓の音に合わせて、百人ほどの子供とその親が輪のようになって同じ方向に走っている。ドーンという太鼓の音を合図に、百人からの全員がぱつと方向を変えて走り出す。右へ回ったり左へ回ったり、それとドーンドーンという腹の底に沁み入るような野太い響き、ある意味でもっとも単純で原始的な踊りを踊っているようで、見ているこちらもだんだんと興奮してくる。やっっているほうも、適度の疲れと、その先に痺れるような恍惚感が広がってくるのだらう。ケーンなどのように普段はほとんど無感動に過ごしている子供も、こういう場では身体と頭に、何か鈍い大きなものが突き刺さるような刺激があるのかも知れない。

ケーンが小学部に上がる直前に開かれたこのダイナミックダンスの場で、プログラムの合間に「一年生になったら」という歌を歌ったことがあった。みんなでこの歌を歌っている中を、その年の四月に一年生になるといふ子供が何人か選出されて、小さな背中からはみ出すほど大きなランドセルを背負って他の子供たちの人垣の前をくるくる回るのだ。ケーンたちは前から練習を重ねていたらしく、歌声は立って見えている良平の耳にもはつきりと響いてきた。一年生になったら、一年生になったら、友達何人できるかな

……というあの懐かしい歌詞。良平も幼稚園のころ希望に胸を膨らませながら歌ったような記憶がある。しかしケーンも、そこでランドセルを背負って一生懸命歩きまわっている他の子供たちも、ほんとうは一年生になったって二年生になったって、その先何年生になったって、人と接することがまるきり苦手なのだから、友達などという種類の人間はできるわけではないのだ。それでも歌の文句だけを覚えて、手をつなぎあって大きな声で歌いながら人垣の周りを回っているケーンたちを見ていると、良平にはこの子たちにも本当に友達がたくさんできますように、と祈るような気持ちがかみ上げってくる。

気がつくと良平はいつの間にか先払いの会計を済ませて熱いコーヒーを受け取り、いつもの席に座っていた。三年前に前の会社を退職して今の会社に移ってきたところから、何か考えごとをしているとその間に起こった出来事の記憶がよく飛ぶようになった。買ってきた小川国夫の「逸民」が開かれて目の前にある。開いた記憶もない。この作家のものは、筋がないところがいい。筋が面白くても、文章に工夫がなく構成も今ひとつという小説は結局面白くない。筋などなくても、作者の息吹、魂がきらきらしているようなものもいい。頁を開いて入っていくと、小川国夫のあの、顕微鏡で見るような、あるときある一瞬の、微視的な世界

がひろがっている。

喫茶店の中というところは、読書をしていても考え事を
 していても、完全には集中することができないものだ。少
 なくとも良平の場合はそうだ。少し集中していても、コー
 ヒーをちよつとひと口、と思つて顔を上げると、もう集中
 はバァーッと蜘蛛の子を散らしたように逃げていく。真正
 面の窓の向こうは善福寺川。川沿いの遊歩道をビニール袋
 を提げて足早に歩いていく主婦の姿が見える。コートも着
 ない学生のような若者が落ち着きなくせつせと小走りに行
 く。みんな寒くても平気だ。川の向こう岸の家の庭には、
 熱帯植物のアロエがびっしりと群生している。あれだけ大
 きくなってあれだけ群生していれば、大雨が降ったつて猛
 烈な寒さが来たって、もう枯れる心配はないのだろう。主
 婦も学生もアロエも、東京はみんな元氣だ。アロエの群生
 に、川筋を這つてきた薄い西日が射しかかっている。冬の
 今はこの薄い陽がすぐに暮れて、やがてケーンを迎えにい
 く時刻がやってくる。

良平は腕時計に注意して、きっかり四時十分に店を
 出る。暮れかかった西萩の街を意識してゆつくり歩いて、
 「心の園」に着くのは四時二十分過ぎになる。寒いけれど
 我慢して、玄関の前でもうあと一分か二分、時間を潰す。
 本当は四時半の迎えなのだが、四時半に着いたのではもう
 何人か迎えの先着がいて、たつぷり待たされることになる。

ない顔がほつと一瞬輝いたように光る。口元が緩んで前歯
 が少し顔を出し目尻に皺が寄る。輝きは顔全体を這うよう
 に広がっていき、それからマッチの火が消えるようにあつ
 という間もなく消える。再び口は堅く閉じられ、顔は表情
 を掻き消す。ケーンはすぐにまた元の、いつもの能面のよ
 うな顔に戻っていく。良平はその一瞬のケーンの輝きを見
 たいために、毎週土曜日の午後を潰して送迎をしているよ
 うなものだ。

ケーンを連れて車の所まで戻る間、一抹の不安がある。
 駐車違反で、車を持っていかれてしまっているのではない
 かという不安だ。実際にはケーンの乗る車は駐車禁止解除
 の扱いを受けていて、解除票をフロントガラスの所に出し
 であるのだが、一度、「ここは通行の邪魔になる」という訴
 えが近所からありました。移動願います」という紙が張ら
 れていたことがある。良平は路上駐車する場合、道幅の十
 分にある、出入りの邪魔にならない場所を慎重に選ぶのだ
 が、止めてあるだけで目障りだという人もいるのだろう。
 そういう人から連絡を受けて警官が来て、キップを切るか
 レッカー移動させようとしたところ、駐車禁止解除票が貼
 っているのを見て、仕方なくお願いの紙を貼って帰ったの
 だろう。それ以来良平は、駐車違反にはならなくとも、レ
 ッカー移動させられているのではないか、偏屈そうな近所
 のおやじが難しい顔をして腕組みをしながら、文句の一つ

子供たちは一人ずつ玄関に呼び出され、そこでぐずぐずと
 ジャンパーを身につけ、靴を履き、それから先生と皆さん
 に向かつてさよならの挨拶をして帰っていくからだ。そん
 なことはもちろんおくびにも出さないが、夏の暑いときや
 冬の寒いときには、たまたまなくいららす。暑くもなく
 寒くもないときでも、同じようにいららす。自分のこ
 とよりも、教室の中ですべての授業を終え、今はじつと膝
 を折って床に座りながら迎えの順番を待っているだろうケ
 ーンが不憫でならない。以前迎えが少し遅くなったとき、
 座って首を伸ばしながら、ドアの隙間から一生懸命良平の
 姿を探しているケーンの不安そうな視線に出会ったことが
 ある。そのときから良平は、ケーンの迎えは他の親を押し
 退けても何が何でもいの一番に、と自分の心に固く決めて
 いる。

外でぐずぐずしている良平は、他所の家の迎えが角を曲
 がって姿を現すやそれを合図のようにして玄関の中に入っ
 ていく。子供たちはみんなまだ授業をしている。良平はい
 かにも今日は少し早く帰る必要があるような風を装い、申
 し訳なさそうに、小さな声を出す。

「狩野健一郎です、少し早いです、お迎えお願いしま
 す」

先生に連れられて玄関先に出てきたときのケーンの表情
 が良平は好きだ。苦痛と不安から解放され、いつも表情の

も言おうと運転手の戻ってくるのを待ち構えているのでは
 ないかという不安から解放されることができない。

だから良平は、自分の車が無事に道端に止まっているの
 を見るとまずひと安心する。それからフロントガラスに何
 も貼ってないこと、まわりに危険な人物が誰も立ってはい
 ないことを確認すると、ようやく全身の緊張を解くことが
 できる。ケーンを後部座席に座らせ自分も運転席に座ると、
 また軽い緊張がくる。これから家に着くまで一時間半、何
 もなければそれに越したことはない。だがケーンを車で送
 迎するようになって六年の間に、何回か小さな事件は起こ
 っていて、それはみんな帰り道での出来事なのだ。行きは
 緊張しているせいか、問題が起こったことはない。

青梅街道を環八へ左折しそこなったことがある。考えご
 とをしていたわけではない。いつもかかっている横原敬之
 の歌に熱中していたわけでもない。ぼんやりしていたわけ
 でもないのに、ちよつとのタイミングで左折車線に入り損
 なつてずるずると真つ直ぐに行ってしまったのだ。幸いな
 ことに直ぐに比較的広い十字路があったので、良平は喜ん
 でそこを左折した。その先でもう一つまた十字路を見つけ
 て、そこを左折して環八に戻るつもりだった。内心でほつ
 としたのもつかの間、道はどんどん右にカーブしていく。
 環八にくると背を向けたようになって離れていく。適当
 な十字路も一向に出てこない。いらいらが不安に変わり始

めたころ、やっとそれらしい十字路が出てきた。ばかめ、遅いぞなどと口走りながらいそいそと左折したが、行けども行けども環八が出てこない。片側一車線の普通の道ならいくつか横断したが、どう樂觀的にみてもあれが環八だったとは考えられない。良平の車にはナビがついていないので、どこを走っているのか皆目見当をつけることが出来ない。変だ、変だと思っていると、はっと思い当った。このあたりでは、環八は地下に潜っているのだ。車は今環八の上を通り越して反対側に出て、環八から悠然と離れて行っているのに違いない。良平は一つ覚えの一本道で埼玉から西荻窪まで来ることができるが、この辺の地理に詳しいわけでも何でもない。ちょっと定期航路を外れば、極端な話もう右も左もわからないのだ。いつメカネに飛びついてくるか知れないケーンを後ろに乗せて、真つ暗な中をヘッドライトの明かりだけを頼りに知らない道を走る心細さ。昔、道なんて、いくら迷ったって、所詮全部繋がっているのさ、平気平気、などとうそぶいていたやつがいたつ。そいつの言葉が、ばかに憎たらしく蘇ってくる。いくら道は繋がっているといったって、こっちは今、ケーンが腹を空かせる前に家に帰りつかなければ大変なことになるのだ。あいつめ、あんなことを抜かしやがって。今すぐにここに呼び出して思いきりぶん殴ってやりたい。あの糞野郎め、馬鹿野郎め。良平は自分の非を棚に上げて、こめかみに

も左にも、車の影はなかった。背筋を冷たいものが一気に流れた。雪が小止みなく降り続いていた。雪のせいで危ない目にあつたが、また雪のせいで人身事故からも衝突事故からも救われたのだ。この道はそれ以前に、左折しようとして自転車を取らなくて、左側から来る自転車に注意が逸れたのだ。そのときはたまたま千冬が助手席に乗っていて、その「アブナイ！」という叫びに助けられた。あとで、自転車の若い男と千冬にさんざん罵られた。若い時分と比べると、良平の注意力は明らかに散漫になっていて、それは普段から薄々感じてはいたのだが、このときほどはっきりと実感したことはなかった。ただ、注意力がどうなろうと、右と左の区別がつかなくなろうと、良平の足と手の動く限り、ケーンの送迎は止めるわけにはいかないのだ。

「心の園」を出発して三十分、閉め切った窓の外をヘッドライトが波頭のように押し寄せては引いていく。以前に一度だけ道を間違えたことはあるものの、良平にとっては通い慣れたルートだ、普段はただ流していけばいい。横原敬之の声だけが響いている防音室のような空間。聴いているのかいないのか、バックミラーに写って身じろぎ一つしかないケーン。窓の外の闇を見ている。見続けている。良平はケーンの顔を見ている。良平が後ろを振り返ったときだけ、

青筋をたてて歯軋りする。

スピード違反で捕まったのも、環八の井荻トネルを走っているときだった。前の車についていたら、八十キロはすぐに出た。前の車はそのままスピードを上げてどんどん見えなくなってしまう、良平が先頭に出たとたん、後ろの死角から白バイが迫ってきた。

「前の車はもつとすごいスピードを出して、先へ行っちゃったんだねえ」

よほどそう言いたい気がしたが、言ったところで許してくれそうにないと思い、黙ってキップを切られた。環八のこのあたりは、良平の鬼門だ。

雪が激しく降った日、それでも「心の園」には車で رفت。タイヤチェーンの用意はないので、裸のタイヤのままで走った。行きは何事もなかったが、帰り道、「心の園」の前の細い道からバス通りへ出るところで、一時停止しようとしたブレーキに、回転を止めたタイヤがそのままズルッと雪の上を滑った。車体はブレーキを踏む前より勢いを増してスラッと滑っていき、そのまま一気にバス通りに飛び出した。普段なら人通りの多い道で、歩道には必ず人影がある。ぎゃっ、轢いた、と目を瞑った。が、人はいない。よかった、と思うまもなく、わあ、車だ、ぶつかる、と凍りついた。車体は手前の車線を突き破り、向こう側車線の半分くらいのところまで飛び出してやっとなと止まった。右に

ケーンはどんぐり眼を大きく見開いて良平の目を見ている。何も語っていない目。何も見ていない目。その目を通して、良平はケーンの中に入っていく。ケーンの頭のまん中に座り込む。

ケーンの魂がゆっくりと立ち上がってくる。良平はその魂と話を始める。

どうだった？ 今日「心の園」、うまくいったか？

うん、うまくいった

そうか。今日は何やったんだ？

三桁の足し算と引き算。みんなうまくできた

ほう、じゃあ、先生、誉めてくれたか？

うん、誉めてくれた、うれしかった

そりゃあよかったな。帰ったらママにも誉めてもらおう

できないときは、僕、すごくくやしけど

ケーンの声は良平の頭の中に直接に響いてくる。

ケーン、世の中、面白い？ いやなことなんか、ないか？

面白いことなんか、ひとつもない。いやなことばかり

うむ

僕は、人の言っていることが、ほんのちょっとしか、わか

らないの。くやしい、悲しい、情けない。でも、僕がそう思っていることだって、みんな知らないんだ。パパだって、そうだろう？ 知らないだろう？

ケーン、ケーン、何を言ってるんだ、パパが知らないと思ってるのか？ パパはな、ケーンが考えてることなんか、ちゃんとわかってるんだ。ケーンがほんとうはどんな子か、ちゃんとわかってるんだ

そうなんだ、パパは、わかってたんだ。じゃ、僕の今一番つらい、ほんとうのほんとうの悩みって、なんだか、わかる？

良平は、バックミラーを使って一瞬、ケーンの顔を覗き込む。ケーンの白目勝ちの大きな目もともととフツと大きく膨らんでいつて、ケーンは目だけになる。

ケーンの悩みか、一番の悩みか

ケーンの頭が微かに上下している。そう、そう、それだよ、パパ、それでいいんだ。ケーンはそう言っている、よくな気がする。ケーンに促されて、良平は前に出る。

それは、……それは、……、自分が人の言うことをちょっとしかわからないことではなく、自分がふつうの子ど

ものできることをふつうにできないということでもなく、つまり、そういうことによって、パパとママと、学校の先生と友達と、自分のまわりにいる人たちすべてに心配をかけているということじゃないかな

そう、そうだ、そうなんだよ。僕は自分のことより、自分のことを心配してくれている人たちに大変な迷惑をかけている、それがいやでたまらないんだ。迷惑をかけたこともできないし、迷惑をかけないようにすることもできない。同じような失敗を今日もしてしまっただけ、明日もするし、これからもきつとずっとし続けることになるんだ。そうするのは、僕の意思なんかじゃぜんぜんないのに。僕のほんとうの気持ちとはぜんぜん別のところで、身体や手や足が勝手に動いて悪さをしてしまっただけ。したとたんに、あつと思つても、もう遅いんだ、もうした後なんだ。そんなときでも、僕は自分から謝ることすらできない、周りの人から、謝れって、強制的に謝らせられるとき以外はね。僕はそれが一番つらい……

……対話。良平とケーンの無言の対話。良平もケーンも、現実には言葉を出してはいない。良平は前を向いたままハンドルを握っているし、ケーンは目を移して、今は再びじつと暗い窓の外を見ている。だが、ケーンは頭の中で、確かに話している、良平にはそう思える。ケーンは確かに、

何か言っている。現実には何も言っていないし、本当に何も言っていないのかも知れない。だからこれは、究極的には良平自身の独白だ。それが良平とケーンとの対話という形で進行している。狭い車の中で。ケーンが存在という介在者を通じて。ケーンは何も言っていない。そしてケーンが存在そのものが、すべてを言っている。

そうやっていっているうちに、五時になる、五時に、五時、五時、そう、五時になる……。いつしかケーンが目がダッシュボードの時計の文字に吸い寄せられている。瞳が猫目のように細く光って、蛍光色の文字を吸い込んでしまいうだ。きっかり五時零分零秒。後部座席から、ケーンは突然低いお経のような声を絞り出す。

「アヴァンティにしてください」

ケーンの合図を待つて良平がラジオのスイッチを入れると、往路から何回も繰り返しかけられてきた横原敬之と松田聖子のCDはここでもうやくお役御免になる。

「アヴァンティ」というのは、FM東京で毎週土曜日の五時から放送する音楽と雑学の番組だ。もともとは麻布仙台北上の路地を入ったレストランのウェイティングバーの名前で、土曜の夕方、そのバーに集うさまざまな人たちの酒を飲みながらの会話を、主人公の常連客が盗み聞きをするという凝った構造になっている。主人公は大学教授で、そ

の他に美人のマドンナや嫌われ者やの常連客がいて、これにスターンという外人のバーテンダーが絡み合つて、楽屋裏でいろいろ問題を惹き起こす。毎回集まってくるゲストはよくもこれだけと思うほど食、音楽、芸能、出版など各界の著名人ばかりで、毎週この番組を聴いていけば時代の最先端のテーマとそれについての一通りの知識が身につく仕組みになっている。合間合間にジャズやシャンソンがさつとかかつて、スポンサーの酒のコマーシャルもなかなか風味が利いている。酒の中でもウイスキーなどにはほとんど見向きもしなかった良平が、このスポンサーのシングルモルトをわざわざ三越まで行つて買ってきて、うまいと思つて飲み始めたのは、まったくこのコマーシャルの賜物だ。

良平にとってはこの上もなく面白いゲストのおしゃべりも音楽も、ケーンはおそらく何一つ理解はしていないだろう。それでもケーンは、じつと聞き耳を立てている。あるいはジャズが流れるときくらいは、肌が何か感じとっているのかも知れない。残念ながら良平にもその辺のところはよくわからない。ケーンが生まれてから十八年、ケーンに寄り添うようにして生きている良平にしても、ケーンのわからない部分はまだまだ山ほどある。

良平は、ケーンが生まれて、ケーンの障害の状態がはっきりしたときから、会社が終わるといつもまっすぐに帰ってきた。特にケーンが物心つくようになって、赤ん坊のと

き以上に手がかかる状況になってからは、もうほとんど例外がなかった。同僚が酒を飲むときに、麻雀を囲んでいるときに、ゴルフをやるときに、いつも良平は誘いを断って帰ってきた。ケーンの場合は職場では特に何も話してはいなかった。夜や休日の誘いを断る度にみんなから不思議がられた。付き合いの悪いやつだと思われただろうが、良平はもうきつぱりと割り切ることにしていた。

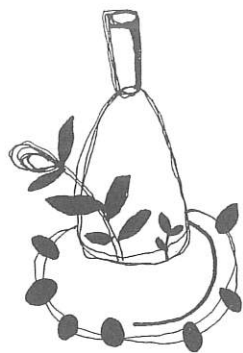
まっすぐに家に帰ってくる、ケーンの顔を見る、頭を撫でてやる、麦茶をコップに注いで飲ませてやる、歯磨きを見守り仕上げをやってやる、風呂と一緒に入って身体を洗ってやる、拭き切れない濡れたままの背中をよく拭いてやる、寝室の空調を整えてやる。良平がいなければ、それは千冬がやるだろう。しかももつとまくやるだろう。しかし良平は自分がやることにこだわった。千冬ももう、良平がケーンに取りかかっているときには、いつか手を出してこないようになった。面倒だったそれらケーンの世話とはだんだん面倒ではなくなっていく、面白くなり、それから当たり前の生活の一部になった。自分のことをやるように、ケーンと自分の二人分のことを自然にやるようになってきた。ときとして良平は、自分という人間は、ケーンをこういうふうに世話しながら一生を過ごしていくために生まれてきたのだ、と思うことがある。若いころ、骨身を削って勉強したことも、生活に有利な就職先を見つけて歩いた

のだ。

十二月、午後五時二十分。沿道の櫟の太木がゆさゆさとその図体を揺らしている。夜になって、急に風が出てきて、その風がもう吹き荒れている。櫟は幹も葉も暗闇の中に隠れているが、巨大な存在感がそこにある。この大櫟まで来て、ようやく道の半分だ。

「アヴァンティ」では教授が涼しげな音を立てて水を転がしながら、好物のウイスキーを啜っている。スターンは訛りのある声で教授の話に相槌を打っている。ケーンは固まったまま外の闇に目を向けている。その姿を良平はバックミラーを通して見続ける。

良平とケーンは乾いた黒い道路の上を家に向かってひた走る。光は、ない。光は、ケーンだ。



藤原恵一

ふじわら けいいち

1951年 埼玉県生まれ
74 東京大学法学部卒業
同年 金融機関に就職
2003 金融関連の会社に転職、
現在に至る
同年 大学卒業前後に執筆した
「小さな、小さな、」と「太陽
の笑い顔」をまとめ、短編集
「小さな、小さな、」として文
芸社より出版

趣味、音楽鑑賞、仙人掌

ことも、結婚の相手を探し回ったことも、すべてはこのケーンとの出会いに収斂されていくような気がする。

「アヴァンティ」はまだ続いている。「アヴァンティ」のゲストはみんな斯界の第一人者ばかりだから、話はいまいし、何よりも自信に満ちている。外は暗くても、明るいカクテル光線に照らされてピカピカ光り輝きながら酒を飲み、取って置ききの話を聞かせてくれている。車の中は、良平とケーンだけだ。外も中も、真つ暗闇に覆われている。ああいう賑やかな場所で華やぐ機会は、良平にはもう、ない。ケーンにも、ない。家と特別支援学校と、「心の園」だけの往復。明るいもの、華やかなものは、何一つない。今この瞬間もないし、これから先も、もうずっとない。ケーンと二人だけ、その世界があるだけだ。孤独、寂しさ、惨めさ、そして不思議な高揚感。

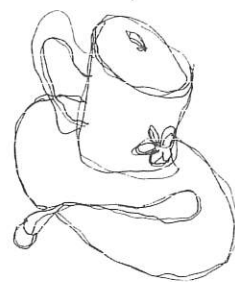
今ここに、ケーンとこうして過ごす時間、息を継いでいるわずかな空間。ここには、千冬もない。千冬と恋愛していたときですら、こんな暖かい高揚感を感じたことはなかった。性欲の下心があったり、言葉のちょっとした行き違いに心の襞を広げたりした。ケーンと二人だけいる高揚感、あれらの時間が持っていたものとはまるで性質が違ふ。自分の愛する子供といっしょにいる、というだけの幸福感とも違う。それ以外の、何かもつと大きくて豊かなも

中学三年のときに、国語の先生に作文を誉めていただいていた。すっかり文章を書くことが好きになりました。そして将来はそういった方面で仕事をしたいと漠然と考えるようになりましたが、世の中そんなに甘いものではないですね。大学時代にチョコチョコと、会社に入ってからそれはそれこそチョコッと小説を書いてみたものですが、とても満足のいくものは書きません。そうしているうちに会社の仕事が忙しくなり、忙しい仕事を追いかけていると仕事も面白くなってきて第二の会社に転職するまで、会社人間として必死に働いてきました。

籍をきれいに移して第二の会社に落ち着いて見ると、足がなくなつて何だかフワッと浮き上がったような気持ちです。……何もしなければ、もうこのままです。最初、乏しい蓄えを取り崩して昔の小説を出版してみました。親しい友人に配って歩きましたが、やはり足は生えてきません。

私は少しずつでもいいからもう一度小説を書いてみることにしました。今回初めて少し納得できるものが書けたのでどうしようかと思っていたところ、たまたまこちらで四五歳以上の高齢者を対象にした文学賞を募集していることを知り、まさに我が意を得たような思いで応募させていただきました。

「文芸思潮の五十嵐です」という編集長の声は、私の心の空洞の中に沁みわたるようになってきました。大学に合格したときより、求愛の承諾を得たときより、私はうれしかった。編集長の声とあの瞬間の感動を小さく切つて額にして一生飾っておきたいと思った。それはできないことだけれど、ありがとう、ありがとうございました。



文芸思潮臨時増刊号

エッセイ宇宙 4

THE ESSAY COSMOS

第5回「文芸思潮」エッセイ賞作品集

第5回エッセイ賞の作品を集めた豊かなエッセイ集
エッセイ宇宙が豊かに広がります

アジア文化社

945円(税込)

ご注文はアジア文化社まで

TEL03-5706-7847 FAX03-5706-7848

白い哀しみ

前岡光明

「さあ、着いたぞ」

新宿駅一〇時一〇分着、特急あずさ号。

大きな茶の旅行カバンと黒いショルダーバッグを提げ、はやる気持ちを抑えきれず、早くからドアデッキに立ち懐かしい中央線沿線の市街の様子を眺めていた中条一彦は、車両から吐き出されるようにホームに降りた。

あたりを見回しながら、ホームの端に寄りたらずむ。身長一七五センチのがっちりした身体。短く刈り上げた白髪混じりの頭。角ばったあごの目焼けした顔。その視線は鋭い。そして、隣のホームに目を凝らす。

(いない……)

背の高い若い男は何人かいたが、違う。

(新宿駅の一日の乗降客はJRだけで二六〇万人、私鉄を入れたら四五〇万人というから、すごいものだ……)

いつでも戻って来れると思つて離れた新宿だが、いつのまにか十年が経つていた。

「あいつは、どこにいるのだろう」

一彦は、こんな哀しみを負つて再び新宿を訪れようとは思ひもよらなかった。

四日前、朝起きてみると、白血病を患う独り息子友幸が姿を消していた。居間のテーブルの上に、しばらく旅に出ます、と走り書きがあつた。

(どこに行った?)

夫婦は氣をもんだ。

(まさか、やけを起こしたのでは?)

と、きちんと片付いた息子の部屋を探したが、手がかりはなかった。

葉は六日分所持したようで、ほっとした。

愛用のリュックとパーカー、ジーンズを着ていったようだった。

(着替えは持つて行つてない……)

(待つしかない……)

そして、ゆうべ、「新宿にいる」と本人から電話があり、一彦はじつとしておられなくなって出てきたのだ。

(こんなところにいるわけがないだろう……)

一彦は、降車客がびつしり埋め尽くしてホームの階段を下りる光景にたじろいで、最後尾になるのを待った。

込み合った通路を、皆、急ぎ足で歩く。前方から来る人が氣になつて思わず足を停め進路をずらすと、すぐ後ろで乱れた足音がして、肩をこすつて若者が追い越して行つた。(こういう時は方向を変えず同じ歩調で進むのだ。そうすれば、ぶつかる寸前で避けてくれる……)

と、一彦は通勤ラッシュの感覚を思い出した。

今日は四月二十日で月曜日だが、ラッシュ時刻はとつくに過ぎたのに、駅構内はひしめき合うように人の流れが続く。

四十七歳になる一彦は、大学時代を含めて一八年間、新宿界隈で暮らした。

一彦は松本近郊の育ちで、高校は商業科を出た。専業農家では大学学費が無理なことはわかつてゐる。新宿の佐藤税理事務所に住み込みで勤め、税理士修行のかたわら夜学に通つた。家族的な雰囲気だった。授業料を納めるため給料の前借をさせてもらったこともある。一彦は、卒業したら商社に入って海外へ行きたいと思つてゐた。でも、大学を卒業して、その事務所を飛び出さなかつたのは、実家の父母を思うと海外暮らしなど身勝手なことができなかったこと、そして税理士の仕事がおもしろくなつてきたこともあるが、なんといつてもその一人娘の存在があつた。四つ下の清楚な理恵子。一彦は頼まれるまま家庭教師役をやつたり、書店に付き合つたりした。二人は惹かれあつた。やがて、中学の数学教師をしていた理恵子と結婚しアパートに移つた。そのあと、体調を崩した義父母に請われるまま、家に戻り、一彦は事務所の後継者となつた。そして、もうひとりの同僚の先輩は独立した。

息子が一人授かつた。理恵子の父母を相次いで病で失つたが、税理士の商売は順調だった。

しかし、兄弟のいない一彦は、実家の老いた父母が氣になつてゐた。口には出さないが、家に戻つて来て欲しい親の気持ちを察し、悩んでいた。そして、ちょうどバブルの

最後の時期で事務所兼住家が地上げに遭ったのを機会に、思い切って事務所をたたみ松本に引込んだ。

妻は潔く教員を退職した。都会育ちの妻が田舎生活を厭わなかったのはありがたかった。風光明媚な山里である。庭先から眺める北アルプスがことのほか妻は気に入った。

「新宿は、副都心になって変わってしまつて、愛着が薄れました。自然に包まれて暮らす方が子供のためにいいし、その気になったら、特急あずさに乗って二時間半で新宿に出て来れるのだから……」と言ってくれた。

「お義父さん、お義母さんのお世話するのは当然です」と、父母との同居にうなずき、その後に控える介護生活を覚悟してくれた。

穏やかな父母との同居はじまつた。

一彦は松本駅から車で三〇分ほどの、山裾の自宅で中条税理士事務所の看板を掲げた。中学、高校の同級生の伝手で顧客を探したが、なかなか見つからない。かといって、露骨に同業者の得意先を荒らすような真似はしたくなかった。

（とうてい新宿でやっていたようにはいかない……）と悟った。

妻は臨時教員になった。

一彦に少しずつ顧客が現れた。

せううなんて約束したら、酷い目に遭いかねない。

JR新宿駅は、ホームにエスカレーターがついたり、中央の連絡通路がずいぶん明るくなったりで、キョロキョロしている自分はおのぼりさんだと一彦は意識した。それでも勝手知った新宿だ。ちゅうちょなく西口改札に向かう。

そして、緑の窓口の特急券当日分売り場の前の、人の流れが縦糸と横糸のように交差する中を泳いで、地表へ出る階段を探した。

こんな大勢の人混みのなかで、ばったり息子と鉢合わせしたら、どんなにか幸運だろうと思った。

（双方の思いが惹き合えば、そんな奇跡が起こりうるかも知れない……）

（愚もないことだ……）と、頭を振る。

気のせいかな若者の姿が目立つ。一彦は、若い頃はどこへ行っても背が高かったが、今の若者の中に入るとそう高くない。

友幸は身長一八〇センチの細型である。

無造作な長髪。ジーパン、紺のパーカー、ズック靴に青いリュックを担いだ姿は見当たらない。

（勉強の支障になるからと思つてケータイを持たせなかったが、入学試験が終わったのだからすぐに持たせればよかった……）

（どこにいるのだろう……）

田舎でひっそり暮らす分にはそんなにお金がかからないので、新宿にある妻名義の家作の家賃収入を合わせ、やっていけた。片手間の税理士稼業だが、夫婦で野菜畑の百姓をする時間がとれるので、いいと思つてゐる。田んぼは手に負えないので他人に任せた。息子の学費分ぐらいの蓄えはあるし、いざとなれば不動産を売り払うつもりでいた。

一彦は、まずは西口に出るつもりでいる。

大きな旅行カバンをコインロッカーに預けようかどうかと一瞬思案した。

（あいつと会ったら、まず着替えさせなければならぬい！）

と、下げていくことにした。

（まだそれぐらいの体力はある……）

一口に新宿駅と言っても、土地勘のない者がいきなり所用で訪れたら、その広さと複雑さに途方にくれるだろう。

JR新宿駅には、東口、西口、南口、さらに甲州街道を挟んで新南口がある。また私鉄の小田急線、京王線、京王新線、都営新宿線、都営大江戸線、営団地下鉄丸の内線の各連絡口があつて、込み入っている。また、少し離れて西武新宿駅がある。そして絶えずどこかで改良工事が行われているから、古い記憶のまま、新宿駅のどこかで待ち合わせるから、

友幸が黙つて家を出たことが不憫でならない。

一彦は旅行会社の店先のケースに並べたパンフレットが目についた。若い頃、妻に「いつかイタリア旅行に行きましよう」と言われたことを忘れていない。

畑の世話に明け暮れる毎日である。冬場の農閑期は一彦の本業の確定申告の準備で忙しい。この十年間、父の病とか母の痴呆のこととか休まることはなかった。そして、こんな事態になったが、いつかイタリア旅行の約束を果たそうと思つた。

（妻には苦勞をかけた……）

一彦は新宿に来るのに、ジューク育ちの妻を連れてこなかったのがかわいそうだったが、いつ友幸から電話があるかも知れないので、妻は電話番号で残らざるをえない。そして、ケータイを持たない主義の一彦は定期的に妻に電話しなければならぬ。

小田急ハルクの前の公衆電話ボックスから、妻に電話した。

「やあ、おかあさん。今、着いた。友幸から連絡は入っているかい。……。そうか、なにもないか……」

「留守電にしますが、できるだけ電話の側（そば）にいます」

穏やかな妻の声に、その胸の苦衷がにじみ出ている。

「おい、西口は変わったぞ。ハルクの建物が変わったな。」

ビックカメラが入った。サクラヤが隣に出来た。地下のタクシー乗り場の噴水は変わらない。相変わらず、どこも人でいっぱいだ。

これから、前に住んでいた家の方に行ってみる。……。そうだね、友幸は真っ先に行ったかもしれないね。都庁の展望台に行ってみる。あそこに上っただろうね。……」

かつての我が家は、都庁の裏側だった。

山の手の新宿は地盤が固いこともあって、淀橋浄水場の広大な跡地に高層ビルが建ち並んだ。そして副都心と称された。その一角に都庁が完成してまもなく、一彦一家は引っ越した。

電話をしながら、留守居の妻のことを想った。

五年前に父の大腸がんが見つかり手術したが、二年後に再発し、肝臓に転移し亡くなった。ショックを受けた母はとじこもりがちになり、扱いが難しくなった。それまでは仲良く嫁とやっていたが、痴呆が出、猜疑心が募り、理恵子につらく当たるようになった。母はアルツハイマーと診断された。そんな母が、調理していてボヤを出した。友幸が気づき、沈着にもプロパンガスの元栓を締め、台所の壁を焦がただけで、消し止めた。その時、夫婦は畑に出ていて、消防車に驚いて飛んで帰ると、火元は我が家だった。以来、母を施設に入れた。その費用は母の年金でまかなえ

して、夏の模擬試験はいい成績だったので、今度は成算あり、と一彦は見守っていた。

しかし、不幸が襲った。

その頃、友幸は松本市内で献血したのだが、日赤から白血球が多いことを知らされた。ずーっと後で、妻がその通知を見つけた。

秋口になって、微熱が続き、体調が悪そうに見えたのは勉強疲れだけではないと心配し、十一月に入って検査のため入院させた。渋々同意した友幸は、参考書を持ち込みベッドで勉強していた。脊髄から液を採取して、「痛かった」と騒いだけで、検査結果を待っているうちに四日が過ぎた。

そして、医師から呼び出された一彦は、慢性骨髄性白血病と告げられた。ガンである。マルク（骨髄穿刺）の結果は、悪い細胞（Ph i 染色体）が六〇%もあった。微熱のほかにも、歯茎からの血が止まらないなどの出血傾向とか、貧血気味だとか、医師の指摘する兆候に一彦は思い当たることがあった。

「薬で治療が続けた場合の五年生存率は六〇%です。骨髄移植をした場合の五年生存率は約八〇%です」

言葉を失った一彦に、医師が次の難題を投げかけた。

「本人に告知しましょうか？」

そうでなくてもナイーブな受験生には、ショックが大き

た。ぼけた母は一彦の名も思い出せないが、嫁を見ると顔をそむけた。

（妻はよく我慢している……）

（この件が片付いたら、妻を新宿に連れてこよう……）

と、思いが募った。

「また一時間ぐらいいしたら電話する。じゃあ、な」

公衆電話ボックスを出た。

目の前に喫茶店ピースがあることに気づいた。この店は年中無休なので、顧客との待ち合わせによく利用した。店のたたずまいは変わらない。古い従業員がまだいるかもしれないと思った。

この広い新宿の人ごみの中で、友幸を見つけるのは至難の業である。でも、友幸は帰りの切符を予約しに、きつと高速バスターミナルに来るだろう。そして、あいつは、何時のバスに乗ると家に電話してくるだろうから、落ち合う場所を決めればいい。

机の引き出しの郵便貯金通帳には三万三千円の残高があった。カードの他に財布にはいくらも入っていない筈だ。

（早くあいつに会って、お金を渡してやりたい……）

（そうだ、友幸から電話があったら、ピースで待つように伝えてもらおう……）

友幸は浪人して、医科の大学を目指していた。よく勉強

すぎる。

事実を伝えるにしても、いつ伝えるか、だった。友幸が今の瞬間を精一杯生きるには、何とか受験をまっとうさせてやりたかった。

家に帰って妻に話した。打ちのめされた妻だったが、最後に、面長の白い顔の涙を拭いながら言った。

「事実を偽ってほだめよ。どんな事態になってもあの子は精一杯がんばるわ」

そして、翌朝、一彦は医師に、

「医学学生志望の息子だから、本人に病気のことを説明してやってください」と伝えた。

一彦も妻も病院に付き添ったが、その場に立ち会わなかった。

友幸は抗がん剤投与に同意しようだった。

医師はすぐさま治療を開始した。友幸は否応なしの入院だった。

インターフェロン900万単位、三CCの注射を打たれた。まずは抗がん剤でPh i 染色体を叩くのである。友幸は、高熱を出しベッドに沈んだ。連日の注射で、ふらふらになり、何をする気力も失った。枕もとに積んだ数学の参考書に手を触れることもなく、うつろな目をしていて。食欲不振で、見る間にほろがこけた。

「かなうことなら、代わってあげたい」の気持ちは、妻も

一彦も同じだ。顔を見合わせでは無言で励まし合い、耐えた。どうして、よりによって息子が不治の病に取り付かれたのだろうか？

ふだんの生活に罹病する要素があったのか？

この土地の風土が合わなかったのか？

先天的なものがあつたのか？

一彦はあれこれ悩んだ。

(どんなに悩んでも、どうなるものじゃない……)

一彦は、白血病と聞いてすぐに骨髓バンクを思い、インターネットで調べた。

日本では毎年六千人もの重い血液の病気の患者が発病し、そのうちの二千人がドナー(骨髓提供者)を探して待っている。しかし、適合するHLAタイプを保有する人は数万人に一人の割合でしかない。現在ドナーが一五万人(二〇〇三年三月現在)いるが、患者の希望に応えるにはあと一五万人が登録して倍の人数にする必要があるという。しかし、ドナー登録者が増えない。これは、骨髓提供者は三日から五日間入院しなければならない負担があるからだと言った。

一彦がふに落ちなかったことは、六千人の患者のうちの二千人、すなわち三人に一人しかドナーを探していないことだった。

(三人に二人は、骨髓移植を諦めているのだろうか？)

ン600万単位を一日置きで投与し、ハイドレアというカプセルを毎日二つずつ飲んだ。

抗がん剤の副作用は出なかったようで安心した。

気のせいかも知れないが、友幸は心身ともに落ち着いたように見えた。

そんな友幸が、この四月の一六日早朝に姿を消したのだ。薬を六日分持ち出していたから、やけになつての家出ではない。

一彦も妻も、直感で、クラスメートだったガールフレンドの久子のいる新宿に行つたのだと思つた。それに、新宿は、当時小学四年生だった友幸が友だちとの別れを悲しんで松本へ引越すのを嫌がつた、懐かしい故郷だ。

(元氣なうちに見納めたかったのだろうか……)

一彦は、息子は親に話せば反対されると思つたのだと考えるに不憫でならない。

(新宿行き計画を知っていたら、好きなだけ金を持たせてやつた……)

(久子さんとは、もう、会つただろうか。もし別れを告げられても、やけを起こさなければいいのだが……)

一彦と妻は息子からの連絡を待った。久子さんに聞けば友幸の足取りが分かるかもしれない、と思つて友幸の机を探したが、彼女の電話番号は分からない

まもなく、友幸の病状は落ち着き、やがてインターフェロンは600万単位に減ぜられ、すぐに300万単位となった。そうやって元氣を取り戻した友幸は勉強の意力を甦らせ、参考書を読み出した。そして、自分でインターフェロンを注射できることが退院の条件だと言われ、毎日、自分で注射をした。

そうやって二ヶ月間の入院の後、家に戻ってきた。七〇キロあつた体重が五五キロに落ちていた。

退院して一ヶ月後、友幸は入学試験を受けた。受験するのが精いっぱいだったろう。

合格発表の日、覚悟していたように、健気に振舞う友幸だが、目標を失つた動揺は隠せない。

ともかく静養して体力をつけてくれと、一彦は見守るだけだ。

そんな状態でも、欠かさず抗がん剤を自分で注射しているから、生きる氣力はある。

(医師になる夢は叶わなくとも、せめて一年でも二年でも、より長く生かしてください……)

と、神社に祈つた。

この頃はだいたい白血球の数が減つて調子がいいようだ。

Ph i染色体は一〇〜二〇%と落ち着き、インターフェロ

かった。

(もし、彼女の電話番号が分かっても、恐らく自分も妻もためらつただろう……)

そろそろ警察に捜索願を出そうかと氣を揉んでいた昨夜のことだった。

友幸から電話がかかつてきた。

「大丈夫。元氣だよ。新宿にいる。帰りのお金はちゃんと別に取っているから、いつでも帰れるよ。もう少し、自由にさせてね、じゃあね」

一方的に切れてしまった。ともかく元氣そうだったので、安心した。

しかし、一彦はいても立つてもいられない。ちょうど新宿で片付けなければならない用事もあつたので、そのことを口実にして、今朝のあずさ号で出てきた。

その物件とは、新宿二丁目に妻名義の雑居ビルがあるが、その管理を任せている不動産屋から、だいが老朽化しているので補修のことを話し合いたいので、上京の機会があったら立ち寄ってくれ、と手紙が届いていたのだ。

まず、最初に、一彦は、京王デパートの向かい側にある新宿高速バスターミナルに行った。中央自動車道の山梨、長野方面行き高速バスの発着場である。以前と変わらぬ切符売り場、狭い乗り場があるだけのターミナル。

（友幸は、明日、ひよつとしたら今晚あたり、ここからバスに乗るつもりだろう……）

JRのあずさ号と高速バスと比べると、所要時間が二時間三十分と三時間一〇分で三五分余計にかかるが、運賃は六七一〇円と三四〇〇円で半分で済む。

（友幸は、ここに来る！）

高速バスの最終便は二〇時二〇分発だった。

ひよつとして思つて、地階の狭い待合室も覗いてみた。

（ちよいちよいここへ来てみよう……）

都庁は目の前の高層ビル群の奥の方にある。

大江戸線が開通して都庁前という地下鉄駅ができたが、JRから乗り換えるのが大変だから、たいがいの人は新宿駅西口から歩いて都庁へ向かうようだ。そして、地下道に自動歩道が出来たから、地下道を通る人が多い。長い地下道は以前は自由人達のネグラに占拠され異様な臭気が立ち込め、道行く人そして付近の飲食店はたまつたものではなかった。東京都はその対策で自動歩道を付けたのだ。

一彦は、陽気がいいから、友幸が陽だまりにいても知らないと思ひ、地上を歩いた。ベンチに若い男が独りいると、ひよつとして、と思つて目をやる。そんな偶然に期待するのは気休めだと承知しているが、一彦は、わずかも可能性があればたぐり寄せる努力をすべきだと考える。

高層ビルの谷間には思わぬ強い風が吹く。

京王プラザホテル前の通りに、ケヤキ並木があり、芽吹いたばかりの枝が揺れている。交差点の赤信号で立ち止まっていると、目の前に立つ中年男女のご婦人の方が、

「このケヤキ、枯れ枝が多いのじゃない？」と言う。

「都会じゃ、こういう樹木は育ちにくい」と男。

（よく見ればいいのに……）

と一彦の気持ちは落ち着かなかった。

（枯れ枝じゃないよ、小枝がうつすらと黄土色に染まつているじゃないか。もうすぐ芽吹くのだ……）

四月になって陽気が続くと気の早い枝の芽吹きが始まる。しかし三寒四温で、寒気が何日か続くと後続の枝は震え上がって芽を閉じてしまう。すでに芽吹いた枝の若葉はどんどん成長を続けるが、後続の枝は芽を伸ばすのにためらうそれで、あちこちに房のように固まつた若葉のむらができるのだ。しかし十日もしないうちに後続の若葉が伸びてきて、一様になる。すぐに葉の色も濃くなって区別がつかなくなる。一瞬の櫛のまだら若葉なのだ。

友幸の青白い顔が浮かんできて、悲しくなつた一彦は速足で横断歩道を渡つた。

友幸は、松本に移つてすぐ友達が出来たし、スケートに

熱中した。中学高校時代は人並みに反抗期があつて一彦に話し掛けることはあまりなかったが、母親には最小限のこととは伝えていた。スケート部に属し、夏も走りこんで練習にのめりこんでいた。

そして成績は優秀だった。進学校で勉強にも熱中した。進路を選ぶ段階で選択肢は多かった。やさしい友幸は、ボランティア精神に富む妻の感化を受けたのか、人の役に立ちたいとの思いが強く、人を助けてあげる職業として医科志望とした。

それでも、一流大学の医学部は厳しかった。

現役のときの受験で二校とも不合格で、落胆し髪を振り乱した友幸の顔が目につく。

「若いうちのつまずきやロスは、やがて取り戻せる。人生は長いんだから……」

「初心貫徹。努力してみなさい」

それが、昨年の春、浪人して医科に進むべきかどうか迷つた息子を一彦と妻が励ました言葉だった。

でも今は息子に言う言葉がない。

重過ぎる現実、何を言つても虚ろだ。

（息子の青春の彩を奪つた、白い哀しみ……）

不合格通知が届いてふた月が経つ。息子は医科の進学を吹っ切つただろうか。

ここ二週間ほどの友幸は、一彦のパソコンを占有しインターネットに熱中し、血液症患者たちのホームページを食らうように読んでいた。そして二〇〇枚ほどプリントしていた。

友幸が出奔してから、妻と一彦はそれを読んだ。同じ病気に冒された人々が胸中を語ることで、語る方も語られる方も、互いに励ましあつていく。一彦は若くして覚悟を決めた人々の想いに胸が塞がった。

友幸には、あの時入院せずに、抗がん剤を打たずに、まつしぐら、受験に進む道もあった。その過程で倒れても本人は本望だったかもしれない。少なくとも受験準備が万全でなかったという悔いや、遣り残したという未練は残らなかっただろう。

（自分たちは余計なお節介をしたのか……）
と、自責の念に駆られることもある。

しかし、理性で考えることは、友幸は病氣と闘つて少しでも生き延びる努力をすべきなのだ。

でも、そんなことは息子と話せることではなかった。

（いずれ落ち着いて、ゆっくり話をする機会が来るだろう……）

都庁近くのコンビニで公衆電話を見つけ、不動産屋に電話したら、当主は出かけていて、夕方戻るとのことだつ

た。ケータイ番号を覚えてくれたが、メモる気にならなかった。

妻に状況報告した。
友幸からの連絡はまだなかった。

最初、出来たばかりの都庁の建物はゴテゴテしてなじみにくいと思っていた。壁面の模様は、細かくて繊細と言おうか、あるいは見方によっては素朴と言おうか、まるで白い画用紙の模様のビルに彫刻刀で刻んだような細長い格子のテキスチャーなのだ。

「普段着の都民が利用する都庁でしょう。気取っていて場違いのようね」と、妻も嫌った。

十年経った今、眺めると、だいぶ周囲に溶け込んでいたのは、近くに同じ設計者の東京ガスの三連ビルが建っている、雰囲気は調和するようになったのかも知れない。

荷物を提げた一彦は、階段を下りて、だだっ広い地下広場に来た。設計者はここに群集を集め、盛大なお祭りを考えたのだろう。

都庁は出来たばかりの時に何回か来たが、友幸はこの建物にいい印象を持ってない。

都庁は分かりにくいとの評判どおり、デザイン優先の冷たい建物だ。今も、展望台行きのエレベーターがどこにあるか分からない。

と、そんな心配は追いかつた。

頭が二つある建物だから、展望台は南北の二箇所ある。

（友幸は、どっちだ？ どっちへ登ろう……）

と、一瞬迷ったのだが、玄関の自動ドア近くに張り紙がしてあって、月曜は南は休みで、北側だけ営業だった。

地上二〇二メートルの四五階まで五秒で到達する高速エレベーターだ。

中央に喫茶室があるほど広い展望台だ。

景色は抜群だ。都内はもちろん遠くの山々まで良く見える。

案内板に「富士山は冬しか見えません」と白い紙が張り出してあった。

まさに緑の公園がある。

（あそこだ！）

我が家の跡は駐車場になっていた。周りに、二階建てとか三階建ての小さな建物が見えるのは、地上げを免れたのだ。高層ビルを建てるつもりで我が家周辺の一面を地上げしたが、残りの買収が思うように進まないうちにパブルが弾け、計画は取りやめになったのだろう。

自分たちが、もし、あのまま新宿にいたらどうだっただろう。息子は発病しなかっただろうか。

（そんな、ネガティブなことを考えちゃいけない！）

（どうして案内板や案内標識を出し渋っているのだろう……）

以前、一彦は二階の運転免許書の更新センターへ来たことがあった。ところが一階フロアから二階に上る階段がないのだ。わざわざエレベーターか、エスカレーターで行かなければならない。だだっぴろい一階フロアの向こう側に案内嬢が座っているのが見える。高層階行きではなくて二階で止まるエレベーターがどこにあるのか彼女に聞くために、ずいぶん歩かねばならない。

その歩いている途中で、偶然、上りエスカレーターを見つ、二階に上がった。

その後、尿意を催してトイレを探して、通りかかった人に聞いたら、「二階にはトイレがない、一階にある」と教えてもらって、またずーっと回って下りのエスカレーターに乗った。そのトイレが広いフロアの片側にしかない。この建物にはそんな利用者蔑視の感がある。権威ある芸術家の横暴なのだ。

一彦が新宿を去る時、未練を感じなかったのは、この都庁の出現も理由の一つにある。

そして、今、一彦が冷ややかに思ったのは、

（果たして、この建物は、最近のIT施設の整備に対応できるのだろうか？）

（他人ごとだ……）

と、首を振った。

息子はきつと、ここに来て、この場所から、かつての遊び場や学校を目で辿ったに違いない。

エレベーター客の誘導をする赤い制服の女性に、

「ジーパン姿の背の高い若い男を捜している……」と聞いてみたが、「さあ」と首を傾げた。

（無茶な問いだ……）と、一彦は頭を振る。

下りのエレベーターに乗り合わせた、リュックを背負った白人の若者の、半袖の剥き出しの腕が遅しく見えた。

（くたびれた……）

遅い昼飯は、街角の喫茶店でサンドイッチを食べた。オープンテラスに腰掛け、通りを行く人々を眺めていた。背広姿の若者が多い。中に、ジーパン姿を見つけてはその姿を確かめる。そうやって、半時間もいたろうか。

高速バスターミナルを覗いた。

駅の方に向かった。

西口の小田急デパートと京王デパートの間の、おしゃれな小さな店が並ぶ坂を登って南口に向かった。

南口は、高島屋デパートが出来たし、甲州街道に横断歩道橋が架かって、変わっていた。

サザンテラスは待ち合わせの若者が大勢いる。そして多くのカップルがゆっくり散策している。

（もし久子とデートするなら、ここで待ち合わせたのだろうか？）

久子は小学校からの同級生である。とびきりの美人ではないが、清楚な人で、優しかった。似合いのカップルだった。彼女は短大の保育科へ進んだ。久子は、昨年高三で受験失敗した友幸を励ましてくれたようで、今年になってからも何通か手紙が届いていた。でも、友幸の発病と入院のことは知らないだろう。

一彦は、花壇の縁に腰掛けて、じっと道行く若者たちを見ていた。

（この中に友幸と久子が腕を組んでいたら、本当にうれしい……）

（そんなに甘くいくわけがない！）

と、一彦は首を振る。

（友幸は、悶々として、まだ彼女に会わないでいるのだろうか？）

（あるいは、会って別れて、しょうぜんと肩を落とし、道端にうずくまっているのかもしれない……）

甲州街道の横断歩道を戻った。JR南口付近は相変わらず紙くずやゴミが散らかっていて汚い場所だと思った。

街道沿いに坂を下って三越の方に折れるつもりだった。ふと、夕焼けに惹かれて振り返ってみた。坂の途中の、

る街。いかれた女子高校生が声をかけられなくて、夜遅くまでたむろする街。

（ここには、あの子はいまい……）

新宿を離れることを決めたのには、こんな繁華街のそばで大きくなったら、スレた子にならないだろうか、という不安があった。

田舎でのんびり育てられて、友幸はのびのび育った。おらかな子供だった。高校時代は勉強とスポーツを両立させた。そして、浪人してからは青白い顔をして勉強だけに打ち込んだ。

でも、もし望むなら、友幸はここで一夜の歓楽を過ごしてもいいのだ。早くあいつに会って金を渡してやりたい。（あいつの自由を束縛するつもりはない……）

一彦は思い立って、また歩き始めた。再びバスターミナルに行った。

そして、

（ひょっとしたら……）

と、家に電話した。

（今日は、だめだった……）

「おやすみなさい」と妻に言った。

友幸を見つけるのは容易なことではない。

ほんの小さな一画から眺めると、けばけばしくぎらついたネオンの看板の群れが途切れる隙間があつて、東京ガスの三連ビルの夕陽がきれいだった。新宿にこんな隠れた夕暮れの景観スポットが出来たのだと感慨深かった。

不動産屋へ電話した。同年輩の、かつての税理士稼業の顧客だ。

「しばらく、中条です。野暮用があつて出てきました。ついでに、こないだの件、相談したいと思います。明日、都合のいい時に現地の建物の痛み具合を見せてくれませんか」

「明日は詰まっているんですが、朝早くならいいです」「けっこうです。私の方もちょっと込み入った事情があつて、また、夜、電話を入れます」

そのあと今晚の宿泊先をどこにしようかと思案し、金のない友幸が泊まりそうなサウナかカプセルホテルにしようと思った。

歌舞伎町の入口で、ジープバンにリュックを担いだ若い男を見つけたので、急いで跡を追いかけた。

違った。歌舞伎町は喧騒な歓楽街。街頭でキャッチされた酔客がいかかわしい地下室に連れて行かれて身包みはがれて放り出される暴力バー。台湾マフィアと日本やくざの抗争のあ

（あいつはまだ所持金を残しているだろうか？）

（今晚はどこに泊まるつもりだろうか？）

遅くなって、東口の西武新宿駅前のカプセルホテルで泊まった。初めての経験だった。四〇〇〇円だった。

併設するサウナで夜を明かすと二八〇〇円。休憩室で毛布一枚をかぶって仮眠できるようだった。息子が泊まっているかもしれないと思って、時々、浴室の仮眠室を覗いた。カプセルは自分の休息する空間が確保されるので、休まる。（今日は歩き疲れた……）

一彦は、ずいぶん早くから目を覚ました。

もし息子がいたら、たぶん朝はゆっくりしているだろうと思つたが、落ちて着かなくてあちこち覗いた。

併設の薄汚い食堂で、うどんを食つた。

（まさか、家に帰ってないだろうな……）

家に電話した。

朝八時に、不動産屋と待ち合わせた新宿二丁目に行った。不動産屋は気心の知れた男で、一彦はこの男の商売事情はすべて承知している。口数の少ない、信頼できる男だ。そして家の売買などで世話になった。

築後三〇年の雑居ビルはあちこち傷んでおり、小手先の補修は無駄な投資になる。建て替えるか、手放すかである。

思い切って手放すことにして、不動産屋に買手を探してくるよう頼んだ。

「時期が悪いですよ」と、男は言った。

「いろいろな事情もありまして、補修費が嵩むようなら手放します」

「今、出費は避けた方がいい……。この際、売る手配をしておいの方がいい……」

とは、妻と打ち合わせてきたことだ。

男は、うなずいた。

「買い手を捜してみしよう」

男は、

「ゆうべ、おっしゃった、込み入った事情とは、どんなことですか？ 私でお役に立つことがあったら、言ってください」

頼りになる男だ。

「いや、息子が白血病になって、退院したばかりで家出しましてね。電話があつて新宿にいるというので探しに来たんですよ。いや、夕べの電話だから、今日か明日には家に戻るはずですが、金も持たないので心配ですね」

「そうですか。友ちゃんが白血病ですか」

「もし、姿を見かけたら……」

と言いかけて、あれから十年経っているから子供の姿格好が分かるわけがないと思った。

そして妻に電話し仔細を報告した。

友幸からの連絡はなかった。

とりあえず、自分の仕事は終えた。あとは友幸を捕まえることだ。

果たして会うことができようか。

（うろろろしているうちに行き違いになることはないだろうな……）

（まさかあいつが行き倒れて、保護されてるなんてことはなからうな……）

それから、

（ひよつとして……）

と思い、すぐ近くの新宿御苑に向かった。

この公園にはとても大きな樹木がある。そして、四季折々の草花が咲く。若い頃、妻とデートした場所だし、幼い友幸を連れてよく来たところだ。

ヒートアイランドと言われるように、都心の春は周辺より一足早い。三月末から四月初めにソメイヨシノが咲き、今は八重桜も終わって、多くの木々の萌黄色が緑に変わろうとしている。

入場料二〇〇円。若者のデートには最適地だが、公園内は広すぎるから、病身の友幸は行つてないと思い、中に入らなかった。

思い切って一彦が上京してきた意味があつた。やれやれだった。

ターミナルの新宿駅西口で降りた。すぐ目の前がピースである。

見つけた。

その喫茶店の前で、青いリュックを足元に置いて、息子は壁にもたれていた。

「やあ」と声をかけると、

「すみません」と言った友幸の顔は、目の光が弱かった。

それでも思いのほか体の動きは軽そうだった。

「薬を二日分持ってきた、ちゃんとやつてるか？」

「うん。だいじょうぶ。大事に扱っている」

無精ひげがほえんだ。

「ともかく休もう。何か食うか？」

「あとでいい」

とりあえず妻に報告した。

ジーパンが垢じみていて、そばに寄ると少し体が匂う。その喫茶店に座ると、目の前の友幸の頬が薄汚れている。

「ゆうべはどこにいた？」

「駅の西口で過ごした。お金がないから……。コンクリー
トの上は冷たいね」

身体を大切にしろ、と言いたかった。

「都庁の展望台に行ったか？」

「うん。行った。北側に登った。前に住んでいた家は駐車場になっていたね。でも、正ちゃんの家と達っちゃんの家は残っていたね」

「そうだったね」

懐かしい友人達には会わなかったのだろう。

「毎日、何をしていた」

「前に行ったことのある場所を、ずーっと、歩いていた。くたびれないように、ゆっくりね。雨の日は山の手線をグルグルまわった。一回り五十分かった。小学三年生のころの冒険を再現したよ」

「そんな薄汚れた格好じゃ、お母さんが悲しがる。着替えを持ってきた。風呂に入ろう。おい、あの黒い温泉に行こう」

「ああ。あそこだね。今日は火曜だから休みじゃないよね」

タクシーで行った。十二社天然温泉。タオルも浴衣も貸してくれた。

含食塩重曹泉で、水が黒いのだ。風呂で身体を洗って、

「疲れた、少し休みみたい」

「横になっておれ。その間に、コインランドリーでお前の着ているものを全部、洗濯してやる」

「すごく平べったい建物だから、どうしてかと考えた。どの客室にも窓をつけるためだと分かった。

きつと、そうだ。

部屋から夜景がきれいだろうね。おとといあの近くのサウナで過ごした時、あのホテルにはどんな人が泊まっているのだろう、とうらやましかった」

そのホテルを電話で予約した。

「あした、寄席に行ってみようか」

「おととい末広亭の前を通った。小さい頃よく行ったね。

あの頃、僕は落語はわからなかったが、紙切りとかコマ回しがおもしろかった」

「その他に行きたい所はないか？」

「もういい。お母さんのおみやげは、追分だんごがいいよ」

そう言ったあと、思いつめたような顔つきで、口を開いた。

「久子さんに電話する。僕の病氣のことを話しておく」

「そうか」

「涙は全部松本で落としてきたから大丈夫」

友幸はありのままに事態を受け入れる境地になったのである。寂しそうだけど、従容として己の運命を受け入れようとする男の、厳しい顔であった。

一彦は財布からテレホンカードを取り出した。

友幸は、表の緑色の電話ボックスで長いこと話していた。

妻に電話した。

「安心しました。」

これから私はお義母さんのところに行ってきます。もう五日も行ってませんでした」

一日置きに、鬼のような姑のところに顔を出す、心やさしい妻だ。

ソファで横になって、楽になったようだ。長髪の顔に生氣が戻る。

白い顔のあおい髭剃り跡。太い眉、なかなかいい男だ。

「久子さんには電話したのか？」

「うん。一度電話入れたけど、留守だった。会わない方がいいかも……、と思っていた」

「そうか」

（自分が息子の立場であつても、そうかもしれない……）

（でも、会えるうちに会っておくこともある……。別れを告げるのなら……）

友幸が決めることだ。

「おい。もう一日、新宿で過ごそう。どこかホテルを探そう」

「西部新宿のプリンスホテルがいいな。お金はあるの？」

「だいじょうぶ。でも、どうして？」

「久子さんは、あした昼から付き合ってくれるって……。合格の連絡がないので心配してくれていた」

目が輝いていた。

「じゃあ、俺は、明日の朝、先に帰る。おかあさんが心配しているから、お前の様子を話しておく。それに、畑が待っている」

友幸はうなずいた。

「小遣いをやろう」

五万円を渡した。

「こんなにいいよ」

「二人分だ。レストランで、おいしいものを食べな。親父が出してくれた金だと言えば久子さんも安心するだろう。明日もう一番泊まってもいいんだぜ。電車で帰ってこい」

「うん」

一彦が出てきた甲斐があつたのだ。

「僕は人のために尽くしたいと思った。それで医者になろうと思った。僕は、医者になれないが、死んだら生体を提供する。僕の角膜を、若い勉強好きな人にあげてね」

「しゃにむに生きろ……」

と、言いかけた言葉を、一彦は呑みこんだ。

（息子があと何年生き延びられると言うのだ……）

白血病は不治の病である。先立つ運命にある息子だと覚悟して、別れる時間がたつぷりあることを幸いと思わねばならない。

今、友幸が選んだのは化学療法を続けることだった。何日かおきに抗がん剤を打ちながら、年に何度か病院へ行つてマルクを受けて病状を確認する生活である。うまくいけば、長期にわたってそのような生活を続けていくことができる。

化学療法によって普通の人と変わらない血液状態になることがある。血液学的寛解というのだが、それは一時的なもので、数年後に急激に病状が悪化し急性骨髄性白血病と同様の症状があらわれ、死に至る。

友幸は、ドナーを見つけて骨髄移植し、うまくいけば白血病を根治する選択肢がある。

でも、必ず成功するわけではない。

人から骨髄液の提供を受けることが決まったら、まず、強力な抗がん剤投与あるいは全身放射線照射によって自身の白血病細胞をすべて殺さなければならない。それに耐える体力がいる。その間、感染症などに無防備である。そして、移植後は、ドナーのリンパ球が患者組織を免疫学的に攻撃する移植片対宿主病（GVHD）に苦しむ。

危険を承知で骨髄移植に賭けて根治させるか、確実に何年か生き長らえる化学治療を続けるか、その選択は本人しだいだ。

そして、現実問題として、ドナーがいないのだ。

一彦と理恵子は、自分達がドナーになることができないのか、と担当医師に相談した。

「可能性は低いでしょう」と、眼鏡を光らせた中年の医師。「友幸に上げられなくとも、他の子に提供できればいいです」と、一彦。

「そうですか」

色白の医師が微笑んだ。

「兄弟はおられますか？」

「一人っ子です」

医師が語った。

兄弟姉妹間で適合する確率は4分の1で、患者に大勢の兄弟がおれば、適切なドナーが現れる可能性が高いのだそう。そして、血縁者ではGVHDの危険性が少ない。

「そういうお志なら、ドナー登録されますか？」

ドナーの年齢制限は五十才で、一彦はまだ三年ある。

「ええ」一彦はうなずいた。

「ドナーのなり手が少ないです」と、医師は微笑んだ。

骨髄移植には、800〜1000CCを採取するが、そ

か行なえない。

一彦も、妻も、骨髄移植推進財団にドナー登録して、気持ちを落着かせることができた。

友幸は医師の道は閉ざされた。

死を覚悟した友幸は、生きる希望を持たねばならない。

友幸は生きがいは何に求めればいいのだろう。

自分と同じ税理士の道を歩ませるなら、手ほどきしてやる。でも、学校に行かなければならない。そして、税理士の仕事は十二月から三月に集中した体力勝負だから厳し過ぎるかもしれない。

家庭教師ならすぐにでもやれよう。塾の講師でもいい。家で塾を開いてもいい。落ちこぼれの子供たちに手を差し伸べてやればいいのだ。友幸が日々生きる励みになろう。たぶん妻も賛成してくれるだろう。

じつくり、友幸の様子を見て、切り出してみよう。

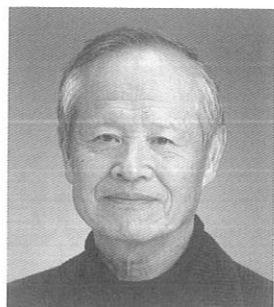
（でも、そんなことは親が強制する話ではない……）

まず彼自身が、どう生きるかを模索することだ。そして思い定まらない時に、アドバイスしてやることだ。

まじまじと一彦の顔を眺めていた友幸が、

「おやじ、白髪が混じったね。心配かけたね」

「俺も五十近いから、年相応だろう」



前岡光明

まえおか みつあき

- 1940 年 中国天津生まれ
 岩手県一関市で育つ
 63 室蘭工大土木工業科卒業
 各地のダム建設に従事する
 技術士（建設部門）
 趣味。創作、卓球、ソフトバレーボール、ナンプレXの問題作成。
 2002 第14回GE横河メディカル・Essay 大賞審査員特別賞「バスの中の母と娘」
 05 山形大学数理科学科主催第1回数学エッセイコンクール優秀賞「熟年者の算数家庭教師」
 06 第2回銀華文学賞奨励賞「蠟梅の香るとき」
 07 第3回文芸思潮エッセイ賞奨励賞「終の棲家」

受賞の言葉

前岡光明

私は設計コンサルタントだったが、技術レポートでは事実しか書けないもどかしさがある。因果関係は決まり切っていると思うが証拠がなければ主張出来ない理詰めの作業に葛藤していた。かれこれ、十五年ほどになるうか。仕事に余裕ができて、また、当時抱えていたあるストレスを拭きたい気持ちもあって、文章を書き出した。最初は、エッセイ、次は小説と、文章を綴った。しばらくして読み返し、未熟さに愕然となる。修正を繰り返す。小説は発想が自由で好きなように展開できるが、生半可な意志では仕上げられないものだと知った。今度の作品も、何年かかけて推敲したものがある。三次予選通過の連絡を受け、ほっとした。インターネット掲載申し込みの前に、もういちど見直そうと思っていた。そんな時、編集長から電話をいただき、驚いた。大きな励みを与えていただき感謝したい。親と子のことを、また書きたいと思っている。

タクシーで、西口に向かった。

「何を食べようか？」

友幸がガラス窓を指で叩いて合図するので、思い出横丁の前で降りた。

ここは薄汚い店が並ぶ場所だが、家族的な雰囲気のお店が多く、何よりも安いのがいい。夕刻からはお酒を飲むサラリーマンで混む。

「いい匂いがするね。おとといの昼、あそこでトン汁の定食を食べた」

「それじゃ、覗いてみるか」

うなずいた。

「何を食べる？」

「焼き鳥。少しいいけど、レバーを食べたい」

「よし、おとうさんは飲むぞ。酔いつぶれたら介抱してくれ」

「どうぞ、ご遠慮なく」

「その前にお母さんに電話しとこう。もうおばあちゃんのところから家に戻っているだろう。こういう時は、ケータイがないと不便だな。お前、帰ったらケータイを持って」

「うん。お父さんもケータイを持った方がいいよ」

「そうだな」

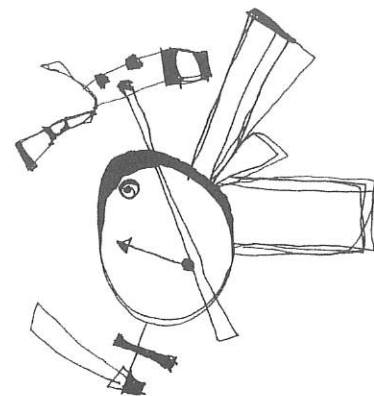
水 渴

河林 満

文学界新人賞受賞作

水道代が払えない家族を死に追いつめたものは何か
 表題作と「海辺の光」など
 母性と肉体の連結を希求する
 気鋭の作家の力作小説集

文藝春秋
 1300 円（税）



道標

井上梨白

（おれは今、なんでこんなところにいるのだろう……？）
虚ろな視線の先にある薄汚れた板張りの天井を眺めながら、私は心の中で呟く。

コンクリートの上にリノリウムを張っただけの古ぼけた床の固さが、薄い煎餅蒲団を通して仰臥する私の背中に伝わってくる。

「ここで、二泊三日を過ごします。その間に、自分がなぜ今ここにいるのかをよく考え、素直な気持ちで過去を振り返るですよ。そのうえで、思ったこと、感じたことをこの便箋に書き留めて、ここを出るときに見せてください」

今朝、この部屋に私を連れてきたわが娘のような若い女性看護師が、諭すように言った言葉を思い出す。

そう言い残して部屋を出ていくその背に向かって、

（おれが、いったいどんな悪いことをしたというんだ！）

と、胸の内で叫んだものだ。

だが、もうじたばたするのはよそう。

これから、ここでどんなことが起ころうと、たとえ囚人扱いされようと、私は、自らの意志でここに来ることを決めたのだから。

天井に描かれた意味のないシミ模様を、焦点の合わない眼で追いながら、私はまたあの夜の光景を思い出す――。

ホテルの一室のほの暗い灯りの中で、排気口の鉄棒に浴衣の帯を結わえつけ、輪状にした一方を首にかけて椅子の上に佇んでいた。この椅子を前方に蹴り倒すだけでいい。ただそれだけで、この数年、自責に苦しみ続けた「生」からおさらばできるのだ。結城正明よ、行け！ さあ、自ら決めた死に向かって潔く旅立つのだ！

だがしかし、己を鼓舞すればするほど、私の両足は棒のように硬直し、私の意思を拒否し続けた――。

アルコール依存症――。

かつて「アル中」と呼ばれ、いまだ誤解と偏見なしでは語られない陰惨な病。それは、患者本人のみならず、家族をはじめとする周囲の人間をも不幸に陥れる怖ろしい病。だが、その社会的問題性にもかかわらず、「アル中」がガ

落書きを擦り取った跡や引つ掻き傷の目立つ、ベニヤ板で囲まれた十畳ほどの空間に私はいる。片隅の、ほんの形だけ仕切られた粗末な衝立を隔てて、むき出しの便器が見える。壁の一面には、部屋の広さには不釣り合いなほど大きな窓が切られていて、頑丈そうな鉄格子が、午後の光を鉛色に反射している。中庭を隔てた窓の向こうには雑木林が広がり、夏の終わりの太陽がどこか力なく輝いている風景が、マルチ画面のように私の網膜を射る。

「結城さんは大丈夫だとは思いますが、規則なのでドアには鍵をかけておきます。なにかあったら、声を出して私を呼んでください」

『仁科』と書かれたネームプレートを胸につけた看護師が、

ンや糖尿病などと同様の「病氣」である認識され、まともに医療の対象として陽の目を見ることになったのは、まだつい最近のことに過ぎない。

これまで、アル中は「慢性アルコール中毒」といつて、これに罹る人間は性格異常者か人格欠落者として蔑視され、治療方法などないものとして医療の現場からも永く無視され続けてきた。

日本で、アル中の専門病棟がつくられたのは昭和三九年、東京オリンピックが開かれた年。神奈川県三浦半島にある国立久里浜病院が最初である。この設立にあたっては、作家であり精神科医でもある、なだいなだ氏の存在が大きかったと言われているが、このときにしても、オリンピックを控えて、外国から多くの選手や観光客を迎えるにあたって、日本の恥をさらすことのないよう全国のアル中患者を一箇所にまとめて収容したのだという、まことしやかな噂が流布するほど、アル中に対する社会の認識度は低かった。だが、かくいう私も、それを非難する資格は毫もない。

妻や子をはじめとする周囲の忠告や指摘に耳を貸さず、何十年もの間、深酒、暴飲を続け、明らかにアル中の症状を呈してきてからも、自分がアル中であることを頑として認めなかったのだから。

ともあれ、現在ではアル中は、「アルコール依存症」という名前を持つ立派な「病氣」として、医学・医療の対象と

なり、その治療方法や技術が確立されてきている。

気持が冷静を取り戻すにつれて、周囲の板壁につけられた無数の傷跡の悲惨さに気付く。離脱症状（一般的には禁断症状）に襲われた患者たちの、血を吐くような苦しみの跡だ。後に分かったことだが、この病院に入院してきた人たちは、例外なくこの部屋で二泊三日の時を過ごす。これは、酒や麻薬に侵された身体からそれらの残骸を抜き去り、同時に、入院に至った経緯を振り返ることによってこれからの治療の第一歩とする、言わば回復への決意を固めるための時間なのだ。

ようやく陽は西に傾いて、窓に差し込む陽射しが覚束なげな光に変わり、喧しかった油蟬の声がいつしか止んでいた。

脳裡を駆け巡っていたさまざまな思いが、再び記憶の引き出しの中に戻っていくのを覚えながら、私は仰臥の姿勢に倦んで身体を捻って横になった。ふと、手入れの行き届いた公衆便所のおいがした。

そのにおいが引鉄^{ひきがね}になったのか、私は猛烈な尿意をもよおした。そういえば、今朝からまだ一度もトイレに行っていない。

私は鈍重に起き上がり、部屋の片隅の衝立で仕切られたむきだしの便器に蹲って小便をした。私の全身を得も言え

「さ、酒、酒です……」

と私は答えたが、喉の奥に引っ掛かったその声は小さく、きつと少しばかり震えていたに違いない。

「そうですかい。あんた方のような堅気の衆は酒にやられるんだよな。おれみたいな極道連中はクスリに負けちゃうんだ。ですがね、ここには、おれみたいなクスから、医者や大学教授や大会社のエライさんまで、いろんなお方が入院していなさるが、婆婆の肩書きなんぞ、ここでは何の役にも立ちゃあしねえ。みんなおんなじアル中、ヤク中だ。まあ、そう思っただけで気楽にやんなせえ」

五十を少し過ぎたばかりと思われる、私と同年配のその男は、そう言っただけでベッドにごろりと横になった。

その様子を、男と向かい合ったベッドの縁に腰掛けて、伏目がちに窺っていたボサボサ髪の長身で瘠せた男が、胸い上げるように私を見た。その一瞬、私は全身に冷水を浴びせられたような気がして、その光のない懷疑と不信の色を湛えた眼差しから眼をそむけた。

（これはどれくらいとこに來てしまったな……）

覚悟はしていたとはいえ、私は正直そう思った。

もちろんあとから知ったことだが、恰幅のいい短髪男の名は杉原豪。関東を地盤とする広域暴力団竜誠会系杉原組の組長である。そして、ボサボサ髪の瘦身の男は、朴成正。在日韓国人二世で、正しい読みは、バク・ソンジョン。日

ぬ屈辱感が走った。

この病院に入院する患者たちが「ガッチャン部屋」と呼ぶ（病院側では正式にどう呼んでいるのかは知らない）閉塞した無機質な隔離空間で、為すすべもなく永い二泊三日の時を過ごした私は、晴れて一般病棟に移ることになった。この間、仁科看護師が言ったように、素直な気持で過去を振り返ることができたかどうかは分からない。けれど、永年にわたって犯してきた自らの罪の重さと深さをあらためて知ったことだけは確かだ。

ようやくにして、普通の病院の病室らしい病室に移った私を迎えたのは、哀れみと同情と、少しばかりの敵意を含んだ虚ろな六つの眼であった。

四人部屋の、入り口に近い二つのベッドのうちの一つを、仁科看護師に指示され荷物を解いている間中、その六つの眼は、私の動きの微細な部分までも見逃すまいとするかのように、無言で私を威圧し続けていた。

その異様な空気に耐えながら、二ヶ月間を過ごす身の回り品を所定の場所にあらかた片付け終えた頃、

「酒ですか？ それともクスリですか？」

私のベッドと縦に並んだ、窓際のベッドを占める恰幅のいい短髪の男が、話しかけてきた。凄みのあるその声の調子に気圧されて、

本ではボク・シゲマサで通しているという。

都会からそう遠くないにもかかわらず、このあたりは、なぜか開発から取り残されたように、県道が近くを走る以外は、周囲を森や林や畑に囲まれた自然が多く残っている地帯で、地元の人々は「よもぎ野」と呼ぶ。きつと蓬が群生しているのだろう。そして、この病院は、設立した自治体と、このあたりの住所地名からつけられた正式な名称があるにもかかわらず、誰もが少しの蔑意を込めて「よもぎ野病院」と呼んでいる。

よもぎ野病院は、全国でも数少ないアルコールと薬物依存の専門治療施設である。ここでは、アルコール依存症者と薬物依存症者（いわゆる麻薬中毒患者）を、若干のプログラムの違いはあるが、同じ病棟・病室で同じ病院生活を送らせる。だから、私の病室、つまり二〇五号室には、アルコール依存症の私と朴成正、薬物依存症の杉原豪ともうひとり、沢木某という二十歳そこそこの若者が入院していた。

アルコール依存症と薬物依存症は、いわば精神に異常をきたし、社会生活に不適合をもたらしている病気だから、そういう人々が入院しているこの病院では、毎日のように事件や問題が起こる。私は結局、二ヶ月間をここで過ごしたわけだが、そのことを身をもって知らされる事件が、一般病棟に移ったその夜に起こった。

入口に近い私の隣のベッドに位置を占める沢木が、午後九時の消灯時刻を過ぎても寝つけないらしく、さかんに寝返りを打っている。もちろん私も、そんな早い時刻に眠れるはずもなく、また病棟を移って最初の夜ということもあって、気が昂ぶって眼が冴えていた。

そのとき、突然沢木が、「キエーッ」という奇声を発してベッドから飛び起きたのだ。

「沢木くん、どうかしたの？」

間髪を置かず、ベッドの脇に備え付けられたインタホンから女性看護師の声がした。ボタンを押して看護師を呼んだのであろう。

「来て！ すぐ来て！ 怖い！」

沢木の泣き叫ぶようなその声が終わるか終わらないうちに、若い男の看護師と女性看護師が飛んできた。

「どうしたの？」

男の看護師が、ベッドに半身を起こしている沢木の肩を抱くようにして言うと、

「あれ、あ、あれが……おれに向かって襲ってくるんだ！ 怖い！ 殺される！」

沢木の指差す方角には、病室の天井の片隅に取り付けられた、ほの暗い非常灯のあたりが一つ、暗闇にぼうつと輝いているだけだった。

「なに言ってるの、沢木くん。あれは電灯じゃないの。大

丈夫よ」

女性看護師の言葉も耳に入らないかのように、沢木は男の看護師にしがみついて、異様な瞳で一点を見つめている。その身体は小刻みに震えていた。

「今夜の当直の先生は？」

自分たちでは手に負えないとみた男の看護師の言葉に、

「松本先生よ。私、呼んでくる」

女性看護師がそう答えて病室を走り去った後も、沢木は、しきりに落ち着かせようとする男の看護師の腕の中でもがき続けた。

「助けて！ 怖い！ 殺される！」

悲痛な叫び声に、杉原豪も朴成正も、ベッドの上に起き上がった事態を見守っていた。

間もなく駆けつけた医師が、かれの腕に注射を一本打つと、やがておとなしくなり、そのうちに、すやすやと寝息を立てて眠り始めた。その様子を観察していた医師は、目顔で二人の看護師を促し、静かに病室から立ち去っていった。

ところが、事態が一段落し、私にようやく眠りが訪れようとしていた頃、隣のベッドが物音を立てて揺れる様子に眼を覚ました瞬間、沢木がまた、「キエーッ」という奇声を発したかと思うと、病室のドアを開けて廊下に飛び出していた。そして、廊下を何人かの人が走る音と叫び声に

混じって、人ともみ合う様子が伝わってきた。だが、それも束の間のことだった。廊下は再び静けさを取り戻し、消灯後の病室の陰気な薄暗い空間に返っていた。その夜、沢木がベッドに戻ってくることはなかった。

翌朝。

「幻覚を見たんだ、あいつ。一週間が辛いんだよな、クスリは。もう少し辛抱できればなァ。ガッチャン部屋行きか……」と呟く杉原に、

「いいや。出て行ったらしいぜ」

と答えた朴の言葉通り、その後、病院内でかれの姿を見たものは誰もいない。離脱症状の苦しみに耐え切れず、病院を出ていった沢木という若者は、そのとき入院五日目だったという。

よもぎ野病院は強制収容施設ではない。入院も自由であれば退院も自由。最長三ヶ月という一応の期限はあるが、入院期間は医師と患者との話し合いで決められる。だから、ここに入院している患者たちは、自らの意思で病気を治そうとしている者たちばかりなのだが、当初決めた入院期間を満了することなく、途中で退院していく患者はあとを絶たないという。

とにかく、こうして私は、入院早々私にとっては衝撃的な事件の洗礼を受けて、このよもぎ野病院の入院患者のひとりとなった。

午前 六・〇〇 起床・掃除

七・〇〇 体操

七・三〇 朝食

九・三〇 朝のミーティング

一〇・〇〇 午前の部プログラム

一一・四五 昼食・休憩

午後 一・〇〇 午後の部プログラム

三・〇〇 入浴

五・四五 夕食

七・〇〇 夜の部プログラム

九・〇〇 消灯・就寝

という病院の一日は、初めの頃こそ珍しく、回復に向けての固い意志が病院生活の張りを支えていたが、毎日毎日繰り返される同じプログラムに、十日もしないうちに飽きてきた。入社以来三十年間、営業とマーケティングの仕事が続けてきた私にとっては、じつに単純で単調な作業の繰り返しだったからである。

だが、そんな気持が湧き起こる度に、私は自分自身を戒めた。

「教養のある人ほど、ここでは脱落しやすいのです。単純なプログラムの繰り返しをバカにしてはいけません。結城

さんも、回復して家族や迷惑をかけた人たちに償いをしようと言われたのですから、二ヶ月間を全うするようがんばってください」

入院を決意したとき私を診察した大野医師の言葉を、あらためて思い出す。

昔から、喉元過ぎれば熱さを忘れる、という言葉があるけれど、人が生きていく中には、忘れなければならぬことや、忘れてもいいことがあると同時に、決して忘れてはならないことがある。私にとって、このよもぎ野病院で体験したことは、後者であることは言うまでもない。その意味で、生涯忘れることのないための記憶の護符として、そのうちのいくつかを書き留めておこうと思う。

だが、私が、なぜこの病院に来ることになったのかのいきさつについては、くどくどとは述べまい。何を言おうと、それは自分自身への卑怯な言い訳と愚痴に過ぎないからだ。ただ言えることは、私が永年に亘る暴飲によりアルコール依存症に罹って、妻や子供たちはもろろんのこと、親類縁者、さらには友人知人たちに多大の迷惑をかけ、信頼を失ってしまったということだけだ。

回復のためのプログラムには、大きく分けて四つある。《精神療法》、《作業療法》、《医学的知識の習得》と《自助グループとの交流》である。この四つのプログラムが、曜日によって、午前の部、午後の部、夜の部に振り分けられ

ている。

精神療法とは、一言で言うところ、「振り返り」である。

少人数のグループ別に、酒や薬物に侵されてきた過去をメンバーの前で発表する。コーディネートするのは、ケースワーカーと呼ばれる精神保健福祉士の人たちだ。発表する一方で、自分と同じ立場の人たちの話を聞くことによって、過去を振り返り、二度と再び酒や薬物に手を出さないことを確認し合うことが狙いだ。

作業療法は、農作業と軽い運動を中心とするレクリエーションである。病院の一角につくられた畑で季節に応じた農作物をつくったり、体育館で卓球やバドミントンをしたりする。それらが身体にきつい人のために、輪投げなどを用意してある。

農作業は、土おこし、畝づくりから種蒔き、収穫までをグループで協力し合いながら行う。患者のほとんどは、酒や薬物によって健康が損なわれているので、適度に身体を動かすトレーニングによって身体的健康を取り戻すことが不可欠なのだ。

医学的知識の習得は、主に医師による講義で、酒や薬物が身体や精神に及ぼす影響がいかに甚大であるかを、患者に理解させるのが目的である。

アルコール依存症者は、全国に二四〇万人いるといわれている。これは、じつに日本の全人口の五〇人に一人とい

う大きな数字である。しかも、分母を飲酒人口に置き換えてみれば、この割合はもっと大きなものになる。

じつは、アルコール依存症は、現在ではガンを抜いて日本人の死因のトップになっているともいう。表面上、アルコール依存症という死因はない。だが、直接の死因は心臓や脳や他の臓器などにあっても、その根底にアルコール依存症が存在することが非常に多いということなのである。にもかかわらず、アルコール依存症という病名で、きちっと治療を受けている人は、わずかに二〇万人程度にすぎないという。このことは、現在においてもなお、この病気が「病氣」として正しく社会に理解されていない証拠とは言えないだろうか。

自助グループには、「断酒会」と「A・A（アルコールホリック・アノニマスの略）」という二つの全国的な組織があり、それらに加入する人たちが病院を訪れて、自分たちの過去と経験を話し聞かせることによって、入院患者に回復への誓いを新たにさせる目的で行われる。

この二つのグループは全国各地に支部を持っており、それらがほぼ毎日のように会合（ミーティング）を開き、会員同士が交流することによって、断酒の誓いを新たにしている。

独力で酒を断つことはきわめて難しいと言われる。そのことを実証するある統計によれば、退院後、何らの自助グ

ループにも参加せずに、二年後まで断酒できている患者は、わずか二十四、五パーセントに過ぎないという。

ともあれ、単調な日々が続いていたある夜、私は、夕食後のひとときを食堂に連なる談話室で、見るともなしにテレビの画面に眼をやっていた。私の横のソファには、朴成正が、いつもの伏目がちな瞳に、どこか拗ねたような色を湛えて座っていた。

「あいつじゃないか、あいつ。冷蔵庫の中のおれの茶をいつも盗み飲むやつは」

背後から聞こえる大きな唖れ声に振り返ると、山村という七十歳をとうに過ぎたと思われる老人が朴を指差している。山村老人は、四五歳のときからドヤ暮らしで、この病院に入院するのが七度目という筋金入りのアル中患者である。

そう言えば、最近、冷蔵庫に名前を書いて保管してある個人の物品がよくなるという噂が、患者たちの間に広がっていることを私も知っていた。

「そうだそうだ、あいつだよ。おれも見ただ。今朝も早くから食堂に来て、冷蔵庫の中を漁ってやがった」

すかさず相槌を打ったのは、大谷という男。Tシャツからのぞく二の腕に彫り込まれた、倶利伽羅紋々の刺青が眼を奪う。

名指しされた朴は、ただ一言、

「おれじゃねえよ」

と言ったきり、口をつぐんだ。

「なに、おれじゃねえって。朝鮮人が一人前の口きくんじゃねえよ。コソ泥をするなんてえのは、朝鮮人に決まってるじゃねえか。え、みんな、そうだろ」

大谷が、凄むように周囲にいる男たちに同意を求めた。

そのときである。

食堂の片隅でひとり茶を飲んでいた杉原豪が、おもむろに立ち上がると、大谷の面前に立ちふさがった。

「てめえ、朴さんがやったって証拠でもあるのかい」

その堂々とした立居振舞と凄みのある声に圧倒された大谷は、

「おれが見たのが、なによりの証拠だよ……」

と、さっきの勢いとは見違えるほどの小声で答えた。

「朴さんがやっつてねえと言ってるんだから、これほど確かなことはねえ。てめえ、へんな因縁をつけるんじゃない」

杉原の一喝に恐れをなした体の大谷は、ぶつぶつ何かを呟きながら食堂を出ていった。最初に名指しした山村老人も、どこかきまり悪そうな面持ちで大谷のあとに続いた。

山村老人と大谷が去ったあとのどこか白けた空気の中で、私はいつか風呂場で見た杉原の、背中一面に鮮やかに描かれた、見事な真紅の薔薇の彫り物を思い起していた。

から、この病院に何度も入退院を繰り返す患者は跡を絶たないのだ。

入院して一ヶ月が経過すると、土曜日から日曜日にかけて外泊が許されるようになる。そうになると、ほとんどの人たちは家族のもとに帰って週末を過ごすのだが、朴成正のように、家族も帰るところもない人は、休日にも淋しくひとり病院にいたってはならない。

「帰るところのある人はいいなあ……」

土曜日の朝のミーティングが終わると、ほとんどの人たちはそそくさと病院を出て行く。その姿を見ながら、朴がぼつと呟いたのを思い出す。

この外泊訓練で、酒に手を出さずに病院に帰ってくることは、なかなか容易ではない。たとえ一滴でも飲んでしまうと、それまでどれだけ断酒していても元の木阿弥。いや、以前よりもっと悪い状態に戻ってしまうのがアルコール依存症という病気の怖いところなのだ。

アルコール依存症というのは、一言でいえば、体内のアルコールをコントロールする機能が永久に失われてしまう病気である。だから、わずか一滴のアルコールが体内に入ることによってさえ、菌止めがきかなくなってしまうのである。現代医学では、この機能を回復する手立てはいまだない。

北山はスリッパしたのである。

その数日後、大谷は、薬物を求めて深夜病院を抜け出したところを、張り込んでいた刑事に見つかり、その場で逮捕された。じつは、かれは、警察に追われて病院に逃げ込んだのだが、病院側ではあくまで患者として扱い、病院内にいるかぎり警察は手出しがでなかったのである。そして、大谷が病院から去って以来、冷蔵庫の中の物がなくなるといふことはなくなった。

それから数日後のある朝食時、私は食堂の椅子に空席が一つあることに気付いた。食事時の席は決まっているから、いないのは、名前を聞けば誰でも知っている大手化粧品会社の宣伝部長であることが分かる。かれは、私と同じ精神療法のグループのひとりだった。

「おい、ガッチャン部屋で誰かが騒いでるよ」

誰かの一言で皆は一瞬箸を止め、病棟の端にあるその部屋の方角に耳を澄ませた。たしかに、遠く離れた隔離部屋から、喚き声とドアを激しく叩いたり蹴ったりする音がすかに聞こえる。

「北山さんだよ。かれ、外泊訓練で酒を飲んでしまったスリッパしたんだ」

いったん断酒を誓った人間が、再び酒に手を出してしまうことを、アルコール依存症の世界ではスリッパと呼ぶ。

アルコール依存症者が酒を断つことはきわめて難しい。だ

「結城さん、宣伝という仕事は因果なものですよ。表面はかっこよく見えて、若い人なんかの憧れる職場だけれど、実際は過酷な世界です。特に、われわれのような化粧品業界は広告宣伝が勝負。テレビコマーシャルの出来ひとつが売上げに大きくかわるとあつては、神経が休まるときがありません。酒でも飲んでいないとね。それに、ディレクターやデザイナーやフォトグラファーといった派手なカタカナ職業の連中やタレントを相手にしていると、つい生活が乱れてしまつて……あげくの果てがアル中ですわ」と自嘲的な笑いを浮かべていた姿を思い出す。

その翌日から、北山の姿は病院から消えた。

入院して二週間が経った頃、娘の蓉子が手紙をくれた。『今回のこと、やっと気付いてくれて本当に嬉しいです。これからは、家族が以前のように仲良く、うまくやっけてくれるよう、前向きに考え行動するつもりでいます。ただ、おとうさんを責めるわけではないけれど、おかあさんはもちろんのこと、私や弟の克史もまた被害者であることを分かってください。だから、絶対に治そうね。約束だよ！私が結婚を否定するようなことを言っておかあさんを心配させるのも、家を出て一人暮らしを始めたのも、そして、しきりに海外へ行ったりするのも、おとうさんを見ていて私も思ってしまったものがあるからなのです。小さい頃か

ら、私にとって、おとうさんは自慢のおとうさんでした。それが、お酒のために人が変わってしまったて……人が信じられなくなったのです。今、私も自分自身を克服しようとしています。抽象的で分かりづらく書いたけど、要は、人を本当に好きになれなくなってしまうているのです。そしてまた、おかあさんも、精神的に随分疲れています。完治しようという気持があるなら、もうこれ以上嘘はつかないでください。そして、家族みんなで協力して解決していきましょう。つくった借金を返すために、一生懸命働くことは致し方ないとしても、根をつめて働くことはもうやめよう。それより、おかあさんを愛してください。私たちを愛してください。まわりには、もっとひどい症状の方もいらっしゃることでしょ。その方たちに較べれば、おとうさんは早く気づいて本当によかったと思いませんか。でも、これからが大事だから、がんばってください。会社に行っているときと違って、ゆっくりした時間が流れるのもいいですよ」

涙の粒がひとつ、またひとつと、インクの文字を滲ませていく。

まわりをも巻き込む病——アルコール依存症。それは、酒を断たないかぎり進行を続ける病。そして、ついには死にいたる病。ただ酒を断つことよってのみ回復することのできる病——。

沢木某が薬物の離脱症状に耐え切れず、入院五日目にして自主退院していったあと、二〇五号室に本田明という男が入ってきた。

車椅子に乗っている。両足のふくらはぎから足先にかけて厚い包帯が巻かれ、見るからに痛々しい。だが、五分刈りの頭と浅黒い顔は精悍で、見るからに腕のいい大工と見える。

かれがアルコール依存症に陥ったケースを、ある日の精神療法の一コマを垣間見ることによって紹介しよう——。

ケースワーカーは、高井という五十年配で小太りの人物。眼鏡の奥に光る眼が優しい。メンバーは私を含めて七名である。

「今日のテーマは、黒板に書かれたとおり、『なぜ、この病院に入院してきたか』です。さあ、誰か発言する人はいませんか」

いつものように、高井が切り出す。

「手を上げる人がいないようだから……。本田さん、今日はトップでいってみようか」

指名された本田は、一瞬はにかなだような表情を見せたが、やがて訥々と語り始めた。

「おれは秋田の出身で農家の生まれ。代々の百姓だったから、昔は食うに困らんかったけど、おれが高校出るところ、

開発の地域にかかって田畑の大部分を取り上げられた。それで、百姓では食っていけんから、おふくろと東京へ出てきた。姉が一人いて、もう嫁いでいた。すぐ大工の見習いに入って、十年くらい辛抱して独立した。景気のいい頃で仕事がどんどんきた。一時は十人くらいの人を使ってたよ。もともと酒は飲めん口だったけど、独立して仕事が順調にいくにつれて、大工仲間とのつき合が増えた。それに、大工をしてると、「建前」とか「棟上」とかの儀式があつて、必ず酒がついてまわる。そんな場で飲んでるうちに酒に強くなつて、そのうちに好きになつてしまった。自分が酒に強いことも分かった。そうなると、仕事が終わると、若いモンを連れて飲み歩いたり、大工仲間誘われて飲んだりすることが多くなつた。

金はいくらでも入つてきた。毎月何千万という金を動かして、銀行なんかしょっちゅう来ていたよ。ほんとだよ、これ。今思うと、夢みたいな生活だったな。

二十八のときに結婚して、娘と息子ができた。自分で言うのもなんだが、ほんとに仲のいい家族だったと思う。週に一、二回は家族揃って食事に出かけたり、ドライブに行ったり、映画を見たり……。金があったから、どんなことでもできた。

ところが、十年くらい前から、この不景気でさっぱり仕事が出来なくなつてしまった。新しい建材や建築技術が開発さ

れて、おれみたいな昔ながらの大工はもう要らなくなつてきたことも、一方ではある。

それでも、覚えてしまった酒はやめられず、飲んだくれてた。使つてた人たちは次々と去っていく、気がついたらおれ一人になつてた。でも、おれはまだ、一旗挙げるつもりでいたんだよ、このときはね。いずれきつと景気はよくなると思つて。でもダメだったね。

もともと、稼いだ金はパーツと使つちまう方だから、蓄えなんて何もない。生活はどんどん苦しくなっていくし、おれは焦つた。焦つてもどうにもならないイライラした気持ちを紛らすために酒を飲んだ。仕事がないから、朝から酒を飲むようになってた。女房にしてみたら、働く意欲のない、朝から酒喰らつてるぐうたら人間にしか見えなかったんだろうな。

でも、おれ、どうしようもなかったんだ。大工しか能のない男だったから。女房から離婚届を突きつけられたときには、正直言つてホッとしたよ。だって、そのときは、女房子供を養つていく自信なんてなかったものな。娘と息子は女房が引き取り、おふくろは姉のもとへ去つていった。四畳半一間の下やみみたいな部屋で一人していると、こんな惨しいことはない。酒はいつの間にか安物の焼酎に変わつていたな。ある日、酔っ払つて酒を買いに行こうとして、アパートの階段から落ちた。それがこのザマでね。外科で応

急手当を受けて、その先生に紹介されたのがこの病院だったってわけだ。以上、発表終わり」

語り終えた本田は、頬を赤らめ、いかつい身体をすくめるようにして下を向いた。

「そうか……。本田さんみたいへんだっただね。それで、今はどう思ってる？」

「どうって……？」

「自分がやってきたこと。それから、これからのことについて、どう思ってるのかな」

高井ケースワーカーが促した。

「うーん……ヘタな人生、というより、バカな人生を送ってきたなと思ってるよ。ここを退院したら酒をやめて、もう一度人生をやり直そうと思ってる。だけど、仕事があるかどうか、それが心配なんだ。娘はもう嫁にいつて子供も生まれたらしい。息子も一人前になって、今度結婚するんだって言いやがる。たまに手紙くれるけど、女房は再婚したから会うわけにもいかねえし……。だから、せめて、おふくろだけでも呼び寄せて、一緒に暮らせたらいいなと思ってる……」

「そうだね。人生をやり直すというのは、いい言葉だね。仕事があればいいな。何か困ったことがあれば、いつでも相談に乗るからね」

高井は本田に向かってそう言うと、メンバーの顔を見渡

し、

「本田さんは、もう自分の過去の失敗を認めている。これが大事なのです。みなさんも、今なぜ自分がここにいるのかということを真剣に考えてほしい」

と締めくくった。

いつもながら、精神療法の時間は私を苛立たせる。

この病院に入院してくる人たちの来し方や、それまでの人生は人それぞれであるけれど、入院にいたる経過は何と似ていることだろう。

不運、失敗、挫折、失望、酒、アル中、借金、離婚、家族の崩壊、友人の喪失、信頼の喪失、自責の念の拡大、生きる希望の喪失、死への希求。こういう順序で書いてしまえばこれだけのことが、そのひとつひとつが、人が語ることによって、何万倍、いや何百万倍もの迫力を持って迫ってくる。私もそのひとり。

けれど、もう時を遡ることはできないのだ。

入院生活にも一定の安定したリズムができ、外泊訓練が認められる日を待ちかねている頃、朴成正の様子が少しおかしいことに私は気づいていた。

朴は、私より一週間ほど早く入院し、ルームメイト(?)の中では最も寡黙で、必要なこと以外は一日中ほとんど喋らない。皺深い顔に懐疑の翳りを湛えて、ベッドの端に腰

掛けて端然と床を見つめていることが多い。

そんなかれだが、近頃はどこかイライラと落ち着きのない態度が顕わなのである。

ある日の朝、私がタバコを買いに外出しようすると、朴が、

「結城さん、おれのも一緒に買ってきてくれないか」と言う。

よもぎ野病院では、タバコは所定の場所で吸うかぎり禁止されてはいない。買物や散歩など、一日に一度、一時間以内の外出は許されているのだ。但し、外出と帰院には必ず許可と報告が必要で、買物をした場合は、買ったものをすべて看護師に見せてチェックを受けなければならない。「一緒に買ってくるのはいいけど、朴さん、たまには外の空気を吸う方がいいよ。こんな部屋の中ばかりにいたら、気分が減入ってしかたがないよ」

私はつとめて快活に言ったつもりだったが、かれは、そんな私の言葉が耳に入らなかったかのように続けた。

「今、おれが外に出たら、きっと自販機の酒に手を出してしまう。それがわかるから怖いんだ。こうして、ここで毎日日プログラムとやらをやっている、おれには何の効果もない。頭では酒をやめよう、やめなければいけないと分かっている、身体がいうことをきかねえ。身体が酒を欲しがって、夜も眠れねえ。ほら、今も身体が酒を欲しが

って泣いていやがる……」

かれにしては珍しく、自分の心を打ち明けた。

「朴さん、分かるよ、その気持。だけど、酒一ヶ月、クスリ一週間というじゃないか。朴さんは、入院してちょうど一ヶ月くらいだろ。今が一番苦しいときだ。今を過ぎると楽になるよ。だから、な、がんばろうよ」

私は、慰めるつもりでそう言ったが、

「結城さん、慰めてくれなくてもいいんだよ。それに、おれ、これ以上入院したら入院費が払えねえ。今でももう限界なんだ」

と、私から眼を逸らして言うと、再び床に視線を落とした。

「入院費のことは、ケースワーカーの人に相談したら？市の福祉課と一緒にしてくれるはずだよ」

朴成正とのそんな短い会話が、かれと話した最後となった。

昼のプログラムを終え部屋に戻ると、朴のベッドの周りにはきれいに片付けられていた。そして、かれが再び二〇五号室に姿を見せることはなかった。

私は、心の底からいわれない怒りが湧き上がってくるのを覚えた。酒をやめることを拒否する何ものかに対して、私は激しい怒りを覚えた。在日韓国人二世として、おそらく、決して幸せとはいえない人生を送ってきたであろう朴成正との別れに対して、そして、社会の底辺を這いずり回

らなければ生きてゆけない人たちに追い討ちをかけるような、「アルコール依存症」という病気に對して、私は身も心も震え立つような怒りを覚えたのだ。

杉原豪が退院する日がやってきた。

三ヶ月間の入院期間を全うしての無事退院である。

入院してまだ日の浅い頃、入浴中に見た背中一面の真っ赤な薔薇の刺青に度肝を抜かれた私も、その後のかれの生活態度や人柄に、どこか惹かれるものがあつた。もし、かれが、普通の人並みの人生を歩んでいたら、きつとひとかどの人物になっていたことは間違いないと思う。

よもぎ野病院では、退院する人は、その日の朝のミーティング時に、医師や看護師を含めた全員の前で「酒歴発表」もしくは「薬歴発表」というものを行う。いわば、病院生活を締めくくる、総決算としての決意表明である。

前夜、

「おれは口ベタだからのう」

と言って、鉛筆を舐め舐め四苦八苦して原稿を書きながら、

「結城さん、ここはどう書いたらええのかのう」などと、何度も私に尋ねてきていた杉原だったが、発表は、簡潔な中にも要点を押さえた立派なものだった。

「私は、この病院に入院した当初は、ヤクザの家に生まれ

のように寄り添っていたことは言うまでもない。

よもぎ野病院に来て二ヶ月が経った。

ようやく、というか、もう、というか。この二ヶ月間が、私にとって長かったのか短かったのか、私には分からない。ただ、娘の蓉子が手紙に書いてくれたように、非日常のゆつくりとした時間の流れが、私に、人が生きるためにほんとうに大切なことは何かということを教えてくれたような気がする。

前夜、私は、明日の酒歴発表に備えて、夕食後の時間をその原稿書きに追われていた。

すると、いつの間にか、本田明が私の傍に立っていて、私の横顔を窺っている。

「あ、本田さん。何か用事でも……」

「いや。べつに用はないんだけど……」

「じゃあ、なに？」

私は、原稿の筆が進まないことに苛立っていたので、言葉遣いがぞんざいになっていたのだろう。その気配を察知した本田は、

「いや、結城さんがいなくなったら、淋しくなるだろうと思って。すまねえ、じゃまをしてしまったな」

と言って、そそくさと自分のベッドに戻っていった。

私は自分の言葉遣いがぞんざいだったことに気がつき、

できたことを呪い、運命の非情さを嘆いてばかりいました。けれど、それは、すべてを他人のせいにしていたからなのだということに、今やっと気づきました……」

という言葉で始まった杉原の発表は私の心を打った。

「……人生をやり直す、と口で言うのは簡単ですが、実行はきわめて難しいと思います。でも、私はやり直さなければなりません。クスリはもちろん、明日からは、このヤクザ稼業から足を洗って、まっとうな人の道を歩むつもりです。杉原組は、今ここに解散しましたことをご報告いたします。みなさんも、それぞれ、いろんな道を歩んでこれたことでしょうが、この、よもぎ野病院を出てからは、ほんとうに生まれ変わった気持ちで生きていってほしいと思います。がんばってください。永い間お世話になりました」

杉原豪は深々と頭を下げた。

そのとき、発表の場である食堂につながる廊下の片隅で、隠れるようにしてその様子を窺っていたひとりのセーラー服の少女に、私は気づいていた。私はその少女に、

「おとうさんは、立派に更正されて退院されますよ」

と、目顔で合図を送った。私の思いが通じたのか、少女は軽く頷くと、また廊下の角に姿を隠した。

発表が終わると、杉原は二〇五号室に戻り、あらためて私と本田に礼を言うと、荷物をまとめて病院を出て行った。かれの傍には、髪の良いセーラー服姿の娘が、さながら妻

鉛筆を置いて本田の方に向き直った。

「結城さん、死んじやだめだよ」

真剣な眼差しを向けて本田が言ったのはそのときだった。「絶対に死んじやだめだ。どんなことがあっても生きないとだめだ。これ、約束してくれるか」

本田の瞳は、一途な真剣さを湛えて輝いていた。

私はそのとき、かれもまた私のように、一度は自らの手で死を選ぼうとしたのだということを悟った。

「約束するよ、本田さん」

私は右手を差し出し、握手を求めた。その手を、本田は両の掌で固く包んで握り締めた。私の胸に熱いものが広がった。

幸いにして、私のアルコール依存症は比較的軽度だった。酒を断って二ヶ月。多くの人たちが苦しむという離脱症状に見舞われることもなく、回復へのプログラムも、気持ちに中だるみはあつたにせよ、とにかくここまで無難にこなしに来れた。

だが、問題はこれからだ。

病院を出たあと、本当に酒のない生活が送れるのか。三十年この方、飲み続けてきた酒を断つことが本当にできるのか。会社に戻れば、周囲の手前もある。アル中で入院したことを隠すつもりはないけれど、かれらの理解度は低いだろう。退院後のあらゆる生活シーンを想像すると、



井上梨白

いのうえ りはく

みちひろ

1946年大阪市に生まれる。本名井上理博

大阪大学経済学部を卒業後、アサヒビール株式会社に入社。マーケティング部宣伝課課長、東京支社営業企画部長、流通研究所副理事等を歴任し定年退職。現在にいたる。

趣味は読書、テニス、水泳。水泳は、かつて、メルボルンとローマ両オリンピックの銀メダリストで世界記録保持者でもあった往年の名スイマー、山中毅氏と一緒に泳いだこともある本格派。アル中が嵩じて永年中断するも、53歳のときには、横浜市のマスターズ大会で三位に入るなど、まだまだ捨てたものではないと自負している。

いずれにしても、拙稿を最後まで読んでいただき、書くことへの勇気と希望を与えてくださった審査員の先生方並びに出版社の皆様方に心より感謝申し上げる次第です。

いづれにしても、拙稿を最後まで読んでいただき、書くことへの勇気と希望を与えてくださった審査員の先生方並びに出版社の皆様方に心より感謝申し上げる次第です。

くそ面白くもないテーマの作品が受賞したことに、正直なところ驚き、戸惑っています。日増しに生きにくくなっていく今の世の中。人の心は荒み、金と功利だけが幅を利かせる社会にあつて、そこからはじき出された人たちのどん底の生活の中にこそ、人が生きるための本当の姿があるのではないかと感じています。私が体験したそんな思いを伝えたくて、本作品を書いてみました。

受賞の言葉

井上梨白

と詠んだ歌で締めくくった。
最後に病院を出る前、私は仁科看護師に、もう一度、私が入ったガッちゃん部屋を見せてほしいと頼んでみた。明日から始まる、私の生まれ変わった人生の道標として、三日間を過ごしたこの部屋での時間を、脳裡に焼き付けておこうと思ったからだ。
彼女は、今その部屋は使っているので入ることはできないと断ってから、私をその部屋の前まで連れていってくれ

断酒への誓い新たに踏み出せる
わが道標よ よもぎ野の秋

私は、私の酒歴発表を、

私の心は重苦しく沈み、不安がとめどなく襲ってくるのだ。だがしかし、私は酒を断たねばならない。それは、自分が生き延びるためではなく、妻や子供たちをはじめとする、多くの人たちへの贖罪のためである。よもぎ野病院は、私の進むべき道に明確な道標を与えてくれたのだから。
翌朝は晴れ渡り、コバルト色の秋空が広がっていた。窓の向こうの雑木林は、ここに来たときは濃い緑が太陽の光をはね返していたはずなのに、今ではもう赤や黄色に色を変え、あたりには秋色が立ちこめている。

た。ここに通じる廊下のドアにも鍵がかかっていて、他人は決して入り込むことはできないのだ。
頑丈そうな鍵のかかったそのドアの前に立ったとき、私は再び手入れの行き届いた公衆便所のおいを嗅いだ。それは、不思議な懐かしさを伴って、私の鼻腔をかすめて過ぎた。

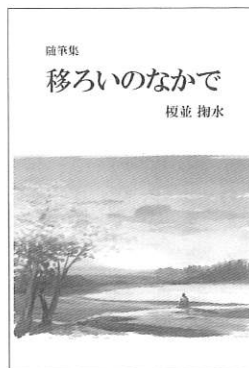
水掬並榎

著

移ろいのなかで

随筆集

第4回文芸思潮エッセイ賞優秀賞受賞作「髪匂う朝に」所収！



ブイツーソリューション
税込 1575円

ご注文は 082-893-0484 (榎並) まで